

越を待受たと云はんばかり、ヒヨイ〜飛歩いてお出を喜ぶもの、如く、尙お袖を引張るから何處迄行くのであらうと跡に尾て行かれると権現の後へ出て、山の際を見ると狭くもあらぬ洞穴がある、トウ〜上人をその穴の中へ引張り込んで了つた上人不思議の感に打たれて、中へ這入つて見られると下にはチャンと葉が敷て、此處へお座んなさいといふ真似をするからその意を覺つて、程宜き處へ座を構へられとそれへ木の實だの、或は果物のやうな物を持つて来て上人の前にツラリと並べた、洞穴は山の土が追々崩れて自然と穴が出来たもので、素より深くもあらぬ狭い穴だが、猿共はそれへキチンと糞などを敷て、木の實果物を上人の前に並べたから祖師上人大に不思議に思はれて「ア〜優しきものかな、可憫相に同じく動物に生れながら、畜生道に生を享たるのみで物云はんとするも能はず、無念無想の獸なれども、外の獸と違つて此猿のみは人類に近い者である、此世に猿と生れて人間界を羨み、未來はごうか人間に生れんといふ淺猿しき身でありながら佛果の得難きに

苦んで此身の觀經を乞はんが爲か？、左もならばあれ、假令獸類なりとも佛果を得させんと我本願なり、優しの心や、さらば經文を讀誦して遣はすべし」と、提婆品をお讀になつて居る處へ、俄かに聞ゆる人馬の物音、續いて揚げたる鯨波の聲は手に取る如く、ハテ不怪しやと上人佞と聲する方を見れるとコヘソモ如何に、庵室の方に當つて炎々として燃上る火の手は天を焦さんばかり、闇夜を破つて俄かにパツと四邊を照す、スワコン大事と、洞穴より歩み出で、社の崖際に立つて下を望まれると、今パチ〜と焼出したのは粉ひもなき我庵室、扱は此事あるが爲に彼猿共が我を此處に避しめたるかと、瞳を凝して尙能く見られる内、火焰を潜つて彼方此方に駆違ふ數多の法師、法衣を纏はずして一様に着込を着し、袈裟を以て頭を包み、身拵へ涼々しく手に〜得物を振翳して、犇々と押寄せたるは疑ひもなき他宗の法師輩、庵室へ火を掛て置て不意に驚き狼狽へるお弟子と信徒の容赦なく、ソレ日蓮を捜し出して殺して了へつと呼はる聲や、手に取る如く聞へるからハチサテ無

惨の破戒僧共、我此處に在を知らずして、徒に騒ぎ廻る笑止さよと瞳を放たず見て居られる、折しも持て来る風に煽られ、焰は一時にポーッと上つたから、此光りを便りに寄手は愈々荒狂つて、白刃を援連れ相手を嫌はず渡り合ふ有様、この様子を見られたる上人大きに驚き、若し檀徒やお弟子に怪我あらせては相成らんと、頻りに怨敵退散の經文を唱へて無事を祈つて居られたが、抑もこの寄手は長樂寺の導阿を始めとし、淨光妙寺の護念坊、入澤の東淨坊、極樂寺、大日なんといふ處の悪僧共が同氣相求むる破戒の坊主を語らつて、日蓮宗の日にく盛んなるを妬んで、祖師上人を亡ものにせんと今宵の闇夜を幸ひ押寄せたのだが、元來松葉ヶ谷の庵室は後は切斷つたる如き崖で、前の方は往來になつて居る、そこで前から攻られたたのだから、お弟子方も敵對せぬ譯に行かん、この時六老僧の一人日持上人、手早く様先の柱に凭つて向ふを舵度見渡すとその勢凡そ二三十人、手にく松明を振照して居る様子を見届けてカラ〜と打笑つて、且取るにも足らぬ木ノ葉法師、方々驚か

るゝな、併し手を束ねて居る場合でもない、近附き来らば散らしくれん」とハヤ腕を捲つて躍り出んとなしたる時、此席に列つて居つたる平田次郎、大公儀の役人とても理不盡に踏込めざるこの庵室、何血迷ひしか悪僧共、飛んで火に入る夏の虫その儀ならば一人残らず斬捨てくれん」と刀の鯉口寛げて、近附く唐瓜斷割りくれんと身構へる、續いて速る進士太郎、大ヤア憎くき僧共推參なり、イヤ及の斬味を試してくれん」と目釘を濕し柄に手を掛け敵を目蒐けて斬入らんすなしたる時、日持上人暫しとこれを押止めて、且ア、イヤ方々、多寡の知れたる悪僧輩、口に經文を唱ふれども鳥の如き破戒の僧、身に三衣を纏へども狼の法衣を着たるに同じく假令何千人押寄るとも何程の事やあらん、なれども我又之に刃を向る時は、これ則ち大聖世尊の殺生戒を犯すものにして、後に至つて師の汚名を來さんは必定なり、オ、幸ひ、この棒を以つて寄來る敵を打拂はれよ」と、妙法の旗を揚げたる旗竿を敵多取出し、太郎以下の人々へ之を渡される、早速の氣轉に心を得て、妙法の旗を

取て鉢巻とし、各々旗竿を掲げてペラ／＼と駆け出す、中にも強忍坊淨寛は坊主頭に例の旗を取つて鉢巻を確乎となし、兩の手に旗竿を振廻し、眞先に躍り出でる、續いて平田次郎、進士太郎の兩人は同じく刀を後へ廻し、一人も餘さず打のめしてくれんと勢ひ猛く駆出す、味方に過ちあらせじと、諸方に眼を配つて進み出づる日持上人、群がる法師輩の中へ面も振らずペラ／＼と乗込んで、當るを幸ひ縦横無盡に掻拂ひ、リウ／＼と旗竿を振廻して四角八面に確立てる、元より敵は味方の五六倍、彼方に追るれば此方に現はれ、前を拂へば後ろに潜つて、此處を先途と争つたが、寄手の坊主は生れながらの沙門の身、得物を持つても大刀打術を辨へた奴はない、味方は假令小勢たりとも、何れも武門に生れて鍛へし手練の早業流石の悪法師等も持餘し、打仆されては逃廻り、強力の強忍坊が竿先に強か撲たれて氣絶するもあれば、眞向微塵と打ち下され頭を抱へて汚く後を見せるもある、中にも長樂寺の導阿、淨光明寺の護念、東淨坊、周防坊丁戒、淨忍の面々、云甲斐な

しと四面八方に駆廻つて指揮をするけれども、手強き竿先に追捲られ、生命あつての物種と、何れも尻込するのみ、我飛込んで打つて蒐らんといふ勢ひの奴がない、これではならぬとカツシ／＼と味方を望んで馬乗出した導阿坊、日持上人が突立つたる有様を見て、能き敵御参なれと物をも云はず斬つてかゝるシヤ物々しやと日持上人、今こそ頭を圓めて行ひ澄して居られるが、昔取つたる杵柄の腕は厭まで強の者、力量優れて此等の法師に立向ふのは何でもない、手にせる旗竿を取直すよと見る間に、エイと突出した狙ひは遠はず、導阿が腰の邊りを強かに突たから何かは堪らん、ドターリ、馬より下に突落されて起も上らぬ、平田の次郎は最前より護念を相手に戦つて居つたが、之も等しく馬より下に突落されると、見たる敵勢はハヤ崩れ立つて、右往左往に混亂する時、遙かの彼方より砂煙りを蹴立て、間を貫く大音聲、〇「庵室の方々に物申さん、上人には何れに在するや、御身に恙は非ざるか、寄せたる者は何者ぞ、我手勢を具して御加勢に参じたり」と呼はる聲、扱は加勢の

者あるぞ、僅か庵室の人数でさへ、敵し兼たる此中へ、今又新規の者が加はつては叶はぬと、寄手の面々肝を潰し、近附くまゝに見て居ると、新手の兵凡そ二三十人、何者なるか大将と見ゆるは馬上優かにユラリと跨り、鞭を採つて手勢を麾くその有様、如何にも立派な武士と見たから、敵の悪僧大きに怖れてパツと途を開くと、馬上の武士は四邊を屹と見廻して、「泰平の世に火を放ち、備へもなき庵室を襲ふとは盗賊か但しは一揆か、何れにもせよ不届至極の白徒共、ソレ早々に斬捨ていッ」と激しき下知、心得たりとハヤ立向ふ數多の同勢と見たる寄手の悪僧共「ソレ逃出せよ、最早や庵室は焼失たり、嘸日蓮は死したるならん」と呼はり、手負を助け得物を擔いで、己が任意々々道々の體で引揚げる、處で今此處へ駆付けたのは上人隨一の檀徒四條金吾で、此夜松葉ヶ谷の方に當つて火の手盛んに揚るを見て、上人の上を氣遣つて手勢を引具し飛んで來たので、斯る修羅場とは思ひも掛けなんだが、今敵の退くを見て飽迄追駆る所存はない、只上人の身の氣遣しさに敵の

引揚るに任せて居ると、此處に又頻りに戦つて居つた進士太郎は、今四條金吾が駆附たのを見て大きに喜び、太ヤ、これは四條殿でござるか、先づ〜我等味方に手負もござらん、此義は御安心下されたい、金イヤ、それは何より頂上、シテ上人には……と尋ねる内、此噂を聞いて追々此處へ駆附け來つて富木播磨守、續いて在原左衛門、各々一手の勢を引連れてやつて來る、そこで銘々が火を消して見ると、本堂、客殿、庫裡に至るまで悉く焼けて了つて、誰一人として怪我をしたといふ者がないが、氣が附て見ると肝腎の祖師のお姿が見へん、ヘテ何となされた事であらう、若しも猛火に包まれて生命をお預しなされたのではあるまいかと、お弟子は更なり檀徒の面々大きに胸を痛めて、彼方此方と焼跡を調べて見るがそれかと思ふ事もない、左らば早くも此場を遁れさせられたのかと稍安堵をして、それから手分をして八方を捜して居ると、例の權現神社の後に當つて微かに聞ゆる讀經の聲、扱こそ彼處に災をお避になつたのかと、手の舞ひ足の踏む處も知らぬ大喜び、御聲を使

りに闇を辿つて来て見ると、上人は洞穴の中に端然として座を占られ、此騒ぎも知られざる有様で經を讀でお在になる、ヤン悦ばしや、御身に恙はなかりしかと、イヤ／＼と駈寄つて、〇これは／＼お上人には何時の間に……、只今コレ／＼斯く／＼の大騒ぎ、何しへお驚なされしかと、一同大きに心配をして漸くこれ迄尋ねて参りました、先はお身の上に恙なき御様子、何より以つてお自出度う存じます、且イヤそれは大儀千萬、我も凡そ今宵の事あらんはこれを知れり、去にても一同怪我過ちのあらざりしか、誠に以つて氣遣しく存するが……、〇御安心下さりませ、誰一人手紙を負ふたるものはござりません、且オ、それは／＼、シテ我此處に在ること如何にして氣附かれしや、〇さればに候、方々手分をして、これへ参りますると、讀經の御聲がいたしたので、漸くお迎へに参りました、で又上人には如何にしてこれへはお出なされしか、且イヤこれには不思議の話あり、それは緩々話すとして、扱不都合極まる他宗の法師、我身の破戒を顧みずして日蓮が布教を斯く

造妨げるとは云はう様な墮落の僧なれども、君子は罪を憎んでその人を憎まず、尙此上にも撓まず教を布ば遂には彼等も法華の信者たらんも計り難し、去ば彼等逆も怪我過のあらん事は素より好む處にあらず、それ故見らるゝ如く今も自他共に過ちなき様と祈念を凝したる次第、然るに進士氏も平田氏も同じくこれ武門の意氣地定めて刃を以つて立向はれたであらうの、〇その義は決してお氣遣ひあるべからず、斯様々々にして敵を追拂ふ處へ、折能く四條殿と富木殿が駈附られまして……、且ヤレ／＼それでこそ、流石はお心掛の御兩土、日蓮殆ど感服の外はござらぬ、それにしても日持が御兩所を諫めたる舉動は、昔し蓮生坊の悔悟にも優りしもの、何れもの取計ひ此上はあるべからずと、上人悉くお喜びになつたといふが、何故又蓮生に優る働きたなぞと仰せられたかと云と、その昔法然上人大原問答の時、他宗の法師等集り來つて法然上人と大問答に及ぶ、然る處、出る奴も出る奴も皆問答に負て旗を卷て尻込をして、了ふ此時法座の隅に始終を窺つて居つたる熊谷蓮生坊は、

感ずる處あつて圓頂法衣の身となりしとは云へ、以前が以前だからどうしても荒つばい、問答果ると突然それへ袖の下へ忍ばせて居つた鉈を投出し、カラ／＼と笑つて蓮數にも足らぬ似非而法師、今日師に打負してそその身の仕合せ、若し打勝たば此鉈を以つて一人残らず二段に斬て捨んと思ひしに、サテ／＼生命冥加の法師兼生命を保つて歸りしは勿怪の幸運、アナ僥倖の者共かなと獨言を云つて呟いて居ると、斯くと問答めたる法然上人、法何と申す、其處許今は三衣を纏ひながら、只今の舉動を見るに正しく心は以前に異ならず、既に佛門に入つて念佛の行者となり、柔和忍辱の法衣を着て頭を圓めながら、生命を斷つべき刃物を携へ此座に來るとは何たる事ぞや、サテサテ危うかりし事なるかな、左様な心掛にては沙門に歸したる甲斐あるべからず、我今汝に一首の和歌を授けて汝が此後の戒めとせん、かまへて忘るゝことなかれと仰せられて、その座に有合せたる料紙硯を引寄せ、サテ／＼と認めて蓮生坊の前に差置れたのを見ると、『何故に斯くなりしぞと己が身の姿に耻よ

染の袖』と書ある、之を打見たる蓮生坊大に恐入つて忽ち柔和の心を起し、堅く誓つてその後は殺伐の心を慎み、只管念佛を唱へて一生を終つたといふ事がある今日蓮上人も不圖此事を思ひ合されて、日ごとく日持が取計ひ昔しの蓮生坊と反對にして遠く優れり、彼は法座に並んで密かに刃物を隠し、師の法然を庇はんとし、却つて戒められ、之は惡法師等が打物を携へ、或は盜賊にも等しく佛寺に火を掛け非道の舉動、之等を打拂ふに腰に帶せし利劍を用ゆるこそ當然なるに、此時に臨んでも尙法華經の慈悲を垂て劍を抜かしめざりしは、熊谷入道に優ること遙かなり、則ち法華經の第五に説かせられしは此處なるべし、アナ喜ばしき心掛かなと、日持上人の舉動を大層お褒になつた、處で何時迄此洞穴にお置き申す譯に行かんから何れか然るべき處へ上人を誘はんと考へたが、素より庵は焼失せて了つたのだから、碓と困つた、と云つて迂濶な處へお伴をしては、鎌倉中の法師等が眼を敬て、居るから如何なる事を仕出來すも計り難い、何づれも大きに當惑をして居ると、富木播

摩守殿が「お痛はしき此度の災難お察し申す、外々へお出までもなく、是より直ちに予が領地へお越あるやうといふお言葉、大きに喜ばれたる日蓮上人、日播摩殿のお情け忝く存する、何を申も今この場合、嘸御迷惑には候はんが仰せに随つて御厄介ながら……と御返答に及ばれる、そこで播摩守は腹心の家來に云合めて案内をさせる、上人の方は日昭、日朝、日興の三人のお弟子、召使ひの炭太郎、熊王四郎の人々を召連れて、この場から直に下總の中山へお越になる、程なく下總中山の若宮と云つて、その頃富木播摩守の御城下へ着せられると、上人は未だお住居も出来ぬ内から晝夜を分かぬ御説法、日を経るまゝに播摩守の一族宗谷教信、太田清明、中山民部少輔保連、秋元豊實などの連中が追々信仰して、厚く上人を敬つて檀徒となると、従つて下々の百姓達も法話を聞て渴仰をして居る、と、その頃この中山の近邊には到る處疱瘡が流行つて、其方でも此方でも疱瘡に取附れて大きに惱まされ、中には最愛の一人子を亡するものもあれば、年頃の愛娘を持つて行か

れて親達は大騒ぎ、マ當今ならば種痘をしてこの災を避けたり、又は假令冒されても幾分は輕くて済むから滅多に生命を奪れる様な事もないが、その頃では勿論この種痘といふものがない、そこで天然痘に罹つたらばそれこそ了ひ、大抵は生命を賭けて療養をして、都合よく行つたとしても痘痕の紀念を遺すといふ有様、先づこの疱瘡に罹ると頭痛が三日で出揃ひが三日、本膿と云つて膿を持つ間が三日と、癒るのが三日として都合十二日間、この間は病人の親などは寢食を忘れて狂氣の如く又今の様に病院といふ者もないから病氣はそれからそれへ蔓り次第、盛んに毒を傳へるから忽ち病勢が募つて彼方にも此方にも病人が出来るといふ始末、子を亡つて悲嘆に暮れ、兄弟に先立れて泣叫ぶ聲は憐れともいぢらしとも譬へやうがない、是を目前に見られたる日蓮上人哀れを催し、如何にぞして此禍を救ひ得せんものと、自ら鬼子母神の像を刻まれて疱瘡神退散の祈願を籠められる、名にし負ふ荒神の鬼子母神、千人のお子を儲けられたといふ位の神様、何卒疱瘡を全滅なさしめ玉

へと一心に祈つて、病人のある家毎にその御符をお配りになると、上人が祈念の功德に顯はれたるにや、さしも激しかりし痘瘡も忽ち影を潜めて、バツタリ大痔の退いたる如く、現在患つて居る者で十に八九は醫者も六ヶしいと匙を投たる者迄も、生命を全ふして全快をする、扱斯うなると親兄弟の喜びは譬ふるに物もなく、靈驗顯著き上人の徳に悉く歸依して、俄かに隨喜渴仰の涙を垂れて界限の甲乙談ひ合つて御慰報じとして若宮に六間四面のお堂を建立し、此處へ彼の上人御手彫の鬼子母神を安置し、上人に願つて開堂の式を擧げて貰つて祈願所とする即ちこれが今の世迄も名の轟いたる正中山法華經寺、日本の五大本山と崇められて居るが、此處の御本尊の鬼子母神は右辯じたる如く、祖師上人がお刻みになつたる尊いものであるといふこと、然る處、此方の鎌倉在松葉ヶ谷に於ては、檀徒の面々御相談の上、焼跡を奇麗に取片附けて地を均し、彼の他宗の悪僧輩に焼拂はれた以前に優して、最も立派なるお堂を再建に及び、敵たる法師に之れ見よがしにしてくれんと、早速御普請

に掛られたが、越て翌年の弘長元年二月下旬、漸く再建出来になつて見ると、以前五間四面であつたる庵も、今度は本堂が七間四面、庫裡、方丈、客殿に至るまで充分念を入れて建築いたし、その結構の善美なる、凡そ當時鎌倉に於ても滅多にあるまいといふ位、取急いで此事を下總にお在の上人に申上ると、大さにお喜びなされたる祖師上人、ヤレ／＼忝けなや、他力本願を以て我庵を二度迄建立せられしとは謝するの外なし、イデ此上は自身松葉ヶ谷へ立歸つて開堂供養を兼ね、再び妙法の旗を鎌倉へ押立ばやと、別を惜む若宮の檀徒に送られて下總を跡にし、松葉ヶ谷にお立歸りになつたのは同じ年の五月三日、急がぬまゝに途中の信者に引止められて日を暮し、若宮を發つて三日目にお着になると、足超てお待衆になつて居たお弟子と檀徒の人々、道の四五里もお出迎へになつて松葉ヶ谷に着て見られると、以前に變る美々しきお堂、上人笑傾けられて、且サテサテ一天四海皆歸妙法、斯く迄心を盡されし方々の志し忝なし、一同一方ならざる御心勞でありしならんと御挨拶に及

ばれて、先づ第一に御本尊として釋迦牟尼如來を安置して、其の外の菩薩の像を型の如く並べて、翌くる日早天より開堂供養を行なはれる、と、先の日己れ采配を振つて松葉ヶ谷に押寄せたる極樂寺の良觀僧都、夜討の節に出會つたるは紛ふ方なき弟子の面々、目指す日蓮は見へざりしもその後行衛知れずと聞く、恐らく彼夜狂火に包まれ焼死したるに相違なからん、去すれば此後我宗に手向ふ者のありとも覺えず、愈々宗義の蔓らんこと疑ひなしと悦に入つて居ると、不思議や、天に翹り地にも潜つて居つたるものか、日蓮此度松葉ヶ谷に立歸り、以前に優る美々しき室を再建に及びたる剩へ、開堂供養をなして妙法の旗を翻せりと打聞て驚くこと大方ならず、打捨て置かば宗門の衰微と取るものも取敢へず、同じ惡僧の光妙寺の良忠、大佛寺の隆觀などと、呼る、連中を召集め、何とかして再び日蓮に辛き目見せ、此地を遠くのか亡き者にせでは、此末如何なる事に成行かんも知れずと、額を鳩めて此處に惡計みの語らうといふ、上人伊東の御難と相成るの一條……。

第八齣 伊東の御難、漁夫彌三郎上人を救ふ

鎌倉極樂寺の良觀坊は、性質抛けたる上に飽迄日蓮上人を敵とし、上人が再び歸つて來られたと聞より大きに狼狽へ、外々の惡僧共を語つて今の内に遠ざける工夫をせねば、此上勢ひ熾んとなれば如何なる事を仕出來すと計られぬと、種々相談をして見るがどうも問答では負るし、夜討を掛ても又々失敗るやうでは何にもならん、こりやア一層上へ讒言をして公儀の手を藉り、彼を亡き者にするか此地を遠ざける外はないといふ事になるすると、此頃の執權は北條時宗で、未だ小供の事だから北條越後守長時といふ人が後見をして居る、この長時と良觀は俗縁の間柄で、長時の方でも良觀を二なき智識と信仰をして居るのを幸ひ、良觀坊から先づこの長時に吹込まんといふので初めはそれとなく佛參の序に上人の事を讒訴をして、次第々々に悪し様に云ひ做して了ひには妖僧だとか不思議の邪法を修する賣僧だとか吹込んだ

から、~~...~~観を信する長時何日かその口車に乗せられて、左様な賣僧は一日も拾置ぐべからずと、早速寺社奉行平左衛門尉頼綱に下知が下つて、速かに賣僧日蓮を刑罰に處すべしとの御沙汰になる、仰せを受けたる頼綱は、直ちに松葉ヶ谷のお堂へ差紙を附けて上人を呼出す、俄かの事だから不思議に思はれたる上人は、扱ば再び安國論の義に就てのお召かと、定め時刻に問註所へ御出頭になる、暫く溜りに控へてお在になると、此方へといふから何か問れる事であらうと思の外、突然双方からバラ／＼と二三人の捕方が現はれて、有無をも云はさず牢内へ打込まれてお了ひなさる、コレへと呆るゝ暇もなくガチーリ、錠前が下つて了つたから譯を問ふべき隙もない、餘りの事に流石の上人途方に暮れ、只呆然として牢内にキチンと座を占られ、心に諸菩薩を念じてザツと眼を閉て居られる、扱て此方は庵に残つたお弟子方、待てども／＼上人のお歸りが無い、その日も暮れて翌朝、スゴ／＼問註所へ出て様子を聞くとコハ如何に、何事なるか分らねども入牢仰付つたと聞て腰も扱

けん計りに打驚き、馳歸つて一同に物語るとこれ、又仰天して一方ならぬ騒ぎとなる、追々此噂が傳はつたから檀徒の人々我先にと松葉ヶ谷に驅附て、如何なる仔細あつて入牢申附られたか、一日も早くその苦患をお救ひ申さんと、その筋々に附つて御歸山の事を願つたが何の沙汰もない、ハテ如何なる事のお疑ひにや、若しや去年出火の一條ではあるまいか、それならば非は他宗の悪僧等に在ること、少しも此方に過失はない、彼悪僧共が我宗旨の繁昌を妬んで火を放けたるに、燒さし曲者にお咎めなくして、却つて庵を燒かれ襲はれし者が罪せらるゝとは不審の至り、その外別に上人を捕へる事のありとしも覺へず、ハテ不審しき事のあるものかなと、一同心を痛めて寸時も早く疑の晴かしと祈つて居ると、此方は平左衛門尉頼綱、その月十二日に至つて上人を牢内から引出して、暫くコリヤ日蓮、其方の庵室に於て去年八月二十七日火を過ち、假令他に延焼せざりしとは云へ、夜中人を騒がせ火消方に盡力させながら今に至るも届出ざるのみならず、此度以前に倍せる美やしき寺を

建立して、開堂供養を行ひしとは上を恐れぬ致し方、確と糺明申附くべき處なれども格別の憐憫を以つて脱衣の上伊豆國へ流罪を申附る、左様心得ツと威丈高に申渡した、寢耳に水の上人は屹と面を上げさせられ、且イヤ、何事も只天下の御法とあるからは、強て申陳する次第ではござらぬが、彼の出火に付ては種々原因のある事なり、若しお尋に預らばお答へせんと存せしが、斯く一言の申開きもなさしめず、只流罪とは一向合點參らぬが……… 類、黙れツ、無駄口利くに及ばん、執權職の御下知なるぞといふ嚴命、出火の過ちに依つて伊豆へ流罪を申附ると聞いたる日蓮上人、且コハ理不盡なり、彼出火こそ八宗の僧侶の爲す處、我宗門を嫉妬して日蓮を亡はんとし、面々の宗門は日に衰微して法華經の榮ゆるを憎み、或は屢々宗論を闘はして我に説破せられたる意恨止み難く、庵室に火を放け此身を焼殺さん爲の計畧なりしも、幸ひ不思議の救に依つて恙かりしが、住居を焼れて居るに由なく某諸侯の勸めに任せて下總に在る内、檀徒の面々心を勞して再び堂を松葉ヶ谷に建立し

舊の如く此處に來つて布教に従ふべき山知らせ越したるを以て、漸く此頃歸つて開堂供養に及びたる處、斯く不意に捉へて一應の御尋もなく、突然引出して脱衣流罪の御法に處せられんとは情けなし、去れども一々詮義立を致さるゝに於ては、多くの人を罰して穩かならざる次第、斯く罪人の出んこと素より拙僧の志に非ず、國の爲め、法の爲め、千難萬苦は敢て此身の辭せざる處、既に覺悟を定めたる身にはさして苦痛とも心得ず、斯くなる上は何をか嘆かん、イザ速に御法に處せらるべし、妙法蓮華經蓮華經と、ハヤ眼を瞑つて題目を徐かに唱へ、更に悪びれたる色もなくハヤ覺悟の體で控へられる、平左衛門尉は執權代長時の差圖を受けて居るのだから何の猶豫もあらばこそ、下役人にそれと呟咐ると、心得たりと情け容赦もあらしく、双方から寄蒐つて上人を引立て、警固の武士周圍を取巻き由井ヶ濱邊を指してやつて來て、浪打際に押据へ危しげなる苦船を繞つて既に漕出さんとする、四邊の老幼傳へ聞いて流人を見んと追々馳集る内、此時は遠近に傳つて遂に松葉ヶ

谷のお弟子と檀徒の耳に入ると、アラ悼はしの御事や、何罪科もなき上人を、伊豆ヶ島根に流すとは何たる事ぞやと嘆き悲しみ、切ては船出の際に御目に掛つて別れを惜まんと、急ぎ濱邊へ駆附て見るとハヤ船を漕出さんとして、上人は船へ乗移つて居られる有様、コハ情けなし只一言にても名残を惜まんと、汀に立つて聲を掛けんとすると、替固の役人嚴かに棒を突立て聲も荒らかに「役、コリヤ、何者なれば囚人に近附かんとする、罪科に依つて流さるゝ者に言葉などを交しなば、その身も上のお咎は免れぬぞ下れ」と脅し附けられ是非なくも、一同只船の中を眺め無量の涙を隠して別れを惜む、船の中なる上人もそれと見て取り、物云ひたげに此方を見詰てお出になるが、これ又同船の役人に掛隔てられて何を語らふ術もない、船と濱邊で互ひの心を目顔に通はし、これが一生のお別れかと悲嘆途方に暮て居る、鬼にも等しき獄卒輩、ハヤ時刻なり、時後れては奉行のお咎め、ソレ乗出せよと差圖の下、既に纜を解かんとしたる時、暫し待つてと韋駄天走り、宙を飛んでこれへ駆

附け來つた一人の僧、見ると汗に身體を潤して目の色を變へ、息を切つて「師の坊はそれに在するか、別れに望んで只一言……と、狂氣の如く濱邊に突立つたのを見ると、これぞお弟子の内でも殊更目を掛け玉ひし日朗師、今年漸く十八の若年ながら師を思ふこと親にも優り、今度の事に就ても寢食を忘れて御無事をのみ祈つて居られたが、祖師流罪と聞て急遽しく今斯く駆附けたので、未だ幸ひに暫し船出の時刻を待つて船は繋いである様子、ヤレ悦しやと群がる人を掻分け押分け「奥、お上人様……と只一言、跡は得云はず先立つものは涙のみ、上人も聲を曇らせ「日、オ、日朗……其方は跡に残つて教化を頼むぞ、奥、扱も情けなの御事や此先如何なる御艱難あるも知るべからず、何卒私をお供にお連れなさつて……と、云ひも畢らず堪へずやありけん、日朗師は上人の御船望んで、ヒラリと飛移られると、これに驚く替固の役人岩淵段吾「段、ヤ、何奴なればこの狼藉、憎くき奴、大切の囚人に乗たる御用船の妨げなすに於ては容赦はならじ、うぬ打撲して懲しめ

くれんと、言葉の下より楯押取つてリウリウ、脊骨と云はず肩とも云はず、處
 嫌はぬ減多打、痛さに堪へず、明アツと作る、日朗師、上人急遽しくこれを制して
 且ヤレお役人先待たれよ、必ず急まり玉ふことなかれ、これを我弟子日朗と云
 ふ者にて、僅か十歳の頃より手許に引取り養ひし者なり、去ば彼又名残を惜まんが
 爲に態々これ迄来りしならん、情けを知らぬが武士にはあらじ、切て一言々葉を交
 させ玉ふべし、如何に日朗、日蓮なるぞ、氣を確かに持つべしと脊撫撥つて呼生る
 御聲の通じてや、日朗ガバと起直つて上人の顔を熟々眺め、目に一杯の涙を泛べて
 明オ、上人様……、未だ御船は出でざりしか、扱も悲しき御身の上、この後幾
 年月の御苦勞艱難、嗚や御不自由の事ならんに、切て此身がお傍に在るならば、又
 御慰め申すよすがもあるべし、何卒御供を許させ玉へ、是非にくと、兩手を突て
 起直らんとするとコハ如何に、先に強く打れて左の腕を打折られ、色さへ變じて物
 の用に立たざれば、漸く右の手に身を支へて起直り、上人を見上げて潸々と涙を流

すいちらしさ、且如何に日朗、汝如何程頼めばとてその義許さるべくもあらず、汝
 が權を以つて打たれ、我伊東へ流さるゝも皆これ法華經弘通の爲なるぞ、聽て再び
 時來り、春待ち得たる優曇華の、花咲く時の來るべし、先づそれ迄は法の爲、寒暑
 を厭つてその身を守護せよ、伊豆の伊東と由井ヶ濱とは、八重の潮路を隔つれども
 月西山に傾かば我伊東に恙なくありと知るべし、我れ又東天に旭の昇らん時は、日
 朗鎌倉に在りと思ふて日を送らん、流罪人たる我身に此經を持參せんは恐れあり、
 再び邂逅ん時迄これを汝に預くべし、必ず身を慎みて法の爲に盡すことを忘るゝな
 と仰せられ、携へられたる經文を日朗師に御渡しあつて、法等品の下を御聲明らか
 に讀上げられると、濱邊に集ふお弟子と檀徒も、聲を合して高々と讀誦する、その
 内に日朗師は盡きぬ名残に臉を拭ひつゝ、見返り勝に船を出て汀に上られる、お經
 の聲は彼一句此一句、一聲は高くして一聲は低く、一講縮んで一講は伸び、如何に
 も上人の伊豆に送られ玉ふを悲むが如く、漫ろに櫂を催して來るその内に愈々概

を解いてギー／＼と沖を望んで漕出す、陸には手を舉げ足を爪立て、お經を唱へる聲は一句々々と急しく、船は沖へ／＼と出て波間に隠れ、又忽ちにして大濤の上（おほなみ）に現はれる内、次第々々に遠かつて聲も聞へず船の形も見へ分かぬ、一同延び上り／＼と御跡を伏し持み、傷手に惱む日朗師を劬はり助けて松葉ヶ谷に立歸つたが、日朗師は師を慕ふこと甚だしく、夜な／＼由井ヶ濱邊へ出て伊豆の伊東の方向に向つて法華經を唱へて一心に上人の御無事を祈つて居れる、どうか配所に於て御別條のないうやう、再び御無事の御姿に逢ふやうと、夜の明けると迄讀經をして居られる、今でこそ伊豆の伊東と云へば内外の紳士方の保養場で、立派な旅館も出来れば温泉などがあつて、盛んなる處となつて汽車汽船の便があるから、新橋處へ流人となつたかと思ふと可笑いやうだが、この頃は交通の不便は此上なく、滅多に人の行くべき處でなかつたから、宛然八丈三宅の島々と同じく、鬼が棲むかなんそのやうに心得て居つたもので、一度流さるれば再び生て返れぬと思つて居つた位、去ば日朗師

が心を痛めて毎夜人なきを窺つて、由井ヶ濱邊で御無事を祈つたのは無理ならぬ事この伊豆の流罪の時は、弘長の二年、上人の御年が四十一で日朗師が十八歳、夜な／＼日朗師は由井ヶ濱邊へ出て上人の御無事を祈つて居られる、と、丁度その年の六月の十二日、例の如く經文を讀誦してお在になると、海中遙かにピカリ／＼と光る物がある、ハテサテ不思議な光り物、何であらうと思ふ内、追々濱邊に近附いて波の爲に揺れ／＼と、遂には波打際に打上げられたから、何心なく側へ寄つて見られると長サ二間許り、太サは凡二抱へあもらうといふ何とも得知れぬ古木、幾十年來海中に漂つて居つたものか、貝殻海草などが一面に取附て居るが、切口の方を嗅で見ると得ならぬ香ひ、何様類ひ稀なる名木と早くも見て取れ日朗師、扱は此名木を佛陀が我等に授け玉ひしにやあらん、幸ひ日頃忘れぬ師の御恩、此名木を以つて尊像を刻み、朝夕香花を供し經を誦して怠らざれば、切てもの心遣りになりもやせん、其處邊に落散つたる繩を拾ひ集め、結び合して一里餘もあらうといふ松葉

ケ谷迄、大汗になつて曳々引張つて来て、自分の思惑をお弟子の方々に話されるとそれは誠に結構な思ひ附、これを天より授け玉ひしものならん、早速お取掛りになるやうに、就ては我々とても師弟の間柄、共にお手傳ひをいたそうといふので、一同のお弟子が寄つて集つて種々やつて見るが、扱どうも素人の悲しきには如何にして鑿を當てたものか、頭を先に彫るか手を先にするかさへも分らんので評議區々、するどその以前に日朗師を師と仰いで、同じく此お堂に居る朗柱といふ僧がある、これは日朗未十八歳位な若年ではあるが、後には必ず名を擧べき智識と見込んで師弟の因みを結んだもの、此人は以前俗人であつた頭佛像を刻んだ事があるといふので、凡ての差圖を此朗柱に任せ、何れも熱心にかチ、刻始めた、日數ならば十日とも経たぬ内に出来上つたのは丈三尺許りの祖師の座像、右の御手には笏を持つて左りに巻物を携へられたる形は、宛然活ける上人に活寫し、日朗師始め皆々大きに喜んでこれを上人のお居間へ安置し、朝夕供物を供へて日朗先づ尊像を拜し、外

のお弟子が交るゝ拜して經文を唱へて居る、その内檀徒の人々が參詣にでも來ると、久々で上人にお逢ひなさいと云つてお居間に連れて行く、ハテ上人がお在になるとは不思議な話、何日か赦免になつて御歸山になつたのかと、怪しみながら誘はるゝまゝにお居間へ入つて見ると、成程、似たとは愚か毎日上人に親しくお附き申して居つたお弟子方の造つた像だから、目鼻立から大きさ迄も寸分違はぬ美事の像何れも思はず頭を下げて拜するといふ有様、これを正しく日本國で名僧の木像の造り初めだといふことで、その後慶長の三年に至つて、上人の流罪赦免となつてお歸りになつた時、松葉ケ谷にお着になつて直ぐに日朗師から早速此像をお目に掛ると、上人には大層にお喜びになつて、且扱々難有き志しかな、各々斯迄我身を信じて、身に代るべき木像を造つて無事を祈らるゝこと忝なし、さればにや我又伊東に在る日は曾てお身等の上を忘れたることなく、夜としてこれを夢に見ざることなし、これ正しく各々の誠心我に通じたる徴にやあらん、然らば我亡き後は此木像を我身

と思ひ呉る、やう……と仰せられ、その後は始終傍らに置いて經文を讀誦せられたといふが、その後弘安五年十二月十三日に上人が入滅せらるゝ時に及んで、此像は日朗師に賜はつたので、日朗師は之を比企ヶ谷の本國寺へ移して、日夜上人在すが如く仕へて居られたが、日朗師がお亡りになる時に至り、これを又お弟子の朗柱へお遣しになつた、則ち只今武州堀の内の日圓山妙法寺に安置してあるのがこの木像であるが、日蓮上人は弘長元年五月十二日、罪なくして譚者の口にかゝり、空しく伊豆の伊東で配所の月を眺められる身となつて、岩淵丹下といふ役人から内々船夫の勘右衛門に申含め、伊東に流して再び生て還れぬやうに取計はせるといふのは、豫々極樂寺の良觀を始め、法敵たる僧等が申合せて密かに掛り役人に賄賂つたから、アハ宜くば途中で上人を亡き者にせんといふ企み、斯るべしとは知らるゝ由なき日蓮上人、怪しの苦船に揺られて、伊豆田子島の沖合に繋られたのはその日の七つ通り、折しも海上濤荒くして陸に近附くと思ひも寄らん、船頭の勘右衛門は

當惑の顔色で四邊を見廻すと、此處に一つの小島と見ゆる岩がある。幸ひなりと上人を船から下して岩に登せて、勘扱さうも伊豆の陸には見らるゝ通りの潮で逆も船は着かん、ソレ御覽なさい、今にも潮が退たなら此處から島へ涉るのは難作アない日もハヤ暮れなん、此處からお別れ申しますと、云ひも終らず漕ぎ手を早めて、忽ち掻き消す如く鎌倉さして姿を消して了ふ。名も知らぬ岩ヶ根に取殘されたる上人は、熟々岩の模様を御覽になると、成程追々潮が退いて行くに連れ、此岩から田子島へは譯もなく渡られるやうに見へる、去ば日暮ぬ内に何方へか便らんと岩を傳つて田子島へ行かんと、徐々足を運ばれると、如何に、岩と島とは途切れて廻るよりの術もない、流石の上人も確と當惑をして、呼べども應ふべきものゝありとも見へざれば、扱は船頭が夜に入を厭つて、我を流人と侮り斯る無人の放岩に置去つたるか、今更悔めどこれも詮なし、只此上は法華經の功力を待つの外あるべからず、ア、我運命も末路なるか是非もなしと、天を仰いで嘆息に及ばれたが、忽ち岩の絶

頂にドツカと座し、聲高らかに法華經をお讀上になつて居る、と。此處にこい伊豆の河名の浦といふ處に彌三郎といふ漁師がある、此者が漁師仲間誘はるゝまゝ、遙かの沖に松魚釣に出掛けて居つたが、餘程釣の名人で、外の漁師共が五尾か七尾釣る内には、彌三郎は二十も三十も釣るといふ腕前、日頃から人も褒れば自分も目慢をして居るのだが、何としたる事にや、この日に限つて彌三郎の釣には一尾の松魚さへ掛らん、ヘテどうした事だらう、外の者は皆二十三十の獲物があるのに、自分の釣には未だ一尾の松魚さへ繫らんといふのは、何たる不思議な目があるものだらう、これには何ぞ仔細があるに違ひないと、糸を垂れる勢ひもなく腕拱いて黙々考へて居つたが、ヘタと手を打ち、オ、ソレ、こりやア釣れんのが道理だ、迂闊り漁には出て来たが、思ひ出せば今日は亡き母人の十三回忌、それとも知らず皆に誘はれて出て来たが、如何に稼業なればとて、生の母親の遺夜を忘れて釣をしたとて釣れる筈がない、ヤレ、我ながらをぞまし、急ぎ歸つて佛に香花でも手向け

てやらんど、そこへ道具を片附て同船をした漁師に分れ、自分は一般の船に乗つて歸らうとする、豫て彌三郎の孝心を知つて居る漁師共、〇そいつア氣の毒だつた、彌三郎い早う、つて阿母にお経でも上げてやれといふ一同の言葉を跡に聞流し、河名の浦を差してエツシ、と漕ぎ戻る、性來力の優れたる彌三郎、一人で漕いで急いで居ると、田子島の沖合の岩の上に天から降たか地から沸たか、見慣れぬ坊さんが座を占て經を讀で居る、彌三郎は不思議に思ひながら何をして居るのであらう、豈夫行をして居るのではあるまいそれとも驚にでも攫はれたのかしら？、彼岩の上に墜されたから宜いやうなもの、若も海の中へ落された日にやア生命はないサテ、危険い事であつたと、素々親に孝行でも盡さうといふ程の彌三郎サテ、危険い事、彼坊さんは隠れ岩とも知らずして、あつして澄して岩の上に座つてござるが、今にも潮が干して来りやア嘸驚くに違えねえ、さうなりや幾干驚いても迎も助かる氣遣はないが、ア、危険い事、危険い事、これと思やア俺が途中で歸て来

のも何かの因縁、殊には今日は母人の命日、釣を止て斯い坊さんを助てやるのは何よりの功德、大方これも佛の引台はせかも知れない、こりやア助けずには置かれぬと、岩を目覚めてエイ〜船を漕寄せて、奥オイコレ其處に座つてござる坊さんどうしてお前様ア此様處へお出なすつたと聲を掛ると、上人やおら此方を振向き玉ひ日「オ、これは何人でござるか？ 何か拙僧に用事でも………と云せも果す彌「ヤ〜さう沈着てお在なすつちやア大變だ、私は彼向ふに見へる河名の漁師で彌三郎といふもの、今日も稼業の松魚釣に出たが、少々仔細あつて今沖から歸つて来ると、修業が行かア分らないが圖らずお前様が其様處でお經を讀で居なさるので、何とも不思議でならねえんだが、一體此岩を何と思つてお在なさる、こりやア烈岩と云つて、潮が上ると全然此岩ア水の底に隠れて仕舞つて、勝手を知らねえ船頭なぞか隠岩とも知らねえで、船を乗上げて沈める事は珍らしくねえ危険へ處だ、一度船を打附りやア、生ちやア還れねえといふ處から、それで此岩を烈岩と

いふ位、サア〜早く此船にお乗なせえ、何處へなりと陸の方へ船を着て上げませう、だが全體どうして此様處へお出なすつたと問はれた時に、上人扱はと心に覺つて且サテ〜危うかりし事共かな、夫に就ても御身が我を助けんと志は肝に銘じて忝なし、今は何をか隠さん、此身は鎌倉松葉ヶ谷に住居する日蓮といふ法華經の行者、今斯く讀經して居たりしは道樂でもなければ行でもない、實は斯く〜の始末にて覺へなき罪に陥り、伊東へ流人となつて送らるゝ途中、干潮の爲に陸に近付き得ず、拙僧を此岩に遺して船頭は鎌倉へ引返したが、岩を傳つて田子島へ渡らんと思へども、見らるゝ通り僅かな隔ても水心なき我には泳ぎ附んこと思ひも依らず、思案途方に暮れたるまゝ、此身を天に任せて經を唱へて居つたる次第、然るに御身が護誓の船は、何共以て忝く、天未だ我法華經を捨てざると覺へたり、志す方としては別になし、何處如何なる浦なりとも、御身が歸る家路の方へ伴ひ玉へと、一什を語られた、大抵の者ならば流人と聞ては、上を恐れて後の崇りと逃出すのが人

情だが此彌三郎は文盲ながらにも一風變つた人間だから彌ヘテサテそれは御難儀千萬、假令如何なる罪を犯したとて、流人と極つた者の生命を此様放岩に置捨て、殺して了うなんといふ無法な旋があるべき者でない、扱は奉行所の役人共、御身に何か意趣でもあつたか但し又、僅かな金に目が暮れて、内々送りの船頭にも吩咐て、此様放岩の上に置去つたに違ひない、左もなければ此近海し船頭で此隠岩を知らん筈がない、ア、お氣の毒な出家の身で、すんでの事に二ない生命を殞される處それにしても憎くい奴は情知らずの役人共、ナニ宜しうムります、御安心なさいませ、斯うして私の眼に止つたからには助けすには置きません、シタガ此後若し役人に目附つて咎められた時には、只通り掛りの船頭に助けられたとお答へなさりませ、サア〜早くお乗んなさい、且イヤ重々の親切、お禮は言葉に盡せぬ嬉しさ、忘れは置かぬ彌「サア些とも早く……と急がし立て、上人を船に移し乗せて河名の浦を差して漕出した時は既にその日暮れて定かに人顔の見へぬ夕間暮れ……

密かに上人を伴ひ歸つて彌「コレ〜おみねや、今歸つたごと云ふ聲聞附け駈出る女房、本夫一人と思ひきや、見知らぬ僧の突立つたる姿にギョツとして、彌三郎の袖を引いて小蔭に招き、みね「彼坊さんに附て心掛りがある、今日お前の留守の中に地頭様からのお觸だと云つて、名主様から偶とコレ〜の僧が來ても、それは鎌倉で流罪を申渡された重き科人、匿ふ者は同罪たるべしとの事、もしやそれでは………といふ口押へて彌「聲が高い、實はコレ〜で今日は母人の十回忌、何とかして回向したいと考がへ考がへ歸る海の上、斯う〜いふ難儀の場所をお救ひ申た幸ひ心許りの經を上て貰へば母への追善、お前も共々介抱して、早く飯の支度でもしてくれといふと、此おみねといふ女も本夫に劣らぬ篤實なもの、それと聞て大きに氣の毒がり、みね「それはそれは嘸御空腹でござりませう、モウ佛様へは供物も供へて、チャンと花も差換へて置きました彌「それは難有い、忘れたといふぢやアないが、誘はれるま、ツイウカ〜と釣に行たが、争はれんもので一尾も釣れん、サ

ア〜お上人様、汚くるしうはござりまするが、どうぞ此方へ上つて緩くり御休息下さりませ、それから誠に御無體な願なれど、今日は亡き母人の十三回忌、ごうぞお經を少々ばかり………日、イヤ〜、さう遠慮には及ばぬ事、一樹の陸一河の流も何かの因縁後程御回向の讀經をいたさうといふ内におみねが甲斐々々しく粥を煮て差上げると夫婦の志ざし辱なしと舌打鳴らして、只一椀の粥も厚き情け百味の恩食に優れりと甚くお喜びになつたといふ、今に至るまで此の船着の地に海岸山連着寺といふお寺が建つて、彌三郎の家もその後船守山連慶寺といふ寺になつたといふことで、當今では伊豆河名の御靈所と音に轟き、邊僻でこそあるが立派な堂があつて、法華宗の行者とか千日参りなどが日々絶へぬ有様、その夜は上人も彌三郎の家の佛壇に向つて、法華經第五の卷の提婆品をお讀になる、これは妙法華經第十二といつて、女人成佛の尊い經文、序ながら辯じて置くのは、凡て外の宗旨では女人は罪の深いもの、成佛し得ないなどと説かれてあるが、この法華經には女人だから成

佛しないなぞといふ事は更にない、然るに他宗でも婦人は邪念嫉妬の心が深いから成佛しないとか、或は女人は穢れの身なるが故に成佛は出来ぬなぞといふ宗旨があるやうだが、何も婦人だから成佛せない、只男のみ成佛するといふ教へでは些と可笑いやうに思はれる、此提婆品に據ると立派に女人成佛といふことになつて居る、その提婆品を上人が御訓讀に相成つた、尤もお經なんといふものは、棒讀にやられた日にやア、河の事やら凡夫の身には薩張り分らんが、今上人は誰にでも分るやうにお讀上になつたから、これを聽問して居つた彌三郎夫婦は思はず隨喜の涙に暮れ我知らず妙法蓮華經南無妙法蓮華經と合掌をする、斯と見られた上人は尙夫是の法話をして聞されると、始めて妙法の難有さを覺つたる夫婦は悉く上人を信仰して、上人のお身の上を誠にお悼はしき事に思ひ、剋岩に置去つて上人の自滅を計らんとしたる役人の非道を憎んで、何日までも我家に匿つて汚名を濯ぎ、冤罪の晴るのを待んものと覺悟をしたが、扱ごうも手狭の住居だから隠す處に困つて、別に宜い分

別も附がざるまゝに平生雜混物を仕舞つて置く納戸を取片附け、此中へ上人をお入れ申して片田舎で土地の者より外通行せぬを幸ひ、時々本家の方へお連れ申しては夫婦共々に働はつて居る、すると、その年の六月下旬になつて、彼の極悪無道の岩淵丹下は上人その後の音信の無を心に掛け、己れ一存に取計ひながら執權の命令なりと偽り、自身伊東に渡つて代官の伊東莊司朝高に面會をする、朝高は何事ならんと最とも叮嚀に饗應して恐るゝ來意を伺ふと丹下、我等此度態々罷越したの餘の儀でない、先月十二日内々其許迄通じ置きたる法華の行者日蓮こと、上御政治向に迄啄を容れ世を紊す賣僧なるを以て、生て再び還らざるやうとの執權職の内意を承け、先達し護送の途中粗岩に打捨置きし處、其後如何にせしか更に行衛も定かならず、左りとして死骸の漂着したる噂さへも聞へざるより推するに、萬一濱方の者にて彼を救ひ、密かに匿ひ居る者あるやも計り難し、左ありては折角内意を承たる此丹下が落度たるのみならず、無智文盲の漁師共彼が依歸に陵され、彼を信

じて此上如何なる災を爲さんも知れず、依ては濱方一同へ厳しく布令を廻し、隅々隈々に至る迄嚴重に探索をさつしやいと、虎の威を藉る孤武士、肩胛怒らし勿體振つて申渡した、莊司朝高は執權北條家の命令と信じたらから恐れ畏んで、時を移さず濱方へ布令を廻して、若し日蓮を匿ひし者は同罪たるべく、假令一度は心得違ひにて匿ふと雖も、前非を悔て訴人するに於ては其罪を許し、恩賞の沙汰に及ばるゝことと疑ひあるべからず此の義心得違ひなきやう相心得べきものなりといふ趣意、此布令を受取つたる名主の面々、これ又早速漁師百姓を呼集めし一々讀聞かせ、見附次第に訴へ出でんといふ書附に調印をした、漁師の彌二郎も矢張り呼れた連中で、素より疵持つ足の餘り心地の宜いものでもないが、今は既に上人を信するの念石よりも堅く、隠し通せる丈は匿ひ奉らんと、同じく書附に判を捺して空惚けて居る、その内何れも思ひくりに立歸るから、彌三郎も打連立つて我家へ歸る途すがらも、何喰ぬ顔てそして居れ腹の中は四苦八苦、若し此事が顯はれたら何とせう、一層今こ

れくと打明けて上人を何方へなりと落さんか、イヤ／＼それも危険い、のみならず此事を上人の耳に入れなば、定めて御心配あつて我家に居るにも気が置るに違ひない、さうなつては折角お世話を申上る甲斐のないといふもの、こりやア迂闊に申上る譯には行かんと、とつおいつ思案に暮て我家に立歸り、女房のおみねに打明けて相談をするがこれ連分別の出やう筈がない殆んど當惑の胸を痛めて居る表から
 ○「オイ、彌三兄いは家に居るかいと何處で飲んだか千鳥足、濁聲高く踰躑きながら這入つて来たのは、同じ漁師仲間でも娘と綽名を取つた彌兵衛といふ奴、常日頃から鼻摘みの破落漢、博奕を打つか喧嘩口論をして人を困らすのが半商賈、如何に荒い稼業の漁師仲間も爪弾きして、殆ど疫病神の如くに忌み嫌つて居る放蕩者、だが彌三郎は根が朴訥の温順い性質だから、この彌兵衛のやうな者でも他の連中のやうに蔑みもせず別段隔て心もなく心易く交際つて居る、今も熟柿のやうな臭ひをさせてヌツと這入つて来たのを見て、彌「ヤ、彌兵衛か？、相變らず宜い機嫌だナ、何處

でそんなになつて来た、彌「フ、フ、何處で飲うが大きなお世話だ、他人の詮議よりもお主の方はどうするのだ、貴様も名主の處で顔を見たからにやア、定めて今日のお布令は合點が行たいらう、どうだい、一旦匿つても此處で訴人すりやア、罪を赦して褒美を下さるといふ上の慈悲、なか／＼俐口な貴様だから、滅多に匿つちやアあるまいが、若し心得違ひがあつちやアお處刑ものだせ、俺も永年の兄弟分、間違があると氣の毒だと思つて態々念を押に來たんだ、エオイ彌三兄い、貴様も男の意地づくだ、頼まれりやア匿ひもするだらうが、サ、其處が考へ處だ、何處迄も隠し了せうとて泣く兒と地頭、此様茅屋の一軒位踏潰しても尋ね出されるなア知れた事、さうなつた時にやお主は同罪、坊さんは忽ちお上、捕はれる、どうだ、こりやア或蜂取らずにお主迄が同罪、此様詰らねえ話アねえ、それよりやア今此處で名乗つて出て褒美を貰つてお咎を通れるのが當世といふものだ、どうだい思案を仕替ちやア………彌「オイ／＼彌兵衛、可怪な事は滅多に云つてくれない、今聞さや

ア此方にその坊さんでも匿つてあるやうで、若し其様事が役人の耳にでも入りやアそれこそ大變、兵「アハ、ハ、ハ、大變だから云つてやるのだ、オイ誰だと思ふ、此彌兵衛が黒い眼で睨んで置た、忘れもしねえ先月の十二日、而も日は暮かゝる薄暗がり、俎岩で經を讀んで居つた一人の坊主、その時沖から船を漕いで、彼岩に近附いたなア確かに漁師、その坊主を船に乗て、この河名の浦に歸つて来た覺えがあらうその後の噂によりやア、その日に流された法華の行者は、必定鎌倉の科人とは思つたが、俺も役人といふちやアなし、別段そんな詮索立をするにやア及ぶめえと、實は今日迄打捨つて置たのだが、先刻名主の云渡しでは、大金になる褒美の仕事、その坊主を匿つたなア彌三郎だと、名主の前で口まで出掛た奴を引込たのも、同じ荒磯で人となり、潮を被つて餓鬼の時分から、手前と俺は海猿と人に云れた仲だからと、思ひ返して何にも云はず、態々お主の家迄やつて来た心中男、オイ彌三、幾干か俺に呉ても宜らうせ、彌「ナ、何んだとそれちやア急々その坊さんを匿つて居る

といふのだナ、兵「贅言叩くにや當らねえ、確かに匿つてあるに違へねえ、彌」と云つて見る通りの小さい屋臺、何處に隠れる場所もない、兵「オツとさうは云はさねえ、臭い處は納戸の裡………彌「えッ！、兵「どうだ、肝が潰れたらう、餘人は知らず此彌兵衛、強てしらを切りやアモウそれまで、その坊主を引摺り出し、召連訴へをして褒美の金は獨りでせしめる、その時泣面かはくなくとバラ／＼と屋敷に駈上りさま、突然納戸の障子に手を掛て、引開けんとなしたる時、流石の彌三郎もモウこれまでと立上り、開んと非く彌兵衛が襟髪取つてグツと引寄せ、彌「ヤイ／＼、何をしやアがるんだ、心易いは常の事、見る蔭もない彌三郎の家でも、理不盜に家捜しするとは言語同断、下から出りやア附上り、仕度三味の不法の振舞、容赦はならん斯うしてくれると、拳を固めて「ウ／＼、脊骨の邊りを打据へる、此方は酒に酔痺れて居るから、手殿き拳にあらざれども、痛みに堪へずや起も上らず、身體を藻掻いて手足をバタ附せる騒々しさに、女房のおみねは見るに見兼ねて、かれ「アレ

まアお前さんモッお止しなさいそんなに手荒な事をして、若しか負傷でもあつてはなりませぬ、サ、彌兵衛さんも又今日の處は大人しくして、チャツと歸つておくなさいと制する女房、怯まぬ彌三郎は聲荒く強八ヶ間敷い、黙つてゐる、女なんぞの出る幕ぢやアない、サア彌兵衛素直に此儘歸ればよし、此の上俺の家に指でも差しやア承知しないぞと突突す、兵ヲ、彌三郎、能も手前は酷い目は遣しやアがつたナ、此意趣返しは屹度する、覺へてゐやアがれ、彌ヲ、何とでもしろ、迷誤ややすると又此拳骨を振舞ふぞ、兵ヘン、今に見る吠面下げて謝罪るなツと、痛む腰骨抱へ抱へ、口には俺まで罵り散らし、跡をも見ずして逃げて行く、口程にもない弱い奴と、夫婦は顔を見合してホツと一息、その時後の隙子をガラリと引開け、立出で玉ふ日蓮上人、夫婦を手招き容を正して、日、今の話は残らず彼にて承はつた、サテサテ夫婦の心遣ひ、今更言葉に盡し難し、最早斯うなつては我身體の置所もなし我を助けんが爲に却つて夫婦の上に災の及ばん事日蓮が本意にあらず、怒じ庇ひ立

をせんよりは、イザ此身に繩打つて伊東の陣屋へ引立られよ、斯く夫婦が此身を救んとする心盡しも、詮議殿しき今此場合を潜り抜けんこと思ひも依ず、死するも生るも只運命の定むる處、日蓮が生命は法の爲に捧げあれば、死するは聊か厭ふ處にあらざるぞ、斯く云ふ内も邪魔あらば辱めを受ん、疾く疾く繩打て引立てられよとハヤ堪忍の様子に驚く彌三郎、彌コハ勿體なきそのお言葉、今更訴へる位なら最初からお匿ひは申しませぬ、若しお上人様に手出しでもする奴があれば、我等夫婦の生命に代ても御無事にお落し申します、サ、ソソソ、一層邪魔なき今の内に、何方へなりともお供を致しませう、幸ひ濱邊に繋いであるあの小船、彼へお乗り下さりませ、夫婦魂限り腕限り、沖へ潜出し何れの島へなりと潜寄せて、一生お傍で御奉公を致しませう、兎角は生命あつての物種といふこともござります、又その内には冤罪も晴れて、目出度御赦免の日もありませう、サア、些とも早く船へお越しなさりませと實々しく身繕ひして、ハヤ立出んとするを押へて、日、アイヤ、假

しや此場を遁るゝとも、上の權威を以つて捜さん時は袋の物を探るも同然、生中未練な生耻を曝さんより、深く我から名乗つて繩目に就かん、なれども左ありては夫婦の者に災の及ばんは必定なり、我は既に心を定めたれば、速に我に繩掛け訴へ出られよ、左すれば此日蓮が志にも叶ひ、御身等夫婦の罪も融けなん、ハヤ疾くくと急がし立つる上人の言葉に、道が夫婦も争ひ兼ね、如何にせばやと躊躇ふ處へ、遙かの彼方に數多の足音、此方を差して幕地に既附け来る人の氣色は、疑ひもなき捕手の人數、南無三寶と度を失つた彌三郎夫婦、コハ何とせん如何にせんと、俄かの事に周章狼狽さ、急遽しく上人を納戸の裡へ押入れて、叶はぬ迄も役人輩を欺きくれんと、煙草を燻らし、何氣なき體に澄して居ると、女房おみねも庭の片隅に座を占めて、鉦振上げて頻りに粗朶を切つて居る、處へドヤくと駈込み來つて數多の捕手、岩淵丹下は鶴の目鷹の目、人數を指圖する傍らには、先程追返されたる漁師の彌兵衛が附添つて、其處邊をキヨロ〜見廻しながら、兵サア彌三郎、ようも

先程は酷い目に逢したナ、その仕返しにはお役人のお供をして來た、四の五の吐さず坊主を渡して了へばよし、左もない時は踏み潰しても縛つてくれる、丹ニリヤ彌三郎、おのれ漁師の分際も辨へず、上を恐れぬ不埒の舉動、お尋ね殿しき質借を匿ひお布令の表を欺く不届き奴、此彌兵衛の訴人に依つて明白なり、尋常に日蓮を渡さるに於ては、其方夫婦も共に繩掛け、坊主と共に鎌倉表に引立て行き、辛き目見せんが如何に〜とかさにかゝつて呼はつたり豫て覺悟の彌三郎、知らぬ顔して空呆惚け、彌へ〜えー、何事でござりまするか？、ヲ、彌兵衛貴様は酷い奴だ、マアお聞き下さりませ、この彌兵衛といふ男、今も彼奴が申す通りに、常々遺恨のわる中に、先刻も酒に酔潰れてやつて來て、無理難題を申しまするゆえ、少々手酷い切諫をしてやりましたが、大方その意趣を晴さん爲に、跡方もない事をお訴へ申上げお役人様へ御苦勞を掛け、要らぬお手敷を掛けました事と存じられます、なんの大それた、日蓮とやらを匿つたなど、サラ〜そんな覺えはござりませんと、左も

しらぐしく陳じ立て、何處を何様風が吹かど云はぬばかり、夢にも知らぬと云
 脱る、カツと心を賑らした岩淵丹下が、オヤア吐したり頬割いたり、ソレ彌兵衛：
 ……と願もて何か知らせると、心得たりとシヤ〜り出でたる彌兵衛が此處ぞと
 兵「ライ〜」彌三郎、俺なら欺されるか知れないが、その手で不可いお役人、
 愚圖々々吐しやア家捜した、へえお役人様、何と云はうと論より據證、坊主の隠處
 も分つて居ります、どうか彌三郎を御取押へ願ひます、一寸斯うして科人を…
 とハヤ飛込んとする有様に、ソレやつてはと彌三郎、拳を握り齒を喰べめ、堪り象
 てやポロ〜と涙を滾して、今や彌兵衛が納戸の障子に兩手を掛け、引開けんとな
 したる後よりムンツと取附き、引戻さんとするを見たる岩淵丹下、オソレ取押へッ
 と聲の下、バラ〜驅寄る五六人の捕方、彌三郎が襟髪捉へて動かせず、得たりと
 勇む彌兵衛は荒々しく、兵「日蓮御用だ、御用々々とガラリ納戸の戸を引開ると、ス
 ックリ立つたる日蓮上人、更に動ずる色もなく、泰然自若と念珠を爪繰り、金胎兩

部の顯密、大元明王隆魔の印を結ばれて、彌兵衛が障子を押開けたる途端に、日南
 無妙法蓮華經と只一聲、珠數押揉んでサラ〜と打拂ひ玉ふと見る間にコハ不思議
 や、剛毅の彌兵衛は盤石に打たれたる如く、眼は瞬んでとヨロ〜バタワとそれへ
 仆れる、眼前斯る有様を見ては何條猶豫すべけんや、丹下はヌツとシヤ〜り出で
 佩いたる刀に反打たせ、鯉口寛げ詰寄つて、オヤア奇ッ怪なり妖僧日蓮、汝幻術
 を以つて此場を通れんとするとも争で通さん、シタバタすれば容赦はならじ、ソレ
 物共斬捨て、了へッと敦圍荒く吼り立つ、聲に應ずる捕手の面々、我打止て手柄に
 せんと二三十人一度に援連れ、納戸を目蒐けて躍り込まんと、狭き入口に立塞がつ
 て動揺めく光景、凄まじなんごいふばかりなく、既に危うく見へたる折しも、上人
 は口に題目を唱へ乍ら念珠を左右に打振り〜、彼方此方と潜り援けてその早業は
 飛鳥の如く、目にも止らぬ働さに氣を吞れたる捕手共、少時逡巡ぐる閑に、上人
 は群がる人数の隙を潜りて濱邊の方へ躍り出で、彌三郎が緩い置たる船へヒラリと

飛移られる、と見たる彌三郎も續いて船に飛込で、三間櫓を取る手も遅しと漕出さんと焦慮る内、跡追駈る數多の捕方、丹下は己が名の面色に朱を濺いで、丹ソレ坊主と彌三郎を遁すな、斬捨てよくと叫びながら、これも續いて走り出る、彌三郎は餘り周章で、縋つたる繩を解くことを忘れたから、押せども漕げども船は出ぬ、バラ／＼駈來る捕方は繩の端を取つて、汀の方へ船を引戻さんと急るもあれば、船を目覓て躍り込んとする氣早の奴もあるから、今は必死と一生懸命、彌三郎は持たる櫓をリツ／＼と打振り／＼、寄せじと藻掻くが多勢に無勢、アハヤ追取込まれんづなりたる時、此時までも鉈を提げ土間に佇止んで居つたるおみねが、本夫と上人の一大事と飛鳥の如く飛込來つて、物をも云はず繩の真只中をブツ／＼、斷切つたから船はそのまゝ、沖の方へエラ／＼と浮び出る、岩淵丹下は是を見るより地獄駄踏で口惜がり、丹ソ又憎くき女郎奴斯うしてくれる、思ひ知れつと鬼にも等しき無慈悲の極悪、眼を睜らし猿臂を伸して汀に残る繩の斷端を取るより早く、おみね

が首にグル／＼と捲附け、力を籠てグイと一／＼め締附れば、孱弱き女の何ぞ堪らんキヤツと一聲七轉八倒、虚空を掴んで手足を藻掻き、無慘やバツタリ息絶へ仆れて了ふ、見向もやらず、丹ソ船を出せ、急げ／＼と狂氣の如く下知をしたから、附従つて居る伊東莊司が家來迄走り廻つて、漁師共を急がし立て、八挺櫓の船を仕立て、沖を望んで漕出す彌三郎の船を目覓けて曳々聲、矢を射る如く押切つて居る、素より三十人許りの捕方は何れも片唾を飲んで、イザと云は、我その船に飛移つて日蓮と彌三郎を取つて伏せんと勢ひ、船に突立つ岩淵丹下は大音を張上げ、丹ソ何處迄も追蒐けて、その素首を引抜さくれん、ソレ力を揃へて漕げや物共と激しき下知、櫓を押す船頭は同じ河名の漁師だから、悪人ならぬ彌三郎をどうにかして落したいが、此方は血眼になつた岩淵丹下が、稍ともすれば刀の錆にでも仕兼まじき凄まじの勢ひ、不承々々に櫓を押すけれども、何しろ此方は大濤をも押切るべき八挺櫓、彼方は木の葉に等しき小船の上に、如何に猛しとは云へ僅か彌三郎一人の

腕に任せる櫂一挺、追々近附いて間近になつたから、これではならぬと此方を
 屹と見渡した彌三郎、彌「ヤ」皆の衆滅多に無禮を働かれるな。このお上人様こそ世
 に難有い活如来様だ、若し過つて此船にでも近附くが最後その船は徹塵に碎けて生
 命はないぞ返せくと、呼はり、尙も腕限りに漕いで居る、丹下はクワツと眼
 を瞬らし、丹「ヤ」憎くも奴が高言かな、目に物見せて縛めくれん、物共早く乗付
 よと差圖の下より、豫て用意の釣縄取出し、上人の御船望んでバラリと打掛け引寄
 せんとす、此方は櫂を取直して、その繩を取除けんとしたる時上人船の只中に端
 座して珠数サラサラと押揉み、口に怨敵退散の呪文を唱へて頻りに祈念を凝して居
 られるから、丹下は上人の船へ飛移らんとしたる目先へ、如鬼と突出す高さ五間
 もあらんかと思はるゝばかりの大濤、これはと躊躇ふその間に、ドーンと碎けて落
 ちたかと思はるゝと等しく、この濤の爲にグラ〜と船が揺めいたから、上人の船
 と岩淵が乗つたる船はユラ〜と右と左りへ別るゝ途端、丹下の船は傍らなる

大岩の出端へゴツ〜、勢ひ凄く打當つたから、何條堪らんメリ〜メリと船を堪
 され、アレヨ〜と立騒ぐ間もあらせず、見る〜洶然轉倒返つて、海で育つた船
 頭共は流石に水心があるから、水を澄つて漸く岩角に取付たが、此時にも最前に進
 んで居つた彼の彌兵衛は、船が岩に打當ると同時に、機會を喰つてヨロ〜と踏け
 る拍子に、ヒョ〜リ、頭をイヤといふ程打付けたから強か腦天を打割られ、キヤツと
 叫ぶが此世の名残り、無惨の最期を遂げて了ふ、岩淵丹下を始め二十餘人の粗子共
 は、惡の報ひか船を衝突た折に煽りを喰つて、ザブ〜リ、これも亦一度に海中へ落
 されたが、水練の心得なき悲しさには再び浮ぶ事さへ知らず、敢なく底の藻屑と相
 果て了つたが、不思議にも亦此岩は初め上人が置去られたる粗岩、汝に出で、汝
 に歸る應報親面、自業自得とは云ひながら誠に小氣味の宜い有様であるが、辛くも
 粗岩へ這上つたる漁師共は斯る始末に驚いて上人の御運強さを恐れたるが、何れ
 も呆氣に取られて只茫然と御船を眺めて居るばかり、彌三郎は奮躍して勇み立ち

彌三、難有や忝けなし、これといふも全く上人御徳のなすところ、サア皆の衆、利益は眼前に見らるゝ通り、若此上に無禮もあらば、彌兵衛の如く腦を打割れるか、海に落されたる役人面と同じく生命はない、なれどもお主等は元々上の下知に依りて船を漕いだる非を改め、今より此上人に歸依せば枯木に花咲く妙法蓮華經、必ず利益のあるべきは疑ひあるべからず、如何に上人に御隨ひ申す心はなきやと、聲を振上げ、舷叩いて呼ばつたり、此方は又濱邊に残つて、様子如何にと待構へたる伊東の莊司が家來共、何時迄待つても音沙汰がないから、別に一艘の小船を仕立て、沖へ出て見ると、先に船を出した船頭ばかり狙岩の上に登つて、岩淵始めその餘の人数の姿もない、ヘテ不思議やと熱々視ると船は壊れて波に漂ひ、上人の船へは彌三郎が突立つて頻りと漁師共に何か掛合つて居る様子、その爲體如何にも不善しく思はれる、何にもせよ彼賣僧が如何なる魔法を修して、追手の人数を駆惱ましたかも計られん、こりや迂濶には近附けぬとそのまま、船を返して、扱コレくの有様と一

同に話をすると、第一岩淵殿の姿が見へんといふは心許なし、急ぎ漕附けて日蓮を召捕つて了へと、再び出船の用意をせんと船頭を狩集つめ、今度は二艘の船に伊東朝高の家來を乗せて沖へ漕出し、先づ狙岩に漕附けて様子を聞くと右の始末、聞くより朝高の家來は大に怒つて、〇「不屈なる賣僧日蓮、鎌倉のお使者を殺されるのまゝには歸へられず、ソレ日蓮を搦め捕れよ、打殺せツと呼はる聲々、地團駄踏んで催促するに俄かに怖氣付いたる漁師共、〇「イ、ヤならねえ、今聞く通りの奇瑞を見ながら、此上上人の船を取込ては如何なる崇りのあらんも知れず、この御出家こそ全くの名僧に相違ない、重ねて船を碎かれては明日が日から漁に出る事も出来ない、こりやア何と仰在つても船は漕げねえと一人が云ふと、何れも口を揃へて尻込する云甲斐なしと齒齧をなし、〇「ナニ？、何と申す………最早船は漕げぬとは………
 ……△どうして、大事の船を打割られた上に、悪く手向や生命が危険え、ナア皆なさうぢやねへか？、〇「オ、さうとも、俺等ア今日等の宜い風に、先刻の

やうな不思議の大濤ア見た事もねえサア〜皆な歸るべえ。〇おのれ憎くき奴輩奴サ、生命借くば船を出せ。若しも愚圖々々するならば、片ツ立から目に物見せん、ソレ方々……………と頭立つたを奴が指揮をする、心得たりと凡そ五十人の來共、イザと云は、斬捨てんと、鯉口寛げ油断せず。船ナ、何だと、斬る？ サ斬るなら斬れと血氣の若者、身體を突付け詰寄つた、それと見るより一人の捕手が、此奴素直でいけぬ奴と、〇何をツ……………と、スラリ一刀引抜いたから、氣荒の漁師は何條猶豫すべけんや豫て連上取立の厳しさに怨みを吞で居る折柄、その代官の來共に斯う威張れらて癪に据え兼ね、船この三一野郎奴、ソレ打のめせツと云ふを合圖に、名々手にせる櫂を振上げ、或は櫂を追取つて打つてかゝる、船には慣れる數多の捕方、ソウ〜と振廻す櫂を左右に拂ひ退け、隙もあらば斬込まんとする内に足踏外して海中に落ちる奴もあらば、漁師が打振る櫂に體を拂はれ、ザンブツ水中に筋斗を打つて陥る奴もある、實に氣の立つた時は恐ろしいもので、平生仁政でも

施してあれば斯様事は勿論ないが、何かあつたら役人共に目に物見せんといふ心当の處へ、刀なぞを引こ抜いて脅し付けられたからモハヤ堪らん、此方は只脅かしの積りの奴が散々に駆惱まされ、素より船の上の事だから身體の自由が利かんのので、見る〜内に海中に陥つて偶々残る奴も足腰立ん程打れて、蠢爾して居る者は何れも手取り足取り海中へ投込んで了つた、今は一人も残る者がないといふ有様となると、俄かに一同の漁師が申合せて、モウ斯うなれば一か八か、何れは代官の咎めを蒙るに相違ない、同じ代官を敵とするならば、斯く顯著なる上人を迎へ取つて、飽迄代官伊東朝高に敵對せんものと、遙か隔たる上人の船に矢を射る如く漕付て、有りし次第を彌三郎に物語つて上人に取次を頼む、彌三郎に於ても濱方の漁師が惡いのでなく、全く役人に脅されて船を出したのだといふ事は知つて居るから、彌三郎、ヤ、それで話は悉皆知つた、どうも誠に忝ない、皆ながお上人様のお味方になつて貰やアこれ程心丈夫な事はない、難有い心掛だ、只一心にお上人をお頼み申して

現世に利益を受けて未來永却助かるのが何より肝腎、なアに代官などが何と云つても微權ともするせんぢやねえと威勢を付けて此事を上人にお話をする上人も一同の義氣に感じて云ふがまゝにこれから再び河名の浦へ返られる、中にも心利いたる一人の漁師が「オ、ナウ彌三郎兄い誠にどうも氣の毒な事をしたわい、幾干お上人の爲とは云へ惨酷たらしい、おみねどんは彼の鎌倉の悪侍の手に掛つて敢ない最期、可憫相に目も當られぬあの死様、早う行つて回向でもしてやらつせえと云ふと、彌三郎が「彌三郎不憫なものだが仕方がねえ、どうせ死な者の還る例しもねわが、彼儘打捨て、も置けめえから、氣の毒ながら少々手を貸して貰つて片付けてやらうと、三四人の漁師と共に以前の涼邊へ来て見ると可愛や女房は首に繩を巻付けてられたまゝ拳を握つて反様に仆れて居る、流石恩愛妹脊の愛情、見るより彌三郎はハラ〜と涙を流して死骸に取付き「彌三郎おみね、嗚苦しかつであらうが、堪忍してくれ大慈大悲のお上人様の爲とは云へ、極悪人の手に罹つて生命を殞したのは氣の毒だ

が思へばお上人の一命に代つたもの同様、未來は必ず成佛するに違ひない、今沖で手前の誓は取つてやつたぞ、迷はず佛果を得て浮んでくれよ、ア、南無妙法蓮華經々々々々々と目をしば叩いて合掌し、非嘆の涙に暮る、憐れさは、他の見る目も不便なり、斯る處るに静々歩みを運ばれたる日蓮上人、死骸の前に近付き玉ひ目「ヤヨ彌三郎、夫婦の情愛嘆くは道理至極なれども、人の此世に生を享るは何れも命數あり、既に定命とすれば嘆くとも還るべからず、又不慮に死したればとて未だ命數盡きざれば再び生きん、今我諸佛を念じて死したるおみねを呼助け見ん、若しそれにても甦らずば既に命數盡たるものと斷念よと仰せられ、珠數サテ〜と押揉んで少時祈念を凝して居られる、彌三郎始め多くの漁師も静まり返つて様子を窺ふ内、不思議なるかな既に時經しおみねの死骸は、手足をビクビク慄はしたかと思ふ間に、微かに眼を開いて腫に見廻す様、今迄ありし憐れの蒼醒た色は失去つて、追々色艶を増して來るから、思はず甦つた彌三郎が「彌三郎おみね、氣を確かに……

……と呼生る、この聲耳に通じけん、フーンと吐いたる太息、
 夢ではないか？……と躍り上らんばかりの狂喜の有様、ムクムクと起直つたる
 おみねは人々の顔を見て、みれ、上人様も彌三郎殿も御無事であつたか、ヤレ嬉
 しや……
 はし、嬉し涙に搔暮れて居る、上人左もござと微笑まれ、日、扱々喜ばしき事かな、
 一旦死せしおみねの蘇生りし事、神明佛陀の加護あらんとは云へ、これ全く夫婦が
 常々心掛の致す處、斯くては我運命も尙榮えんこと疑ひあるべからず、アラ難有や
 妙法蓮華經と、聲高々にお題目を唱へられると、目前斯る不思議の靈驗に酔へるが
 如く感じ入つたる漁師共、宛然夢路を辿る心他して、異口同音に思はず知らず「南
 無妙法蓮華經蓮華經と、隨喜渴仰をして頭を垂て題目を唱へて居る、その内日も將
 に暮れんとするので皆々我家へ引取つて、上人は此夜彌三郎の家で一夜を明される
 すると此夜の内に種々と噂が傳はつて、彼上人こそ恐らく凡人ではあるまい、死ん

だ者迄呼生るとは全然活た佛様でも出来ぬ事、これを思やア此土地の坊主杯は錢ば
 かり欲がつて、それでも足す常日頃から寺で賭博を開帳して、自分はテラを取つて
 甘い汁を吸つて、お経も知らない癖に高慢な坊主面をするが、彼様坊主に引導を渡さ
 れても浮ばれるものじやアない、斯様腥坊主は叩出して彼お上人様の檀家にならう
 と河名の浦の漁師共、上人不思議の奇瑞を見て俄かに渴仰をして、我もくと祖先
 傳來の檀那寺を捨て、上人に歸依をする、先づお上人をお容れ申すべきお堂を建て
 んど、和田倉浦といふ處へ夜を日に繼いで普請をして、假堂を建て、此處へ上人を請
 じ入れ、捕手の役人寄せ來らば一ト泡吹かしてくれんかと、要所々々には急拵への
 柵を結廻らし、血氣盛んの若者が晝夜の別なく張番をして、席旗を押建て竹槍を携
 へたる人数で固めて一々往來の者を咎める、假堂の周圍には一天四海皆歸妙法、成
 は南無妙法蓮華經と筆太に記したる旗を翻翻と吹靡かせ、老幼婦女子などは炊出し
 の方へ廻つて、血氣盛んの連中は何れも物物々々を携さへ、宛然寄手の軍勢を相待

つ如き殺氣立つたる有様、我もくと駈せ參じて漁師百姓の差別なく、雲霞の如く集り來つて偶々物持の百姓坏で之に加はらぬ者でもあると、家を焼かれ或は金銭米穀の類を奪去られ、亂暴な漁師などは殆ど物取りを仕事のやうに心得て、到る處を荒すから何の關係もない者迄が一味をする、そこで河名の浦は云ふにも及ばず、和田倉浦から近郷近在一人も残らず集つたから、その人氣は大した勢ひで恰も蜂の巢を突いたる如く、夜となく日となく只ワア〜と騒ぎ立て、評もなく毎日々々ブ〜と法螺貝を吹立て、上人の身を護つて居ると、此事を聞附けたる伊東庄司朝高は大きに怒つて、おのれ不屈なる土民共、打手として差向けたる鎌倉の役人を殺害して日蓮に加擔なし、多勢が徒黨をして騒ぎ立るとは言語同断、よしさらばこれより直に駈向つて一揆の奴輩を蹴散らして、目に物見せんと、烈火の如くに憤つて時を移さず伊豆一國の大名に下知を傳へ、一揆を揉潰し呉れんと布令を廻すと、斯くと聞いたる韭山の代官江川太郎左衛門、駒に鞭打ち一散に伊東の館へ駈付けて、

尙委しく尋ねて見ると前辨じたる次第、篤くと打聞いたる江川殿が、太ソ〜又容易ならざる事共かな、併しながら日蓮假令罪ありとするも、一旦鎌倉の裁許に依つて此伊東に流されたるのみ、その餘に彼を罰すべき罪ありしとも覺へず、然るに今又彼を害せん爲に更に役人を差出したりとは合點行かす、若し日蓮に死を賜ふべき重なる罪科ありとせんか、直に呼返して仕置せらるべきこそ順當なるに、如何なれば、態々役人を出役せしめて法を行はんとはなしたるにや、北條家の掟として秦時殿より定められたる五十三ヶ條の中、曾て斯る法あることを未だ聞かず、然すればこれこれには何か事由あるならんと存せらる、我未だ若年にして諸國に漂浪ひ修業せし頃、法華の行者日蓮に親しく出會つて能く知れり、彼は博學多識にして苟且にも國家を亂すが如き邪念の僧に非ず、畢竟佛道の甚く頼れたるを憂ひて、その信する法華經に依つて天下を安泰ならしめんと念するもの、されば時に觸れ諸宗他門の腐敗を罵る事はありと雖も、争でか愚民を迷はし一揆を起す如き事をなさん、何は更も

あれその鎌倉の出役こそ如何にも不思議、依ては一揆征伐は暫時見合せあつて、果して執權の下知か否やを鎌倉へ伺つたる上、その指揮に依つて一揆鎮撫の手續を取らるゝが宜らうと存すると、理を盡したる諫めに初めて氣附く伊東莊司 朝、ツーム……成程、如何にも貴殿の云るゝ處至極なり、我一概に岩淵丹下の言葉を信せしが、今更思へば鎌倉よりの教書もなければ添状もなし、何は兎もあれ鎌倉の意見を聞かんと、家來の中より人を選んで早飛脚を立てる、そこで鎌倉表に於ては平左衛門尉頼綱、武藏前司友直、宿屋左衛門尉光則以下の連中が打集り、種々吟味をするが素より岩淵丹下といふ者を伊東へ差向けた覚えがない、抑も丹下は何れの臣であるかと穿議をして見ると、執權職の後見北條長時の家來であるといふことが知れる、それでは長時殿の計ひとして、若しや丹下を伊東に遣たのではないかと、長時の邸に伺候をして内々此事を尋ねる、處が事實は長時が縁續きの極樂寺の住職、良観僧正に頼まれて私に日蓮を亡き者にせんと密かに丹下を伊東に遣したのである

が、素より斯様事の出来べき筈のものでなく、只宗敵たる害を除かんが爲の私事で、長時自身に吩咐たものだと云れぬ苦しさだが、肝腎の丹下が死だと聞くこそ勿怪の幸ひ、此處は一ツ罪を岩淵一人に被せんと早くも思ひ定めて、成程その丹下なるものは當家の臣ではあつたけれど、先頃不埒の筋あつて暇を遣したるもの、彼何か企む處あつて執權の命なりと偽り、伊東莊司を欺いて此度の事を仕出したるものと覺えたり、左れども既に當家より逐ひしものなれば、今更此方には少しの關係もないといふ挨拶、そこで宿屋左衛門から委細具さに伊東莊司へ返答に及ぶ、茲に於て江川太郎左衛門殿は左こそあらんと首肯されたが、伊東朝高は始めて覺つて宛然夢の醒たる如く朝、扱々、江川殿の御忠告なかりせば朝高既に世の胡塵とならんとせし處、御注意に依つて斯く明白となりし事何共以て忝なし、左りながら河名和田倉の一揆は如何にせば宜しからん、願くば戈を動かさずして取鎮むる工夫のなきにや、此義然るべく御勘考に預りたいと頼まれた太郎左衛門殿、大、イヤ、その義な

らば御安心あるべし、左りながら無謀身合の一揆の面々、多勢の上に謀采配を振るべき大将として無之者共、却つて此方より餘人を差向け討手なぞ、合點されては由々しき事なり、依ては某一人馳向つて事を穩かに納めん、貴殿は此處に在て吉左右を御待ちあれ、萬事に某の爲す儘に打任せ下されたい、朝なれども相手は荒くれ男の漁師共、單身の中へお出掛け下さること如何にも危し、太イヤ、その御心配は御無用々々々、某少々心附いたる義もござれば………朝、然らば太儀ながら………と此度の一揆鎮撫をお任せになる、抑もこの江川太郎左衛門義房といふ御人は、伊豆國の名家で代々布衣大官の位のある家柄、そこで外大名に於ても随分敬つて代官なぞは葦山の城主と同様に心得て居る、此人が若い時分に日本六十餘州を悉く遍歴をして、學問修業を兼ねてヤツトツの修業をして廻つた頃、京都の本屋で天王寺屋へ度々出入をする内、日蓮上人も叡山に在て御修業の折柄、互に見知合て懇意を結ばれたが、此時早くも太郎左衛門殿は上人の器量凡ならざるを見抜き、上人

も亦江川殿の人と爲を見て一世の名將であると深く信じられた、斯ういふ工合で能く上人の心地を知つて居る太郎左衛門、今はハヤ十六七年も首信不通で過てこそ居るが、日蓮といふ上人は決して人民を煽て、一揆を起さしたり、或は漁師百姓なぞを惑はすべき僧でない、固く信じて居るから、さてこそ代官伊東の頼みを苦もなく引受け、群がる一揆の中へ馬に跨つて只一騎、トウトと和田倉の濱邊へ駈附て見ると、成程蓆旗を數限りもなく押建て、上人の御座所と思しき堂には南無妙法の大旗を風に翻らせ、ズーツと波打際迄柵を結廻らして嚴重に構へ、思ひくのは扮装に徹めしく竹槍鋤鍬を揃い、竹法螺をブー、吹鳴らし太鼓を打叩く工合は殺氣立つて凄まじき勢ひであるから、馬の頭を立直した江川殿は大音を擧げて、本、我は葦山の江川太郎左衛門なり、法華經の行者日蓮上人に面會せん爲め能々これ迄推参せり、疾く疾く途を開いて上人の御座所に我を案内せよ、日蓮上人は何れに在する、我斯く遙々尋ね來りしに、汝等一揆に等しく得物を携へ、往來を妨ぐる

とは不審の至り、扱は上人の法敵を防がん爲の此有様か、若し左様の事ならば別段斯る騒ぎをなすに及ばず、太郎左衛門斯である以上は如何様にもして上人を守護し遣はさん、彼旗は何事ぞ……、又其方共の扮装は怪しかる形相……、餓饑物騒の當節柄多人敷集つて騒ぎ立て、は、若し一揆なぞと間違へられなば其方等の不幸のみならず、大切に守護する上人の御爲にも却つて宜しからず、依て早々旗を巻き、柵などを取拂つて了ふが宜しからう……、オ、それからその鋤鋸は何の用じや、其方の方には權などを振上げて面々漁や野仕事の歸りでもあるまい、サア、早く其様道具は名々の家へ納つて置け……、さう騒ぎ立てるには及ばぬこの太郎左衛門が出張つたからには如何様にも致してくれる、ナニ……、代官の討手と申すか……、左様な心配は必ず無用、身共は決して二枚の舌は使はん其方共を苦しめ咎めを受けさすやうな氣遣はないぞ、安心して早々此場を引揚げいとキツパリ云はれる、素々この江川殿は仁政を布て民百姓を慈しみ、年貢を薄くし

て領分の者を見ること我子の如く、慈悲善根を施すから外々の領地の者迄が大きに羨んで居る、殊には伊豆の國の舊家で誰知らぬ者もない人だから、これが外の役人ならば忽ち得物を打振つて手向ふのだが、江川殿の權威と人望に依つて只静まり返つて早々道を開く、その内に氣早の奴が上人の御座所に駈附けて此趣を傳へると扱は良きお人のお出かな、疎忽なきやうこれへ御案内いたせとの仰せ、取つて返して太郎左衛門の馬前に平蜘蛛の如く兩手を突て、〇これは、お殿様には遠路の御越し、只今お上人へ申し上げましたる處、直様お堂へ御案内申せとの仰せでござります、我々は皆講中の者でござります、今日も斯く説教聽聞に参りますと何が扱御繁昌を嫉んで他宗の者等が折々妨をいたすとの事、その爲に血氣に逸る若者等が斯様の騒ぎをいたし居ります次第、何卒殿様の御威光を以つて上人のお身に善なきやう……、へえ、さうか幾重にもお願い申します……、本へ、ア左様か……、ナニもさう心配するには及ばん上人の上には氣遣ふことはな

い、安心いたせ、先づ上人にお目にかゝらん案内いたせど、ヒラリ馬より飛んで降り、徐々とお堂の方へ進まれる、それと見るより上人は走り出で、日「これは江川殿には態々の御光來、恐縮至極……、一別以來の御面會、御健勝の體は何より喜ばしく……、太「イヤお上人にも益々御健固、相變らず御布教の段は悲悅に存する、打續く御法難の爲に御心勞の程も左こそと推察いたす、なれども追々法華經の功力も世に現はれ、聽て御宿願の程も達するでござらうから、尙此上にも御布教肝要と存するが、兎角何事も時節を待つが第一にして、世の中の事は凡て異論な邪魔の生ずるもの、彼明晃々たる月も時には雲に遮ぎられ、光りを失ふことあるが如く、行末如何なる障礙あらんとも知るべからず、左れども邪は正に勝たずして遂には輝く光明を認むるは必定、必ず御落膽あるべからず、夫に就き、見受くる處随分多勢の集りし様子、斯ては冤罪とは云へお咎めの中の上人の身の上、若し此事鎌倉へ聞へなば罪も重なる道理、素より無智蒙昧の士民共が勢に乗じたる事とは云へ

爲すが儘に任されては世上の聞へも如何、此義は上人より懇々お諭しあつて、速に退散して各々稼業に出精するやうお取計ひ下されたく、その爲太郎左衛門が態々推参いたしたる次第……と語られる。

第九齣 流罪赦免、小松原の御難。

伊東の代官莊司朝高は名も知れぬ病氣に冒されて、醫藥は素より神佛に祈りをかけて居るが更にその効驗がない、扱斯うなると流石は土地の代官程あつて、一家親戚は云に及ばず多くの家來迄が悉く心配をして、疎かならぬ看病はして居るが今は只死を待つの外はないといふ有様、處が此事を聞たる江川太郎左衛門が、朝高の館へやつて来て日蓮上人の法力に依つて祈禱をして貰つたら宜らうと勤める、莊司朝高に於て既に上人不思議の功力は聞て居る上に、モハヤ全快の望みなしと力を落して居る時も時、早速江川殿に上人御招待の事を頼んだから急ぎ和田倉の假堂に態々來

つて斯くとお頼みをする、上人に於ては外ならぬ太郎左衛門の頼みだから快く承知をして、且さてくそれはお氣の毒、人間の定命は假令神明佛陀と雖も如何ともする事は出来んが、人を救ふは出家の役、及ぶ限りは佛菩薩に祈つて見るでござるとその日直様同道をして伊東の館にお越になると、豫て噂の活如来と一家の者の手厚き待遣、一ツは病氣平癒がさして欲いから下へも置かぬ取扱だが上人は却つて固く辭退されて三度の食事の外は他目も振らず、只一心に佛間に籠つて行ひ澄し、観經讀誦に耽つて居られると不思議や漸く三日目よりして功力現はれ、左しも重かりし病も日に薄紙を剥ぐが如く、祈りを上ること一七日にして忘れたる如く全快をして丁ふ、朝高始め家内の喜びは譬ふるに物もなく、江川太郎左衛門に於ても云甲斐ありと大きに面目を施こし、これよりして伊東の一家は上人を敬ふこと神も及ばぬ位、忽ちこの噂の弘まると共に伊東一郷の者の上人を尊ぶこと口にも筆にも盡せぬ有様、愈よ活如来として毎日ゾロゾロ朝高の館へ詰かける老幼は蟻の甘さに

就が如く、此處でも數知れぬ信者が夥しく出来たといふ事だが、その内弘長二年となつて上人の御年が四十二歳、この年に又如何なる御運の強さにや、漁師彌三郎の網に罹つて伊東の沖合に於て釋迦牟尼世尊の尊像が揚つた、見るといふと古色蒼然たる御木像、早速彌三郎から上人に奉ると、上人もこれ偏へに我本願を佛も感受しましたし、我に此像を授けて益々宗門の繁昌をなさしめ玉ふ處ならんと大きに喜んで、恭しく拜禮をして遂にこれを和田倉の本尊に据られて、和田倉の假堂を海光山佛現寺と名附られたといふことで、後にこの木像は日明師に賜つて、今現に京都の本國寺に安置してあるのが此尊像だと云傳へてある、又この年の十一月には、日本古今の名僧親鸞上人が京都に於てお隠れになつて、此時には日蓮上人御直筆のお悔狀を態々京都迄進じられたといふ事、これ又今の世に至る迄、日蓮上人の御悔狀と云つて未だに京都西本願寺の寶藏に納まつてあると聞て居る、然る處越て翌年の弘長三年に至つて、最明寺時頼入道大きに悟る處あつて、始めて安國論の値打が分つ

て大きに前非を後悔され、如何にも日蓮上人の説きし如く、安國論は國を亂すが如き亂暴の議論でなく、全く天下の形勢は彼が論じたる處の如し、我過つて彼を流罪に處し、ならは如何に、氣の毒、斯る名僧は再は得難きものであると、遂に流罪赦免になら、といふ事になる、といふのは外にはない、時頼入道に於ても年々打續く凶事に大きに心を痛め、斯く災難が打續いては世の中は大變であらう、民百姓の苦みは如何なる有様であらうかと、弘長二年の七月中旬、二階堂道永を供に連れて諸國行脚に旅立つて、親しく下々の事情を見て廻ると言語に盡せぬ憐れの有様、至る處に行倒れが出来て疫病は流行し、野面に生ける草としては更に見當らずして木の皮草の根を喰つて生命を繋ぐ、偶々露命を繋ぐものも顔色衰れて病人かと疑ふ許り最明寺時頼入道が二階堂道永を連れて、諸國を行脚して下々の有様を見ると驚いた、饑饉で難澁の上に土地の領主は民を虐げ、我儘勝手に舉動つて重きが上に尙一層の年貢をはたき、民の苦みは何に譬へんやうもなく、又到る處の寺々に一人としてこれ

ぞと思ふ僧侶もない、何れも皆表に忍辱の法表を纏ふと雖も、その行ひは凡俗さへも尙あるまじき不埒の舉動、酒食榮華に耽つて十戒を破り、女人を近附け甚しいのになると賭博賭勝負にその日を送るといふ有様茲に於て入道は大きに世の中の亂れたるを嘆き、尙國々を遍歴をして居られると、下野國の佐野といふ土地に於て、計らずも佐野源左衛門常世といふ者を見出して、種々試して見ると中々見處のある優れた人物、左れば後に鎌倉へ召出して武者所の別當に擧られた、而しこれはズツと後の話……、時頼殿は遍く行脚をして悉く下々の情を調べて鎌倉に歸つて考へて見ると、成程日蓮といふ僧は誠に先見の明あるもの、曩に立正安國論を差出して我を諷めしが、今こそ思ひ當つたり、如何にも世の中は末法の始り御法の亂れ、我不明にして一概に彼が論を斥けて伊豆へ流罪にしたりしが、嗚や世の人は我處置を嘲り日蓮は我を恨み居ん、彼全く己れの才學を誇り又その宗門の流布にのみ安國論を著したるにあらずして、誠に國を憐れ民の苦みを助けん爲め愛國心より出し處、

彼に寸毫の罪あるべからず、假令遇ちし裁許とは云へ改むるに吝ならば益々世の人に笑はれん、早々彼を赦免して鎌倉へ召還すべしと、その年の二月廿二日御赦免状を伊東莊司の方へお遣はしになる、そこで莊司から上人にお傳へすると大きにお喜びになつて、急ぎ出船の準備をしてハヤ御出立にならんとする、伊東の住人、或は和田倉河名の漁師百姓は何れも上人を父母の如く慕つて居るから、今俄かに別るゝを惜んで我もくと濱邊に見送り、涙を流して御無事の渡海を祈つて居る、上人も斯かる厚き志を大きに感せられ、見返り勝に御船に乗移られると、松葉ヶ谷からしてお迎へに立つたる日朗日昭の人々に急立られ名残惜くも船は真帆に風を孕んでドン沖へ出る、海上も誠に安穩で幾日かを重ねて松葉ヶ谷へお歸りになると、待ち待つたるお弟子と大檀那は御無事の有様を見て大きに喜び、これより再び松葉ヶ谷は以前に變らぬ御業昌、處が時頼入道も心には甚く上人の御徳を感じて、直にも召出して教法を聴聞せんとは思つたが、今赦免したばかりの日蓮に親しく歸依して

は他宗僧侶の思惑も如何あらんと暫らく時節を見合せて居られる、實にや世の中は花開いて風雨の難あり、上人も此時に時頼入道に會つて歸依せしめたる後ならば、天下は忽ち皆歸妙法、誰一人敵對ふものもないのであつたが惜い哉、上人の御運は未だ開けざる時にやあらん、同じ弘長の三年十一月廿六日、最明寺時頼殿は三十七歳を一期として黄泉の人となられた、斯と聞れたる上人も殊の外お氣の毒に思召され、入道殿の爲に法華經を讀誦して冥福を祈られたといふが、時も時、不幸は未だこれのみに止まらずして、今度は房州小湊にござる母公が御危篤であるといふお使者が來た、素より御孝心深き上人の事、殊には長らく流罪の爲に音信も思ふに任せなんだのだから、取るものも取敢へず二三のお弟子を引連れて小湊に歸つて見られると、既に遅し、母公は上人の事を云續けに今の先息を引取れたといふ處、見ると御親類の方から近邊の人々打集つて涙を押拭つて居る、上人は時遅れたるを大きに嘆かせられ、今一時早かりせば生るる中に御對面を遂んものを、ア、残念なりと流石

は血縁、涙に掻き着てお在になる御心中を察して、並居る人々も思はず袖を濡して居る、ガツカリ力を落された上人は嘆息の息を吐いて、口ア、世の中に恐らく我身程の不孝者はあるべからず、先年御父お隠れの時にも息ある間にお目に掛らず、今又母に斯くのお別れ、只此上は冥福追善の爲に、陀羅尼品を誦して亡き母の靈を慰め切ては後世安樂を御佛に祈り奉らんと、庭に下立つて古木の梅の枝に題目を認める一枚の紙を吊して、心耳を澄し眼を閉して一心に經を唱へて居られる、と、上人の孝心の通じたるかそれとも觀經の功力にや、既に締切れたる母公の死骸に血の色が現はれる、これは不思議と親戚の方々近附いて見ると、絶へたる脈が通つて身體に暖味を生じ、見る見る内にパツパツ眼を開いて四方を眺められたから、一同思はず喜びの餘り、アツと揚たる驚きの聲が耳に入つて、上人の御姿を寝ながら遙に認めて笑を浮べられる、さては開及ぶ上人の功力に依つて枯木に依つて枯木に花咲く御利益も現はれしかと、奇瑞に驚くと共に始めて愁の眉を開いた一同の人々、ソレ

薬、ヤレ水よと寄つて集つて母公の介抱をして居る内、追々正氣附てハヤ口も利るやうになつて、母公の喜びは病ひの助けとなりしものか、日を経るまゝに元の病氣も悉く癒去つて、病まぬ以前に優る壯健のお身體となると、忽ち此評判が遠近に傳はつてそれからそれへ擴ると、近きは態々お招きをして祈禱を願ひ、遠きは來つてお加持を頼むが、何れも立るに効驗が現はれて日々の往來引も切らん、終には一々上人にお頼みしても應じ切れん處より、石に題目を認めて井戸に投入れ、その水を飲めば大抵な病氣は癒るなんぞ云々すやうになる、然る處日蓮上人に於ては建長五年四月廿八日の法座を限り師の道善阿闍梨に勸當を受け、絶て久しくお便りもせねば素よりお目にも掛らぬが、老年の今も變らずお壯健であらせらるゝであらうか、我斯く諸人に敬はるゝ爲の修業も皆これ師のお蔭、假令御勸當を受けたりとも今態々此地に來りながら、御安否さへも伺はぬは人の道に非ず、左れども一旦御勸氣を受けたる身を以て、自身我儘に御面會を願ふは法でなし、誰かの口添を以てお

目に掛らばやと思案の末、豫て御信仰厚き濱荻次郎春房殿にお話があると、それは能くぞ心附かれたり、我御身の爲に阿闍梨上人に取做すべしと、早速登山をしてテこれ〜とお話になる、道善殿に於ても素より日蓮上人を嫌つて勘當なぞをしたのでない、大檀那東條左衛門の怒りに觸てその身に及ばん事を恐れ、只表向の勘當をしたといふまで、今末法の世の中に、妙法の旗上をするお弟子が来たとあつては寺の譽れ身の面目、八宗の法敵を相手にすると勇し、昔の蓮長今の日蓮大行者我何とて面會を拒むべきや、久々の對面直にも登山してくれるやうにと、いふお言葉、春房が取つて返して此趣を上人に話すと喜び勇み、日朗師を召連れて清澄寺へ御登山になつて、前年書著しになつた念佛無見書といふをお目に掛られると、道善阿闍梨も喜んで種々のお物語りがある、上人に於ては師のお年老られた姿を見てお悼しい事であると潜に溜息を吐れたといふことで、この念佛無見書は今以て清澄山に残つて居るといふ事だが、以前こそお弟子の蓮長だが今逢つて見るとなかく

立派な修業も出来て、見上る道徳の智識となられて居るから大きに感じて、道善阿闍梨専ら上人を敬つて少時お寺へお止めになる、處が此處に當國天津の城主、工藤左近義高といふ人があるが、この工藤左近義高は、取て日蓮上人とは師檀の間柄、此度鎌倉表交代の任滿て天津へ歸つて來ると、丁度上人が千光山に御逗留であると、いふ事を聞いて、幸ひの折柄なりと大きに喜び、家來の北浦忠吾、同じく忠右衛門の兩人に命令で、どうか我館へ御光來あつて一夕の法話がして頂きたいと申入ると、上人は兩人のお使者にお逢なされて、日「それは何共御奇特のお心掛け、早速同道致すであらうとの御返答、なれども師の阿闍梨が俄かに別るゝも本意なしと勸められるので、尙一日二日は千光山に足を止められたが、再び工藤家からの御催促に依つて師に別れを告げ、弘長三年十一月十二日、祖師上人は一旦小湊の家へ歸つて翌る十三日、日朗日昭の外に敷忍坊と長英を供に引き連れ、天津を差して道を急いで居られると、此處に同じ房州東條の城主東條左衛門景信は、先年清澄山に於て上人の

説法を甚だしく憤り、年經し今に至るも尙その怨みを遺して居る、然るに日蓮上人工藤の招きに依つて今日天津に赴かるゝと聞て雀躍し、おのれ日蓮美事我領地の土を踏で見よ、有無を云はず忽ち討取つて先の怨を晴さんと、偏強の家來に云合めてイヤ來い來れと待伏をする、此事を又密かに聞傳へたる他宗の坊主等、學徳の及ばざるを以つて上人を憎むこと敵の如く、領主の憤るを幸ひこれに加勢して、目の上の瘤ともいふべき日蓮を亡き者にして、後日の憂ひを除き法敵を交盡せよと、云合さねども思ひは同じ破戒の惡僧輩、其方此方から集り來つてこの勢凡そ四五十人、先より程遠からぬ小松原に影を潜めて相待つたり、斯るべしとは夢にも知らぬ上人は、先に立つて既に小松原の手前に差蒐ると、俄かに立止つたる教忍坊「ハテ不思議や、我天文を學びたるにはあらざれども、今この松原を見るに何其合點ゆかざる殺氣立ち昇れり、昔し名將も云ひし如く、野に伏兵あらば雁行を亂す、思ふに上人の御徳を嫉んで道に害を加へんと圖る者なしとはいふべからず兎もあれ何れかへ

道を變るが何より肝腎と存じまするが……と、上人の御袖を控へてお諫をした、抑もこの教忍坊といふ僧は、元奥州白河の住人、白河八郎と云つて武門に育つたるもの、祖父の民部といふ人は平秀衡の一族で弓矢を取つては名だゝる勇士、さればその血筋を引いて武藝も餘程達者だが、故つてこの八郎に至つて浪人となつて諸國を漂流ふ内、上人の弟子となつて名を教忍坊と賜つたのだが、力三十人力もあらざといふ剛勇の人で、自然兵書にも暗からぬ處より扱こそ斯様に諫めたもの、處が上人は更に驚かせられずして「イヤ、如何に法敵が此身の教法を妨げんとする連も、豈夫生命を奪ふが如き事あるべしとは思はれず、仮令又御身が氣遣ふ程の事あればとて、法華經流布の爲には始より既に投出したる身命、何ぞを恐れて惜まぬや、死するも生きるも皆これ運命の定むる處に任せんのみ、以れも安堵して我に従へよと、未だ言葉も終らざるに、一叢茂る小笹の蔭より、現はれ出でたる異様の人影、さてはと見る間もあらばこそ、小手匠當に甲斐やしく身繕つたる十有餘人の

荒くれ男、手にく大太刀振冠つてドツと関を揚げ、此方を望んで蔭地に駈附る有様、問はずと知れし上人を害せん敵勢、斯くと見て取る教忍坊、法衣の袖を兩手に纏んでバリ、と裂捨て、傍を見ると周圍凡そ四五尺もあらんかと思はる、松の根方に走り寄り、惣身の力を置めてエイヤツと引抜と、驚くべし風を生じた折しもある、左手の小松原からバラくと立現はれた奴共が大音に、
 ○「ヤア、口運能く承まはれ、汝未だ忘れはすまじ、過る建長五年四月十二日、傍若無人の説法をなしたるに依つて當領を放逐せしに、領主を侮り一應の答へもなく我儘に此處に来るとは不屈至極、汝誰が許を受けて我儘の舉動をなすや、これ國法を犯すものにしてその罪容すべからず、諸人への見せしめ今此處に於て賣僧日蓮を誅伐せん爲め東條景信向つたり、ソレ物共……と差圖の下、嫡子三郎景虎が真先に進んで一採に斬捨んと駈附る、此光景に教忍坊は双方に敵を受け、心は矢竹に逸れども稍防ぎ兼て居る右手の方より、櫛を綾取り法衣の衣を高く塞げ、頭は面深に袈裟を以つて包んだる

惡僧共、これも亦二三十人手に手に得物を打振つてドツと喚びて現はれた、斯く三方から出て来た敵勢五六十人、味方は僅か四人だから、流石の教忍坊も進んで闘ふ勇氣も挫け、只上人のお身の上が大事とザリ、退りながら守つて居る、日朗日昭は如何にしても上人を立退かせ申さんと、心は焦慮るが下打に逃出しては如何なる伏勢のあらんも知れずと、上人を中に挟んで如何にやせんと躊躇つて居る、その危うさは淵に望める小兒が風前の點火にも譬へつべく、
 ○「ヤア、此松原に生命を預し給はんかと思はれたる折こそあれ、○「ヤア、上人これに在せしか、我等御迎ひの爲め參上せり、假令何百人にて追取込むと必ず御心配あるべからず、イザそれハ參つて見參仕らんと、砂を蹴立て、飛込み來る者がある、ヤア嬉しやと上人始め、何れも聲する方を眺められると、これ別人ならぬ無二のお味方、今日招待をしてお待受けをした工藤左近義高で、北浦忠吾と忠右衛門を供に連れ、上人御迎ひとして此處へ來て見ると、コハ抑も如何に、今や上人を取巻いて害を加へんとする者がある、

大きに驚いて能く見ると、敵と見へしは紛ふ方なき東條左衛門、おのれ惜しい奴、假令日頃の交りある東條なりと雖も、我信する上人を殺めんなど、は以ての外なり、有無は兎に角先上人の御危難を救はずんばあるべからずと、面を振らす驕地に駈附け來つて、我「ヤア、これに來りしは東條殿と見しは僻目か、我は工藤義高なり、如何なる所存あるかは知らざれども、佛門に歸したる僧侶、具足を固めて手向ふとは大人氣なし、況んや大弘通の法華經の大行者、日蓮上人を苦むるとは甚だ以てその意を得ず、故なく無禮を加へなば却つて天の罰を受けん、早々前非を悔て道を開て通さるべし、若し左もなくして強て上人に敵對なさんとならば、斯くいふ義高がお相手すべし、日頃の交誼ありと雖も上人の身には代へ難し、如何に御返答を承はらうと大音聲に呼はつた、斯くと聞たる東條左衛門、屹と此方を見渡し、

「這は奇ッ怪なり工藤氏、扱は日蓮が妖法に欺かれ、隣地の窟さへ打捨て、この景信を敵とせんとは事可笑し、さらばよし、汝飽迄日蓮が身を守護せんとならば我干

萬言も無益ならん、我は飽迄日蓮を懲しめずんば止ざるなり、尙それにも日蓮を助けらるゝや如何に、我「云にや及ぶ、汝飽迄闘はんとならば我又必ず上人を守らん我信する上人と御身の交誼は代へ難し、景「ユへ面白し、左らば汝も同類として討取るべし、我「佛に仕ふる僧侶の身に危害を加へんとは不將至極……景「何をツ……ソレ物共……と耐へぬ景信、眼を瞋らし下知を傳へる、家來の面々心得たりと工藤主従を追取込めてシリ、と腰の一刀抜く手も見せず、寄來る三四の如く憤つて、我「ウヌ無法者……と、腰の一刀抜く手も見せず、寄來る三四人の東條が家來を瞬く間に薙仆し、上人にお怪我あらせてはと御傍に近寄る折しもビユーツと飛來る征矢一ツ、風を切り呼鳴を生じて工藤義高の咽喉元深くグザと立つ、急所の傷手に何かは堪らん、アツと叫ぶが此世の名残り、尻居にドツと仆れて敢なく討死をして下ふ、惘れや此處に來合せて、信する上人を救はんが爲に落命をしたから、従ふ家來の忠吾と忠右衛門の兩人は、眼前主君を討れて怒みは骨髄に徹

り、おのれ殿の怨敵今に思ひ知らしてくれんど、血眼になつて當るを幸ひ難立て斬捲るなれども、味方は僅か教忍坊と只三人、如何に剛勇の狂者なればとて二三十倍の敵を引受けては何か堪らん。三人各々敵勢に駆隔てられ、前後左右より打込むは雨と降來つて、これも同じく怨を呑んで斬死に討れて了つた有様に、上人は悼しの御涙に暮れ玉ひ、頻りに陀羅尼品を唱へて怨敵退散の祈を擧て居られると、芒の如く斬込み來る刃を物どもせず、最前より大汗になつて敵の多勢を相手に、此處を必死と闘つて居つたる教忍坊は、例の松の根拔を枝葉は既に敵の爲に斬り拂はれ、幹ばかりの松の木をリウ〜と振廻して、或は腰骨胸の邊り、頭と云はず足と云はず、處嫌はぬ滅多打に數多の敵を駆惱まして居つたが、追へども拂へども入替り立替り向つたる敵勢に身體綿の如く疲れ、進退駆引の自由ならざる隙を窺ひ、狼ひ寄つたる一人の奴に右の肩先をスパーリ、切下られてタヂ〜、持つたる松の木を思はず取落すと、得たりと駆來る十五六人の奴に滅多打の尖先を浴せられ、如何

に剛氣の教忍坊も得物を持たざる悲しさに、無念無念と叫びながらこれも亦落命をすする、斯る暇に上人のお身の上が一大事と、日昭日朗の兩師は上人を守護して何れへか通れんと、徑道を指して走り去らんとし、僅かに残る長英が踏止まつて殿りをするが、武藝に暗き長英だから、忽ち敵の手に罹つて空しくこの場に生命を殞す。斯くと見ゆる三郎景虎、馬を飛ばして上人を追駆けながら、拳ッヌ賣僧奴、逃るとして逃すべきやと追絶りさま、及び腰に太刀を振冠つてエイツと鋭く打下したる此時早く、上人は右手に持つたる珠數を振上げてカラリと刃を受玉ふと、水昌の親玉は二ツに割て尖先餘り、アハヤ上人の眉間に斬込んだかと思ふと、サツト血汐を噴出し兩眼に流込んで眼力を失ひ、ヒヨロ〜ドンシと尻餅を搗かれたから得たり賢こしと、三郎景虎は刃を取直して馬上より上人を一突にせんとしたる折、如何にかしけん一陣の風吹き來ると共に、馬は何物にか驚いたる如くヒーンと高く嘶き、兩の前足を立て、躍り上つた途端に、三郎の身體度を失つて真逆様にドンと落ちたる

時、我と我刀にグサと咽喉を突貫いたから聲をも得立てず息絶へた、これを正しく天の佑けと上人はヤオラ起直つて、日朗と日昭を尋ねらるゝが影だにない、ハテ不思議や、今迄此處に居たる筈と、四方を見渡さるゝと追々敵勢が追來る光景、見附られては一大事と、額の痛さを忍んで何處ともなく走つて居られる内、時は既に十一月中旬だから暮方からチラリ〜と雪が降る、サテ斯うなると如何に上人でも疲れが出て、寒いと感じられると共に氣も緩み、寒氣の身に沁るに連れて疵所の痛さが増て來る、後振返り〜敵を氣遣れると別段追來る様子も見へんが、痛さと疲れと寒さの爲に殆ど難義の思ひをなされ、今はハヤ一足も歩み難いから立止つて向ふを屹と見られると、一ヶ坂の村外れの道に添ふて崖があつて、その崖に大きな穴のあるのを見附け出しどうなるものか少時疲れを休めんと、寒さを忍んで居られる内に日はトツブリと暮れる、疵は次第々々に痛みを生じ、堪へ難き迄に苦しいから心の中で大きに嘆かせられ、ア、如何なれば斯く禰に出會ふことやらん、既に法の爲

には亡き生命とは覺悟はすれど、一難去つて忽ち新たな難に逢ふこと屢々なり、去ども常に生命を全ふするはこれ未だ天の我を捨ざるもの乎、思へばこの後如何なる艱苦の生せんも計り難し、左りながら昔し釋尊永劫の難行に比ぶれば遠く及ばず法華經にも説れし如く此教法を布かんとせば概ゆる苦行を重ねて時としては斬らるゝことあるべく、又は人なき里に月を眺めんこと必然なりとは既に示さるゝ處、我今中途にして撓まば又何時の時にか榮えん、夫を思へば斯ばかりの苦みは何の物かは、願ふ處は只法華經の弘通にして、弘法の爲には日蓮死すとも悔ゆべきにあらず努々嘆くべき時ならじと、吃と心に思返して口の内に經を唱へて居られる内、鑿てホノ〜と夜も白み渡る、誰か往來ふ人のあれかしと穴の外を見て居られると、トポ〜と此處へ來蒐つたのは、土地の名主權左衛門といふ人の老母只一人の孫が痘瘡に取附れて、至つて重いので見るに忍びず、鎮守の山王權輿に願立をして、實に子よりも孫は可愛いとの誓への如く、雪の曉の寒さも忘れて朝疾く起出で、綿帽子

を戴いて杖に縋り、曲つた腰に草履穿で来る。それが面も素足だから見るからに寒さうだが、可愛い孫の爲と婆さん嫌な顔もせず、何か口の中に吐き吐き此穴の前迄来て脊伸をした拍子に、ヒヨイと上人の姿を見て甚く驚き、オ、オ、オ、何方の御出家様か存じませんが、一體どうなされましたのでござります、この寒いに此様な處へ……………と差覗く不審の態、上人も斯くと見て幸ひの老婆、眞實を明したとて別條もあるまいとは思はれたが待て暫し、偶として此地も同じ東條の領分であれば如何なる禍のあらんも知れずと、左あらの体に、日、老婆こそお早のこと、實は昨夜此先で剽盜に出逢ひ、此通り額に疵迄受けて痛さと寒さを此穴で凌ぎ、やうく一夜を明したところ、土地不案内の悲しさ何れを便らん術もなく誠に難澁をいたした次第でござる、オ、オ、それは、嘸御難澁でござりませう、まア恐ろしい悪い奴もあるもの、他人様の物を只取るさへ罪の深いに、何憎しみがあつて御出家にお負傷をさせましたものやら、定めてお痛のこととござりませう、妾は少々理由あつ

て只今向ふのお宮様へ參詣の途中でござります、お待遠でも歸るまで此處でお待なされ、妾の家へお連れ申して療治もいたし、又御休息もなさりませ、何分それでは疵に風でも入つて、破傷風とやらにでもなつては大變でござりますそれ迄の處これでも被つてお在なざるやう……………と、自分の被つて居つた綿帽子を脱いで上人に差出したから、上人もその志の厚きを大きに喜ばれ、云はれるまゝ其處へ待つてお在なると、聽ての事に歸り來つたこの老婆、先に立つて我家へ案内をして一同にも此物語をして、早速藥を調へて疵所の手當をする、此時に始めて額の疵を改めて見られると、仕合と三寸許りのかすり傷、老婆が親切に介抱をして呉れる内に主人にも逢つて見ると、此權左衛門といふ人は至極正直な律義者、俚言にも云ふ如く朴訥は仁に近く、それこれお世話をする内上人のお話を聞いて悉く敬ひ、世に難有き名僧と尊信をして親切に世話をする、そこで上人も大きに氣を許して法話をしられると家内中喜んで聽聞するから上人に於ても大きに喜ばれ、尙それこれの話の内に小供

の瘡瘡を癒しやらんと。お針御封といふ呪詛をして諸佛を祈つて居れると、不思議な
 るかな最早醫者も見放して、薬掻きに薬掻て苦んで居つた今年八歳の獨り兒が、苦
 痛を忘れてスヤ／＼寝入る様子、さては今にも息を引取る爲に静かになつたのでは
 あるまいかと、遽かに醫者を迎へると不審しうに眉を蹙めた竹庵が、竹ハテこれ
 は不思議……、迎も助かるべき病人でないから宜い位の薬を置つて置たに、ど
 うした拍子の瓢箪やら餘程工合が宜い、これはどうも合點が行かん……と首を
 捻つたが、何しろ全快の見込が附たから、今度は眞面目に薬の調合をした、扱病氣も
 快なる時には雑作のないもの、素より多小薬の効能もあつたには相違ないが、道徳
 高き上人の加持に由つて病は日に／＼薄紙を剥ぐが如く、僅か五六日の中に悉く全
 快をしかから、權左衛門夫婦の喜びは更なり、廣くもあらぬ村中にバツと評判が立
 つ、そこで傳へ／＼て此事が遂に天津の工藤の方へ聞へると、工藤義高の嫡子行光
 は父義高と家來の横死を悲み、教忍長英の死骸と共に我館へ引取つて手厚く葬つて

尙上人の御行衛を案じて方々と搜して居つた折柄、自身にこの一ヶ坂村へお迎ひに
 來て更めて御招待をする、上人もその意に従つて天津の館へお出になると、何しろ
 工藤義高が討れて一家は悲みの淵に沈んで居るので、元はと云へば皆我爲に斯る憂
 目を見することかと、殆ど挨拶の仕様もないが扱あるべきにあらざれば、義高殿の
 法號を妙隆院日玉上人と賜つて懇ろに供養を營まれる、長英と教忍坊の死骸は小
 松原に葬つてあつたが、後には此處に一字の寺を建て、これを淨觀山經忍寺と改め
 られ現に今尙は此の地にお寺があつて、年々十一月の十二日になると、八宗檀林の
 僧徒達が此經忍寺へ集つて大法會があると云ふ、處ろで彼の東條左衛門景信はさう
 かといふと、これも小松原の圍ひに馬より落たのが原因となつて、打處でも悪かつ
 たのか、足腰立たぬ躰同様となつたる上に、頼に受たる疵が痛みを生じて堪へ難い
 尤も即時に醫者が駆附けて纏つては見たが、縫口は忽ち綻びて熱を發し、ドツと床
 に就たるまゝ、醫言さへ吐やうになつて、夜となく日となく苦み悶へ、ソレ火の車が

迎ひに来た。ヤレ牛頭馬頭の鬼共が我を伴ひ去る。オ、苦しや恐ろしやなど。あらぬ事を口走つて眼を見張り、大汗になつて座敷中を狂ひ廻つて、とうとう七日目に狂ひ死をして丁つたが、上人はこの天津に足を止めらるゝこと暫くにして、別を告て間もなく松葉ヶ谷へお歸りになる。斯の如く上人は伊豆から教免になつて歸られても、一日として身體を休む暇もなく、今日は鎌倉明日は房州と、それから四年の間といふものは所々方々に教化を布いて法華經の弘通に務めて居られると、之を見聞く他宗の僧徒等、永らく伊豆に流され再び歸るまじ、思ひし上人も、昔しに變らぬ熱心に各々檀徒を奪はれ、斯くては又々名々の宗門が寂れ行かんと氣を焦感りおのれ宗敵、我等の爲めに飽迄邪魔する日蓮奴、今に何事か出来れかし、忽ち此地を遠避けくれんと血眼になつて隙を窺つて居ると、時は文永の八年となつて古今稀なる大旱魃、春小雨、夏は夕立秋早利といつて、農家は凡て斯ういふ順に行かんと充分の收穫が見られぬのに、今年は又如何なる年の廻りにや、一月早々から少しの

雨さへもなく、春からカン／＼照續けて、夏に至つて蒸暑くして折々雨氣は催するが一粒の雨さへもないといふ………。

第十齣 田邊ヶ淵の雨乞。龍の口の御難

文永八年は古今を通じて大旱魃、春早々から照つて／＼照續けて、八十八夜も過て種下したといふのに苗代の水が一滴もない、その内／＼と待甲斐もなくハヤ五月の中頃ともなると、農家は何れも青息を吐て大心配、田地を見ると水田迄が悉く龜の甲の如く割て、どうする事も出来ないから到る處で雨乞をするが更にその効がないのみならず追々と身體に障つて病ひが流行る、扱斯うなると下情を知らぬ執權職迄が大きに心を惱まして、時の執權北條時宗、鎌倉中の僧侶に仰せを下して雨乞を命じた、中にも極樂寺の良觀僧都は豫て己れの信仰する所、殊には鎌倉表筆頭の大伽藍であるに依つて、改めて雨乞のお頼みがあつた、そこで良觀大僧正恭しく壇

を築き、一山の僧徒五百餘人を集めて一七日の間、嚴かに祈を上たけれども、雨は愚か、益々炎大焦すばかり、雨氣を催す雲さへも現れん、といふこれでは不可んと大きに氣を焦つて法を修すること又七日、去れども天は何處にも知らぬ顔をして一向雨降りさうにはない、愈々躍起となつて今度は鎌倉の僧衆三千人を狩集め、香を焚き經を誦んで宛然唐瓜船を見るが如く、毎日／＼圓い頭を並べて祈つて三七十二日の行をするがこれでも不可ん、流石剛情の良觀もホト／＼倦んで居る處へ身には墨染の粗衣を纏つて只一人、ブラリと此場に現はれられたのが日蓮上人満座の後、に衝立つて大音に、且當山の良觀大僧正は高德の智識と聞きしに、斯く多勢の僧徒を以つて祈られながら、僅か一滴の雨に降し得ざるとは情けなき事かな、三十の僧衆三七日の祈願も何の甲斐なし、斯くても尚ほ衆生濟度を以つて任とせらるゝは覺束なき限りなり、如何に良觀僧正、今より志を翻して日蓮が弟子とならるゝお志はあらざるか、左すれば炎天に雨降す事位はお教へ申さん、日蓮誓て偽りを

違ものにあらず、如何に思召さるゝやと、高らかに呼はれたから良觀坊怒るまいことか、左なきだに心焦立つたる折柄であるに依つて、頭からボツボと湯氣を立て、顔を真赤にして其方を屹と睨んで居る、これより先、松葉ヶ谷に始終齋語をする入澤の道淨坊、岩瀬の太夫坊といふ兩人は、良觀とは懇親の間柄であることを上人が聞及ばれて、此兩人を以つて良觀に申入られるには、貴僧若し念佛の力に依つて雨を降らし得たらんには、日蓮は法華經を捨て、貴僧の弟子となるべし、然れども雨を祈つてその効なくんば、この日蓮が法華經の功力に依つて立所にその効を現はすべし、左ある時は貴僧は念佛宗を捨て、我弟子となり、直ちに法華經の行者とならるゝや否やとの口上、之を聞た良觀殊の外憤つて、憎くき日蓮無禮の言を吐ものかな、左もあらばわれ、我は飽迄念佛の功德に依つて雨を降せんと、拵こそ必死に雨を祈つて終には三千の僧徒迄も呼集めたのだが、抑もこの良觀は大和國敷島に生れ、姓を伴と云つて十一歳の時に須彌山に入つて修行をして、十三歳の時に殺食を

斷つて國々を修行し、建長の四年關東に來つて律宗を弘めたが、北條義時の三男陸奥守重時深く良觀を信じ、遂に極樂寺を建立して開基とした、それ等の縁に依つて鎌倉中での智識と崇められて居る、然るに日蓮上人の掛合に依つておのれ日蓮、美事雨を降せて閉口させんと一心に祈つて居るが、未だ徳の足らざるにや露程も効がない、時は丁度六月の上旬、既に雨降らざること茲に一百餘日、樹々の梢も黄ばんで生ける草とはなく、燦るが如き暑さだから此處を必死と三千の僧が聲を哽し、祈りを上る甲斐もなく既に三七日の日限が盡んとするから、流石傲慢の良觀も弱り果て、如何はせんと大汗になつてお經を上て居る處へ雨にはあらで大風ドーと吹き起つて、屋根を飛ばし樹木を吹折し、砂塵を飛ばして天地も爲に晦まんばかり、動ともすれば身體さへも吹揚られん凄まじさ、群集の參詣人と僧侶の面々、これとはばかり驚き呆れ、逃場を失ひ右往左往に混雜する人込の中を押分け、極樂寺の側にスツクと立つて、日、如何に良觀殿、尙これにても念佛を信せらるゝか、貴僧が

千部の經を讀誦せららゝとも、僅か三十一文字の徳にも若かざること萬々なり、既に御坊も知らるゝ如く、昔し修行中途の能因法師、伊豫三島の社前を過らるゝ時、土民袖を控へて今雨乞の最中法師の通らるゝこそ幸ひ、何卒何等が爲に雨を祈り玉へと強られたるより、天に向て身命を捧げ、三島の社に献せられたる歌に『天の川苗代水にせき降せ、天下りする神ならばかみ』と詠せられたる眞實を天も感じて、即座に雨を下して農民を潤せりと聞く、又和泉式部は女の身でありながら、歌を詠じて等しく雨を降せしことありし、然るに何事ぞや、今この鎌倉に於て大善智識と人に崇められ、我が日の本に隠れなき執權職の歸依深き大僧正の御身が、斯く多數の僧を呼集へて三七日が間も祈りを上げながら一滴の雨さへも降すこと能はざるとは驚き果たる御法徳なり、斯く云ふ日蓮は只一人にて、末法應時法華經の力に依つて甘露の雨を降せんこと最と易し、我法華經の功德を疑はるゝ僧俗は之より日蓮と共に田邊ヶ淵に來らるべし、若し我法力に依つて雨降らば、從來の傲慢心を翻して

切ては我宗の行者ともなるべく、先づ日蓮が世を救くものなるか否やを眼を開いて見らるべしと満座を屹と見渡される、斯く上人に云はれながらも眼前所臨の甲斐なき悲しさには、良觀始め數千の僧も只一言の言葉さへなく、上人の廣言忘々しくは思へども面も得上げず差俯向のみ、果しなしとや思はれけん、日蓮上人は日朗師只一人を伴はれて『此經難持若暫時者我即歡喜諸佛亦然』と、御聲爽やかに唱へられて極樂寺からして西の方、田邊ヶ淵へスタく歩みを運ばれ、携へ来る白木の板へ『南無妙法蓮華經』のお題目を認められ、繼いで四菩薩の御名を始め、天照大神、八幡大菩薩の御名と十界の曼陀羅を書き畢つて、念珠押揉み聲高らかに經文を唱へ、八大龍王に誓つて既に神力品に進んで來ると、彼の板を取つて田邊ヶ淵の只中望んで投込れる、すると此時不思議なるかな炎々と照渡つたる大空も俄かに日の光を失ひ、ドンヨリ振盪つて來たかと思ふ間もあらせず、一叢の黒雲低く懸つてピカピカツと、電光輝き渡ると共にオドロくしき雷神は凄じき響きを發し、これは

と驚くその内にオツリくと大粒の雨が降るから、群がる人を夢かとはかり狂喜の顔色、上人愈々聲を高めて祈つて居られると、次第々に雨は増して、瞬く内に篠突く如き大雨となつて盆をも覆へす勢ひ、實にや早天の雲霓とは是なんめり、ソレ上人の御徳に依つて枯木も再び生返るぞ、田畑も元の青草となるは必定なりと、躍り狂つて老幼男女の喜ぶ態は、何に譬へん青葉もなく流石に末法有縁の名僧、良觀上人三千の衆徒を集めて祈りに祈つた有様に引換へ、上人は只御一人にして僅か一部の間も未だ終らざるに漣なす雨を降された御威徳は、偏へに法華經の大利益の致すところ、その効忽ち顯はれて山河の潤ふ大雨が三日三夜と打續く、そこでさしも潤き上つて縦横に割目を生じたる田畑も、至らぬ限なく植附を終つて民百姓はホツと一ト息、陽氣の工合で恐しく流行した疫病も一時に影を潜め、追々世の中も直つて大きに安堵すると共に、之も偏へに日蓮上人の御利益と知るも知らぬも元の檀那寺を捨てて法華宗に改宗をする、此方は極樂寺の良觀坊、甚く耻辱を蒙つて人に

せる顔もなく、己れの居間に籠つて如何にぞして此怨を返さんものと考へて居る、
 處が上人の方では入澤の道淨坊と岩瀬の太夫坊を招かれて、且、扱兩人、豫て申入た
 る通り良觀僧正が祈禱の効なかりし以上は、速かに來つて日蓮が弟子となつて法華
 經の行次となり、念佛を一切思ひ断つやうにお勧め下されたい、尙それにても肯入
 られざるに於ては日蓮自身に極樂寺へ到つて説く處あるべし、先づ一應貴僧等より
 僧正に此旨をお傳へ下さるやう……との言葉、兩僧も今更仕方がないから不
 承々々極樂寺に來つて、良觀僧正に斯くと通じると素よりひねくれ者の良觀、何と
 して上人に隨ふ心は微塵もない、そこで兩僧も返事の仕様に困つて暫く松葉ヶ谷に
 音信をせん、茲に於て上人は日朗日昭をお使ひとして、二度三度と御催促があるの
 を良觀如何にも残念に心得、豫て惡意の惡僧輩に相談に及んで、其、各々も知る、如
 く不届至極無禮の日蓮、若し此儘に差置く時は如何なる難題を持出さんも知べから
 ず、此上は執權に絶つて日蓮を嚴罰に處する外あるべからず、彼素より一寺一山の

住職といふにあらず、又何れの法弟といふにもあらずして、無庵の坊主一人の檀徒
 とでもあるべき筈なし、然るに彼が爲す儘に任せ傍若無人の舉動を餘所に見て、日
 蓮に我等が檀徒の滅するを待は智なきに似たり、如何に然るべきお考へはあらず
 るやと云出ると、何れも上人の御徳を嫉む連中だから密を語り合つて、翌日早速そ
 の向へ對して上訴に及んだ、その主意は、法華經の行者日蓮と云る惡僧は、衆生濟
 度の僧に非ずして上を怨み民を迷はし、漫りに他宗を罵り毀けて執權を蔑視にし、
 大佛殿を焼拂つて國亂を願ひ、極樂寺を乗取つて遂には大事を仕出來さんとする者、
 今に於て嚴罰に處せられずんば遂には斧を用ゆるの悔あるべし、速に彼を召捕り、
 他宗を盛んにせしめらるれば民自から安かるべし、若し然らざるに於ては禍遂に防
 ぎ難からんと、言葉を巧みにして己等の非力を隠し、極樂寺の良觀例の北條長時を
 以つて北條時宗に讒訴をした、そこで時宗程の發明なるお人も、巧く讒者の口に乘
 つて上人を疑ひ、宗教に托して人民を惑はし、上政治を屬るとは捨て置くべからず

宿屋平左衛門尉に嚴命が下る、この時は正に文永八年の九月廿八日と聞へたが仰せを受たる平左衛門尉は、武藏前司友房を副將としてその總勢凡そ三百餘人、松葉ヶ谷の庵室望んで葛地に驅附る、處が早くも此事を聞付たる進士太郎義春、取る者も取敢へず宙を飛んで先へ廻つて大息吐き、本扱々上人一大事こそ出来仕つたり、只今コレコレにて三百の同勢を引具し押寄せ來り、上人を捉へて嚴罰に處せんとの事、今は猶猶豫あるべき場合にあらず、何ごとも打捨て一刻も早く當所を御立退のるべしと喘ぎ喘ぎ注進をした、けれども上人は色さへ變せず自若として、且進士殿が火急の御注進、辱く存するが、これ等の事あるは豫て我身の願ひし所、今ぞ勇ましく佛に盡すべき時節到來、御法の爲に身命を差出すこと我身の本意、折角の御親切を無にするに似て御注告を容ざるはお氣の毒ながら、最早潔く討手を引受くる外はござらんと、上人は進士太郎の注進を聞ても微懼ともせず、泰然として宿屋平左衛門の討手を引受けられ、徐かにお弟子に向はれて且アコレコレ、日照日朗以

下の人々は一刻も早く此處を立去るべし、怒じ御身等が我を守護せん爲め、空しく此處に生命を殞すやうな事があつては、折角榮へし法華經も永くその跡を絶つべし我亡き後は何れも身命を重んじて法の爲に盡しくれよとの御意、日照師は豫てのお約束であるから忽ち何れへか立去れたが、離れ難きは日照以下の人々、重きお咎めと聞ては尙更立退かねて迂路々々して居られるのを、種々に云拵へて追道られるから、これが今生のお別れかと跡に心は遣りながら、見返りく幾度か驅戻つては嘆かる、日照師を、態と素氣なく立去らせ給ひし處へ、真先に進んだる平左衛門多勢の討手を引連れ、ドツとお堂の中へ土足のまゝに駆込んで大音揚げ、アヤア妖僧日蓮能く承はれ、隠すべからざる大罪露現に及んで、執權の仰せを承たる宿屋平左衛門尉討手に向つたり、尋常に繩に罹つて引るればよし悪く足掻くと生命がないぞとかさにかつて呼はつたり、上人座したるまゝに些とも騒がず、日イヤ、各々の御入來既に最前より相待つたり、イヤ存分に引立てられよと動せぬ舉動、胸に相違の平

左衛門は面を膨らし、アア咳いたり云にや及ぶと、忽ち十有餘人の荒くれ男は上人の後に廻つて、お悼はしや高手小手に縛めて上人を先に立て、ドツと喚いて勝鬨を揚げ、鎌倉さして悠々と引揚げて来る途すがら、此有様を見送つて信者の面々は不審の面色、何事の起りしにやと大きに怪かりゾロ／＼と附て来ると、鎌倉の肴町にはチャンと科人を乗る駿馬が用意してある、これに上人を乗せて何事ぞ謀叛云々といふ旗を建て、市中を引廻したから信者の人々山の如く涙を流して別を告げる者もあれば、法敵の僧俗共は之を見て嘲笑ひ、小氣味宜げに散々に罵る奴もあつて、追々見物は殖て後に従ひ、馳て鶴ヶ岡の社前に来ると上人少時と馬の足を留めさせられ、赤橋の處でヒラリと馬より飛降りて、本社を睨んで大音に云る、やう、日當宮に鎮座在す八幡大菩薩は眞實の神なりと聞く、その古昔和氣清原神宜を伺ひし時道鏡が邪心を斥けて遂にその怨を恚にせしめず、又傳教大師が大法典を誦し玉ひし時に當り、その眞心を納受まし、紫の袈裟を同師に授け玉ひしとか、然るに今

日蓮は身を捨て百の難を凌いで法華經流布に苦行するにも拘らず、罪なきに斬らんとするを何とて見過し玉ふにや、若し大聖世尊が諸佛を集めて宣示し玉ひし御言葉に、此法華經を弘むる者を守護すべし、我亡き末世迄も必ず能せよとありし席に、御同座あつてお受ありしとは經に記さるゝ處なり、然るに何故あつて楞山に於て誓はれし言葉を反古とし、現在この事あるを餘所にせらるゝは合點行かず、今尙その誓を忘れ給はずんば速かに日蓮が苦患を救ひ玉はるべしと叫ばれた、これを聞たる群衆の人々扱は流石の大聖行者も血迷はれたと見へたり下世話にも云ふ曳れ者の小歌とはこれならん、笑止や首を斬れると聞て取逆上たのであらうと、種々噂をして居ると、斯くと聞附けた宿屋平左衛門尉は家來を急がし、元の如く駿馬上人を乗て有無をも云さず、引立て引立て遂に龍の口の仕置場差して道を急ぐ、抑もこの龍の口は七里ヶ濱と唱へられたる處、六丁を一里として都合四十二丁の長道中、南は渺々たる波濤を隔て、遠く房總の山々を望み、北は稻村山と稱るゝ小山が目の届く

限りに連り、時は秋の中旬だから雲低く懸つて何となく閑れを催し、四邊の樹々は微かに枝を打つて哀みを告げ、打寄する波は高く又低くしてザ、ツと、上人の御有様を左も倅ひかと疑はる、有様、然るに上人がこの龍の口へ送らる、途中、七里ヶ濱の手前に津村といふ村外れに、七十にも近き一人住居の婆さんがある、此婆さん前年松葉ヶ谷へ行つて一度上人の説法を聴聞すると、縁あつたかして甚く信仰をして法華經に歸依し、その後は何事をするにも一心にお題目を唱へて居つたが、今はハヤ老る年波に歩行も出来ず、尊ひ上人の教化に逢ふことも出来ないので、暮しであらうと案じて居ると、この日村の人々が駆來つて「コレ、コレ、婆さんや、大變な事が出来たが困つたものだ、お前が活如来様のやうに云つて居る日蓮様が、今日コレ、コレで龍の口で斬られさつしやるとの事、何でもお上のお氣に障つたとやら謀叛とやら、それは、えらい人数で今此處へ曳れてゐらつしやる、若し何日もお題目でも唱へて居るのを、お役人にも聞かされてはそれこそ大變、お前迄が連累

を喰やうな事にでもなると此方人等迄が迷惑、そんな題目などは止さつしやれ、ヤレ恐い事」と云捨にして行過ぎたから、婆さん曲つた腰が延びぬ程の驚き、お上人に限つて謀叛などをなさるお方ではないが……、オ、まア何としたら宜からう、どうかしてお助け申したいとは思ふが、何として婆さんにそんな工夫のあるべきや、モウ七十の上を越したこの身は世捨もの、切てはお上人に代つて御無事に過させ申さんと考へたが、素より上の御成敗だからそんな事の適ふべき筈がない、今日この前を通らせられるが何より幸ひ、何かな進ませたいものであると其處邊を見廻すと丁度手作りの小豆を鍋に入れて煮て居る處、急いで朝炊て置いた飯の柔かきうな處を取つて来て、能くも煮切らぬ小豆をクルクルとまぶして待つて居る處へ、哀れや上人は跛馬に乗られてお通りになつたから、婆さん立たぬ腰を引摺るやうにして表へ立出で、涙片手に小豆で包んだ飯を鍋蓋に乗せて差上ると、上人も見覚えある老婆の誠心を喜しやと思はれけん、手に取つて押頂いたるまゝ暫く御回向あつて

心徐かにこれを召上つたといふことで、これが年々の例となつて毎年九月の十二日には首繁を解と稱へて祖師に尊上げることゝなつた、といふことだが、上人は奥れくして懸て龍の口の刑場となると、平左衛門が指揮をして上人をそれへ押据へる、豫て覺悟の上人は悪びれたる御有様もなく、袈裟を取つて掛置き、血に汚しては恐れありと、傍らに差出たる松の木に投掛られた、されば今に至るまでこの松を袈裟掛の松と稱へてある、この時に及んで平左衛門言葉荒らげ、平「コリヤ日蓮、其方の犯したる罪は覺えがあらう、今日此場に於て斬罪に處せらるゝ間、念佛でも題目でも勝手次第に最期の祈願は許す、これは執權のお差圖であるぞと、云渡した上人は太刀取の侍に向つて、日「今我生命を奪はるゝは別に悔る處ならねど、暫し佛果の爲に讀經せん間、決して刃を下すべからずと仰せられ、神色自若として眼前生命を捨るを知るものゝ如く、聲朗らかに高々と普門品の第五の巻を讀上られた、處がこの太刀取を仰附つたのは相州相郡の本間十郎左衛門直亮といふ人、扱ば珠散

る三尺二寸の神蛇刀といへる大刀を水で清め、上人の後に廻つて眼を配つたから、群がる群集はアラ情けなの御有様かなと、お題目を密かに唱へるは上人に歸依した信者にして、片唾を吞で見物するのは未だ上人を知らぬ人々、何れも静まり返つて見詰て居る、と、不思議なるかな天は次第々々に掻曇り、未だ目足のあるべき傍の日中は俄に日の光りを失ひ、これはと怪む程もあらせず、全く世界は夜の氣色となつて眞の闇、黑白も分かぬ暗さとなつたから大騒ぎ、群集の人々不思議の思ひに氣も轉倒、此方では泣叫ぶかと思ふと、彼方の方では躓き仆れ重り合つて大混雜をする、斯ては同類の者あつて日蓮を奪ひ去らんも知れずと、宿屋平左衛門尉始め警固の武士共、眼を八方に配つて遁さじものと上人の周圍を取巻く、斯る間に空を打つ恐ろしの物音と共に、大風吹起つて大木さへも吹飛さんづ氣色、海中はドク／＼たる響を生じて今にも海嘯の押寄せんかと疑はれ、砂塵は眼に入つて物を見ることが叶はんから、現在上人の御聲は目前に在りながら、何れをそれとお姿を認める事が

出来んといふ光景なれども、平左衛門が激しき下知に心得たりと、氣丈の直亮太刀振冠つて後に廻るが、真向からはザア〜と砂が飛んで眼鼻口の嫌ひなくペラ〜と人るから面を向けべきやうもない、これではならぬと太刀を取直さんとする折しもあれ、遙か江の島の方よりして一團の陰火飛來つたかと思ふと、地鳴り震動して空中にバツと光りを發し、大空に舞上るよと見る〜内、鶴ヶ岡八幡の方よりも亦塊りの怪火飛來りニツ合したかと思ふと恐ろしき響を生じ、轟々と雷の如き物凄き音を起て今にも頭上に落來らんづ不思議の有様、油断はならじと平左衛門平ソレ直亮、疾く〜と急がし立つる直亮つたと十郎左衛門、神蛇刀を真向に振冠つて直日蓮感念ツと打下さんとなしたる時、雷神愈々荒れて一段の激しさを加ふると共に、ビューツと一陣の魔風吹起つて砂石を飛ばし、天地濛々として四邊は一面眞暗がり、物の黑白も見へ分かぬ怪しさにこれはと、躊躇ひタヂ〜と首打つ音の聞へざるもどかしさ、平左衛門氣を焦つて平直亮何を猶豫するツと聲

かけられ平ハツと答へて刀を取直し、只一打と狙ひを定めんと焦慮るが暗さは暗し、上人の御聲は定かにそれと聞ゆれども、何れに御姿があるやら分らんから、讀經の御聲便りに「エイツ」と一聲、刀鳴りを生じて確かに手應え、上人の首は胸を離れたかと思ひさや十郎左衛門直亮、頭上から大石に壓されたるが如く感じて、グラー〜と眼眩んで、ドーと横さまに仆れ伏すと、同時に平左衛門尉賴綱も、何者にか腦天を甚かに打れて我にもあらず、バツタリそれへ仆れて少時は起も上らず、氣を失つて宛然死人に同じく、此儘息も絶たるかと思はれた、稍あつて漸く生氣附たる十郎左衛門が漸く起直つて、四邊を眺めるとコへ不思議や、さしもに荒たる風は風で海上の濤は靜かに収まり、九月十三日の月は空中に牙渡り、晝をも欺く一面の夜景は得も云はれん、呆然り起上つて傍を見ると賴綱が仆れて居るから、駭寄つて揺起しながら直お奉行お奉行と呼はる聲の通じけん、これも亦ガバと跳起きて平オ、直亮無事かど不審の面色、互ひに顔を見合せたるまゝ言葉もなく、不

思議の思ひに四邊を見廻すと云、如何に、確かに首打落したりと思ひし上人は無事なるか、讀經の御聲爽やかに聞ゆる怪しさに愈々呆れ、尙能く見ると、如何にやしけん、直亮の神蛇刀は三段に折れてそれへ飛散つて居るから益々驚き、流石に暴慢の平左衛門も我を折つて、平「如何に十郎左衛門、此坊主容易に打難し、と云て今打果さざれば後日お咎も如何なれど、我聊か思ふ仔細もあれば、密かに汝の方便にて日蓮を何れにか匿まひ置くべし、我は此場より鎌倉へ取つて返し、目前見たる逐一を言上して爲ん術あり、へや疾く」と云聞けてヒラリと馬に跨り、一鞭當て、ハヤ駆出す平左門門頼綱、馬に鞭當て、トツ／＼と蹄を蹴立て鎌倉差して道を急ぐ、處が大風水の後だから到る處に出水夥しく、水景増したる川を涉り難所の道を厭はず、馬を急がし大汗になつて七里ヶ濱の金洗川へ来て向ふを信と見ると、これも急ぎの用あるにや、一人の侍後鉢巻纏々しく結んで、漲る大水を事ともせず、洶然とばかり馬を乗入れ足掻を取つて、水中深く漸く馬の平首に取附いたるまゝ、

此方を望んで流れを横切る者がある、月明りに近附く顔を差覗いて双方ビツタリ平「ヤ、其處へ來らるゝは南條氏ならずや、南オ、左云はるゝは頼綱殿か、先づ取急ぐは日蓮が身の上、最早や打果されたる後なるや如何に、平「イヤその事でござる、只今殿に言上の義あつて急ぎこれ迄立歸つてござる、南「シテ／＼如何なされしや平「されば……、語るも不思議の斯く／＼の話しと、有りし一什を手短かに話をする、今此處へ駆附た者は執權の早打北條七郎と云ふ者で、日蓮の赦免狀を携へ來つた使者だから、未だ言葉の終らざるに、セ「扱こそ不思議、主君今日物の怪を御覽せられ、僧日蓮は誅すべからず、これに背かば殃立處に至るべしとあつて館の鳴動一方ならず、則ち殿命に依つて日蓮助命の仰を承つたる某、宙を飛んで時遅れてはと案じながら、漸くこれ迄参りし處、貴殿に逢しは何よりなり、我はこれより引返し、御心安からざる主君へ此趣を言上せん、貴殿は再び刑場に赴き此旨日蓮に傳へらるべしと襟に差したる竹挟みの赦免狀を取つて平左衛門に渡して元來し道へ

取つて返す、頼綱は又この場より龍の口へ引返し、上人の前に來つて讀上げる文面に、

一僧日蓮は誅すべからざるの由、南條七郎を以て執達せしむるものなり

文永八年九月十二日

と讀上げたる時に、仔細はそれとも知られざる口蓮上人、思はずホロリと御涙を流される、扱て斯うなると數多の人数と平左衛門直亮の取扱ひはガラリと以前に變つて最も町守に守護して鎌倉へ引返すと、翌日改めて御沙汰になり、相州愛甲郡依知といふ處に本間十郎左衛門の陣屋がある、此處へお預けといふ事に相成つた

第十一齣 佐渡の流罪。塚原三昧堂の危難

十月十日迄此地にお止まりになる、この内評定があると一旦科人として取扱つたものだから、生命は助くるも何時迄その儘にも差置けんといふので、遂に佐渡國へ流

罪といふ事になつて翌る十月の十一日、警固の役人四人が前後を固めて依知を御發足、斯くと聞たる日朗日昭日興達のお弟子を始め、富木播磨守その餘の人々大檀那の面々別を惜み、餘所ながら途中送見送つて御無事を祈り、その月の二十一日には、越後の寺尾泊りへお着になつたが、時しも秋の末だから海上波荒くして穩かでない、一體佐渡へ渡るのにはこの寺尾泊りが一番近いのだが、それでも海上二十三里もあろうといふのだから、餘程風の工合を見定めぬと途中難船の慮れがある、そこで風待をして居ると廿七日に至つて濤も収まり、先づこれならばといふので漸く船出をした、處で上人を送る船は素よりお一人を乗るのでなく、四人の役人も同船をするのだから先づ上人を胸の間に据へて、四人がお側を取巻いて嚴重の守護、少し隔てて佐渡へ渡るべき商人杯が乗込んで便船をして居る、すると退屈紛れに種々の話が出て、〇「モン、彼坊さんは何でせう?」△「されば、大方流者でもありませう」◎「へえ、何でも關東の坊様のやうですか?.....」〇「左様々々、何で又罪になつ

たでせう、△「豈夫盗み泥棒でもありますまいなア ◎「左様、そんな悪僧とも見へません、多分破戒の罪でいもあるのですか、ナなど、乗合の商人衆が下らぬ世間話や、上人のお噂などをして居る内に船は追々沖へ出る、船出の口は海上も至つて穩かであるから何れも呑気に話合つて居ると、翌る曉方から風が出て少し怪しい模様となつたから、角田といふ處へ船繋りをして風待をしたが、どうもその日一日は空模様か思はしくないから、とうとう夜明迄待つて居ると、やゝ風も風で濤も静まる、そこで角田の港を跡にして船を進めると、今迄澄渡つた空は俄かに黒雲と變つて、サツと吹起つた風は見る／＼勢ひを増し、船を揺動かして濤に弄ばれる、これは北海の名物旋風といふ奴でなかく、激しいから、乗合の人々膽を潰して周章狼狽、色を失つてワア／＼と立騒いで居るが、流石に水夫共は馴れたもの、櫓を奪れては一大事と柄を押へて波の弄ぶまゝに任せて居る、けれども風は益々甚だしく怒れる濤を起して、ザ、ザ、ザ、とドブーンと、大山の如き濤に揺上られたかと思ふと今度はザブ

ーリ、千尋の底迄も引入られたる恐ろしの有様、乗合の一同如何に成行くらんと生たる心地もなき折柄、一天に磨墨を流したる凄じの黒雲起つて、雨さへ加はりアハヤ此船今にも微塵に崩けん光景に、船頭始め何れも心中に概ゆる神々を念じて、氣も魂も身に添ざる苦患の内に、最前より自若として眺めて居られた日蓮上人、各各必らず騒がれた、我こそ法華經の行者日蓮なり、我斯く同船したる上はこの難風を收め恙なく佐渡へ渡らしめんこと最と易し、法華經の利益を以て八大龍神を濟度得脱せしめ、速に海面を安穩にし一同の生命を全たからしめん、則ちその功力茲に現はふれば人々必ず我法華經に歸依せらるべし」と仰せられると、聞く人々は地獄で佛優曇華の、又あるまじき救ひを得て、何れも船底に頭を摺付ながら、〇「扱は名高き上人の御乗合ありしこそ勿怪の仕合せ、何卒今眼前の苦みを救ひ玉はるべし、お言葉の如く此難を免かれ生命を助かりし上は、その法華經とやらに歸依して子孫迄も御恩を忘るべからず、頼むは上人、一刻も早くお救ひ下さるべし」と、言葉を

揃へて生死の境だから一心になつて頼むと、やおら従容として船に突立上られたる上人は、御聲高らかに云る、やう日如何に海中に於るは大龍王確に聞け、今我汝等に法華經の利益を授くべし、若しその教に味ふべき廉ありと思はば速にこの暴風雨を收め、船中一同の人々を助けて恙なからしめよ、妙法蓮華經くくと題目を唱へながら、乗合の商人が携さへたる墨斗の筆を執て、打寄する浪を望んで七字の題目を描かれると、大山の如く怒れる浪の内に異様の光りを放ち、見る見る海面に大いなるお題目の文字現然と現はれ、瞬く内に風は風でさしもの大雨も止んで、黒雲さへも拭ふが如く晴渡つて今迄ありし凄まじき光景は何處へやら、海上一面に油を湛へたる静かさに何れも奇異の思ひをなし、不思議の奇瑞に感激して涙に咽んでホソと息を吐き、始めて生返つたる安堵の胸を撫ると共に、思はず妙法蓮華經と聲を合せて題目を唱へ、異口同音に改宗をして永く法華經の信者たるべしと誓たから、上人は一同に戒を授て尙宗門のお話なきがある、去ば今以て天氣の宜い浪の徐かな

折には、越後の角田の沖合には現然とこの六字の題目が現はれると云傳へてある、斯て海上はその後何の憂ひもなく、佐渡國加茂郡の、松ヶ崎といふ處へ無事着船をすと、皆々思ひくりに厚くお禮を述て又の再會を約し、各が任意分れて上陸をしてしよ、中にも水夫等は一層上人を渴仰するの餘り、これより後の佐渡を海の守神と崇める誓を立て、その験として未だに千ヶ寺詣り杯が佐渡國へ渡るのには、凡て船賃を半額にして上人の御恩に報ゆるといふ事が傳へられてある、それは扱置き日逆上人には、佐渡の松ヶ崎に着船をすと、この磯邊の捨石に七字の題目を認められたといふ事で、只今迄もこのお題目の石が此處に遺つて居る、處で鎌倉より上人お預りの仰を蒙つた本間重連は、佐渡國加茂郡の新穂といふ處へ陣屋を構へ、佐渡一面の政治を預つて居る代官であるが、今上人を以取つてその夜は留置所に留置き、翌日になると大野の郷の塚原三昧堂へ上人を送つたが、この三昧堂と稱へる處は新穂から大して離れた處でなく、今とは違つてこの頃は行倒れなどを引取る區役所郡

役所のやうな者が無い、そこで此等の行倒れとか又は牛馬などが斃れた時の死骸の捨場、投込場所として何處の國へ行ても一郷一村には必ず一ヶ所づゝあつたもの、此處には僅か二間四方の至つて粗末な堂が建つて居つて、京鎌倉から罪あつて此處へ流された坊主を堂守にするが、冬は寒さに凍へて雪に閉られ、寒氣に堪ずして凍え死し、夏は投込れた多くの死骸から發する臭氣の爲に悪疫に罹り、遂には仆れ死して一冬一夏と雖も越した事のないといふ恐しい處、去ば多くの流人は此處に遣れば必ず生命はないものと聞傳へて、掛りく役人に賄賂を遣つて只管この三昧堂へ送られぬやうに頼む、すると賄賂の効驗に依つて、同じ佐渡の雜太郎一の澤といふ處へ送られるのだが、この一の澤といふ處は塚原より聊か優つた處で空氣も清く、夏冬の暑さ寒さにも堪へ忍ばれるから生命が助かる、然る處この本間重連の下役に遠藤左衛門胤盛といふ奴があるが、此奴なか／＼宜しからぬ男で一體上役人は四年を以つて交代することゝなつて居つて、その四年を過すと他へ轉役を仰せ降つ

て、その跡へは新規の役人が來るといふ順序になつて居るがこの遠藤左衛門は上役と違つて始終此土地に住で居るのだから、自然暴威を振つて我儘勝手な舉動をする先づチヨツと當今の時世に譬へて見ると、本間が縣知事で遠藤は書記官のやうなもの、世に鬼よりは牙が恐いと云ふ如く、本間よりは却て遠藤の方が恐ろしい、其處で京鎌倉の僧侶で流人となつた坊主は本間よりも先づこの遠藤に賄賂を贈り、何れも塚原に送られる事を嫌つて一の澤へ遣れるといふ、然るに此度日蓮上人佐渡へ流されると聞た鎌倉の悪僧輩、時こそ來れりと早速この遠藤胤盛に賄賂をして、日蓮は漫りに上の御政治を罵り諸宗を潰さんとしたる大悪僧なれば、生て再び鎌倉へ歸らざるやう、辛き三昧堂へ送つて凍え死するやうにと、坊主一同の頼を受けたる遠藤左衛門、本間六郎に日蓮の罪を偽つて、扱こそこの三昧堂へ上人を送つたといふ、所謂これが塚原御難の原因となつて、これより四個の格言といふ物語りに移るのだが、元來その頃の領主は上杉家の家來、直江山城守であつたが直江が後年出羽の米

澤に居る頃に、斯る靈場をその儘になし置は殘念と上人の遺跡として一字の伽藍を建立し、塚原山建本寺と云て佐渡四ヶ所の靈場の一ツと數へられ、今は立派なるお寺となつて居るが、その頃の三昧堂は實に目も當られぬ荒屋で僅か二間四方の吹噓し、斯様大名僧も哀れや罪なくして斯る恐ろしき處へ送られたが、この時は丁度文永八年の十一月朔日、凍れる風は肌を裂くが如く、捨てし死骸は累々として石でも並べたやうに重り合ひ、未だ日を経ざる生々しき死骸は犬の喰ふに任せ、鳥の啄むまゝに哀れ無惨の形ちを止めて居て、見るから身の毛も悚立つ荒野の一ツ家、人家は遠く隔つて居るから訪ふ人とてあるべき筈なく、素より出家は他力本願だから別に食物の手當が公儀からしてある譯でない、殊には流人の常として只往來の人の情に依つて露の命を繋ぐのだが、人里離れし寂しき三昧堂の事だから哀を乞ふべき旅人の來るでもなければ、情に依つて一椀の水さへも得難き寂しき堂に徐かに座せられ、肌を裂くが如き寒氣を堪へ忍んで居れる、すると十一月の朔日だといふのに暮

方からチラ／＼雪さへ降つて來る、それも道理、何しろ北陸道の中でも四面海を以て廻らしたる離れ島、寒氣の甚だしい事は自然の道理で、早く雪が降つて二三日も降積かうものなら、三昧堂の屋根もは却て雪の方が高くならうといふ、だが上人は露聊かも驚かれたる氣色もなく、床といふも眞の名ばかり、飽も當てぬ板の上に古ぼけた荒蒲只一枚、食事などはこの雪中に誰が恵んでくれる筈もない始末だから、饑寒は一刻々々と加はつて今にも凍え死せんかと思れる、けれども今更嘆けばとて及ぶべき事でない、堅く心に點頭て少しも憂ひの御氣色なく、徐かに懷中からお取出しに相成つたのは、彼の漁師彌三郎の網に罹つて海中より出現ありし彌陀の僧像こそ上人御一代の守本尊だから肌身を放さず、此時迄も携へ來られたのを床の上に安置して、梵音朗らかに法華經を御典讀あらせられる内、その夜も明て翌る二日の朝となつても、差異る日天は雪の爲に光りを遮られ、空は一面に綿を千切つて飛びすが如く、片時の止間さへなくグラ／＼と降積むから、愈々寒氣加はつて手足

は凍り物の感じさへも失つて了つて、頻りに咽喉が渴いて來るので雪を掬つて咽喉を潤して居られる。然る處が最と憎むべきは彼の遠藤左衛門、豫て鎌倉の悪僧共から頼まれて居るから、如何に日蓮が法華經の大行者でも二日の間も食ふ物さへも食はず、大雪と寒氣に打れて、今頃は凍え死して居るであらうと、家來に命じて上人の御有様を窺はせると、寒さにめげず自若として讀經に耽つて居られるから、急ぎ家來が立ち歸つて此趣を左衛門胤盛に述じると、不思議の思ひに首傾た遠藤胤盛、胤盛も怪しや、此佐渡の國は凡て念佛宗の信者にして、彼日蓮に假令一椀の食と雖も贈るべからぬものありしとも覺えざるに、如何にして此寒天に生命を繋ぎ居るやらん、去れども一日二日は空腹を凌ぎ寒さに堪ゆるとも、この後永く生命を保ざるは必定なり、今宵を過ぎさず塚原に命を預さんことは鏡に掛て見るが如し、朝疾く參つて様子を見よと命じられ、翌る三日目の朝になつて三昧堂に行つて見ると相も變らず讀經をして居られる、なれども此上一日も餘命を保つべき筈がないと、四

日月の朝になつて様子を窺ふと、昨日に變らぬ御有様で蓆の上に端坐ましく、滔々とお經を讀んで居られるから左衛門愈々氣を焦立て、よし左もあらばあれ、今宵こそは三昧堂に赴いて日蓮の側に近附き、我手に掛て彼が生命を締めくれんと、惡に與する無道の胤盛、日暮るゝ頃より只一人、身體を埋むる大雪の中を泳ぐが如く掻分け踏分け、漸く三昧堂へ近附いて上人の有様を密かに窺ふと、上人は己を狼ふ者のありと知るや知らずや、御聲靜かに法華經を唱へて居られる、何しろ三日三夜も飯一粒口にせられんのだから、顔容ちこそ憔悴れて居られるやうだが、其氣面に現はれ朗々たる御聲は更に疲れたる人のやうでない、極惡非道の左衛門は如何にも不審の感に打れながら、おのれ賣僧奴如何なる邪法を修するか知らざれども、我が佩たる及の斬味、只一刀の下に息の根止めてくれんづものと、拔足差足忍び寄つたる不敵の舉動、アハヤ上人の御生命は、累ねし卵を壓すか如き危うさ、惘れや人里遠きこの三昧に御落命あらせらるゝかと思はれたる此時早く、如何にか思し玉ひけん、

前に安置したる釋迦の尊像を手早く追取り、内懐中に納められて、日扱も不思議や、この夜中に釋氣この堂を襲ふは、正しく我生命を縮めん爲めに窺ひ寄つたる曲者ありと覺えたり、何者なればこの身に害を加へんとする」と、今迄眠つて居られたる眼を見開いて四邊を見られる、その光り自ら人を射て勇猛の御英氣物凄く、流石の嵐盛怖れを懐いて氣後れがす、なれども傲慢なる左衛門だから氣を取直し、ヘテ、我ながら後れたり、多寡が彼に身に寸鐵をも帯ざる僧侶にして我は武士なり、假令如何なる法を修すればとて恐るゝに及ばず、賣僧の素首打落してくれんものと、メヲ〜と駈寄りざまに柄に手をかけ、嵐ヤオン日蓮、我こそ遠藤左衛門胤盛なり、故あつて汝が生命を絶たんだため、斯く大雪を背してこれまで態々出張致したり、我祖先は文覺上人、則ち遠藤武者盛遠が四代の孫なり、汝鎌倉に於て邪法を修し、愚民を欺いて伽藍を築き、末法有縁の大導師などと自ら名乗り、上政治を誹謗し他宗門を罵詈し、三國傳來の宗教を廢せんと企んで表に正法を稱へ、陰には邪法を以て

一文不知の老若を誑かし、己の利慾を圖らんとする奇怪の妖僧、生け置ては如何なる害をなさん計り難き不敵の賣僧奴、則ち我今天に代つて汝を此處に誅すべし、イデ首を差延て此刃を受けよ」と詰寄つたり、騒がぬ上人シロリと振返られ、日蓮なり左衛門、凡そ出家沙門にして身命を惜むもの何處にかあらん、既に得度したる上は世の爲め國の爲に豫て生命は差出したるもの、日蓮が生命は此場に於て奪はるるとも更に悔あるべからず、左れども未だ如來の本懐たる、法華經にして諸宗の枝流に妨げられ、正法の光りを見ずして相果るは如何にも残念、左りながら、抑も大覺世尊は四十二年の間、華嚴阿喩法道般若の經を説かれ、更に法華經を説き玉ふと茲に八ヶ年、而して今こそ正しく末法の萬年にして、國家亂れて佛法の光りを失ひ、争ひを起し民の苦みに陥る時なり、則ちこれを救ふは法華經の功力に依る外あるべからざるを以て、扱こそ愚僧は生命あらん限り法を弘めんとするなり、然るに御身は未だこの法華經の教義さへも聞ずして、漫りに宗敵の讒言を信じてこの日蓮

を妖僧賣僧と呼ぶ、これ恰も未だ味はざる美味を嫌ふと等しく、法華經の妙味を翫味せらるれば忽ち無二の信者たること疑ひあるべからず、何れは御身に存はるべきこの身の生命、暫く猶豫を興へて我説く處を聞かるべし、物には凡て本末あり事に終始あり、未だこれを正さずして恣に決せんとするは、尙形を見ずして物を斬らんとするに等しく、若し御身にして此處の道理を考へらるれば、今日蓮が説く處を味つて後にこの首を斬らるべし、それにても合點行かすば、只何事も御身の思ふまゝに舉動るゝども、日蓮敢て怨むべきにあらざるなり、俚言にも、人の將に死せんとする時その云ふ事や良しとあり、必ず早まり給ふべからず」と制し玉ひし言葉に、左衛門胤盛承々に、胤臨終の世迷言聞く耳持たねを、最期の讀經とも斷念で少時の暇を與ふべし、喋舌り終らば深く首を差延べ、感念の眼を閉て覺悟に及べ」と面膨らして突立つたり、上人は喜びの色を泛べ玉ひ、且「イザ去らば、我法華經の眞意義を語り申さん、徐かに聽聞せらるべし」と、差して驚きの色さへも現はされ

す、左衛門が方へ向直つて經に依つて次第々に深妙不可思議の御法話がある、胤盛に於ては要ざる世迷言と始めの内は肩肱怒らし、ヂリ／＼と上人のお側に詰寄つて果なば斬らんと身構へて居る、素より博多才にして道徳堅固の日蓮上人雄辯滔滔として水の流るゝが如く、一言半句と雖も肺腑を衝て出る熱心の御說法、先づ法華經の根源より他宗門の信すべからざる所謂經文の上から一々説かれる、それが又一々理屈に拵つて一點の非を打べき處もなく、追々教義の妙味と功德を感じたる遠藤左衛門次第々に、我慢の角が折て來て我知らず身を傾け、遂には深妙不可思議の教法を悟り得て、眞如の光を認めると共に隨喜渴仰の涙に暮れ、鬼をも挫ぐ非道の左衛門邪念を拂つて持つたる太刀をガラリと投出し、ベツタリそれへ平伏をして兩手を突き、胤アラ尊とや忝けなや、我兩眼ありと雖も斯る大善智識を見の明なく、誤つて將に危害を加へんとしたるおぞましさを、今こそ御說法に依つて暗夜の中より白日を望むの心地せり、則ちこれより邪念を改めて一乘の妙法に歸依し、長

く題目を唱へて上人の權徒たるべく、御身の守護はこの左衛門が誓つて仕るべき間、必ず此後は御安心かるべし」と、真心面に現はして敬ひ奉ると、上人も説甲斐ありと大きにお喜びあつて、日、「コハ何よりも喜ばし、及ばぬ我身が只一席の教法に依り、忽ち心を翻へして我妙法に歸依せらるゝとは、大覺世尊の御喜びも之に過ぎたるはあるべからず、即ち法華の本文を授け奉らせん」と、徐かに經を誦して戒を受ければ、法名を日得上人と賜はつたが、元來この左衛門は念佛の大信者にして、極樂寺の道榮和尚から阿佛坊といふ法號を貰つて居つたので、この後は之を合して阿佛坊日得と稱へた、そこで上人の身に取つては恐ろしき禍が却つて幸福と相成り、遠藤左衛門迷ひの雲を拂つて急ぎ我家に立歸り、懇々上人の道徳高きを女房に話す、と、この内儀さんが又至つて志の良いものと見えて、女貴郎が左程迄に御信仰遊ばさるゝ御高德の御坊、定めて罪深き我等女人もお助けあるに相違ありません、どうか妾もお目に掛つて御説法に預りたいもので………」と望むので、先づ取急

いで上人に參らすべき食物を小者に持たせ、夫婦は大工を伴つて三味堂に駈附けて、雨風と寒氣を凌がんと爲に吹曝しの三方を板張として、小窓を設けて椽板を張廻らし、疊を取寄せて堂一杯に敷詰めて、爐の用意迄して暖氣を取つて大切に勤はると上人も夫婦の真心に感ぜられて甚くお喜びがあつて、日、「御身等の供養は一日にして千日にも優れり、就ては御家内へは千日の法號を進すべし」と仰せられてこれより千日尼と稱へられた、これ一日が千日にも通ずるといふ難有きお志し、茲に於て夫婦は愈々上人を敬ひ信じ、篤く守護して無二の信者となつたから、上に諸ふ下役人の癖として、追従たらく、遠藤の家來共が上人を尊ぶこと一方ならず、一家擧つて題目を稱へる始末と相成つて、遂には島人迄がこの仲間に入込れ、日に法華の信者が殖て來ると、この有様に驚き恐れた諸宗の僧侶、この儘にして捨置かば追々日蓮の宗門が此國に蔓つて、我々宗門の衰微を來して檀徒を奪はれんこと必然なり、何とか今敗葉の内にならざれば、遂には斧を用ゆるとも及ばざるの悔あらんと、佐波

一國の寺院四五十ヶ寺、中にも音に知れた極樂寺淨樂寺、千念寺淨妙寺など、いふ有名の伽藍の坊主共、俄かに集會をして此處に密議を開いたが、なにしろ相手が有得の上人、八宗を兼學して學は古今に通じたる名僧だから、迂濶に繋り合ては如何なる事に成行かんも計られず、左ればとて見す／＼その儘に打過ては名々が飯の食揚げだから、これより越中越後出羽奥州、遠くは信州の各寺の僧侶を語つて三昧堂へ押寄せ、彼の有名なる塚原問答に大論戰を開くの物語りより、日蓮上人四個の格言を發表されるといふのお話は、回を重ねて追々と辯ずることゝ致さう

第十二齣 塚原問答。四個の格言。

佐渡一國四五十ヶ寺の僧共が上人の御繁昌を嫉んで、種々評議の上で越中越後から出羽奥州、遠く離れたる信濃國と六ヶ國の寺々の中より、名だゝる博識の僧を集めて塚原三昧堂に押寄せ、教法上の問答をして彼日蓮を説破し、再び法華經を説かさ

る様にしてくれんと、右六ヶ國の寺々へ廻文を持つて催促に及ぶ、すると此を開た諸宗の坊主共我日蓮を云ひ伏せて屈せしめん、彼徒らに他宗を誹謗し天魔國賊と逆罵ること奇ツ怪なり、おのれ此度こそはその廣言の舌の根を止めてくれんと、己が非力を顧みず、我も／＼と波路を越て佐渡ヶ島へ押渡つたる坊主の數は五十四人、種々相談をして新穢の陣屋へ訴へ出て、日蓮は漫りに他宗門を罵り愚民を迷はすものにして、只己れの宗門を擁護するが爲に、遂には國に害毒を流さんとする事我々の見るに忍びざるところ、依ては法の正邪を分明ならしめんが爲め、茲に我等一同と法論して黑白を定めたく、願はくは御許しの上止邪の判断仰ぎ奉るといふ趣意、之を聞た本間六郎、六法の正邪を分つためとならば強て止めは致さん、宗論問答は古へ大内に於ても行はれたりと聞く、依ては此方より日蓮の所存も相尋ね、その上日限を定めて沙汰を致す間、先づそれ迄は差控へ居られるやう……といふ挨拶、坊主共も何分お頼み申すと各寺々へ引取つて沙汰を待つて居る、此方は本間六郎、

遠藤左衛門に「コレ」の義を願ひ出たが如何致さうと相談をする、斯くと打聞くと左衛門胤盛、胤ハ、ア左様で……、豫て斯る事もあらんかと存せしが、博學多才の僧日蓮、ヤハカ彼等に説伏らるゝ事もござるまいが、唐突に命せんも何とやら、一應行者日蓮を陣屋へ呼出し、篤とその邊の次第を申聞けたる上、その心中をも聞取つたる上取定たら宜しからうと存ずる、兎に角日蓮をこれへお召出しに相成るやう……と返答をした、といふのは、此時には最早遠藤左衛門法華經に悉く歸依して居るから、何卒して首尾能くこの問答に勝れるやうと、前以て上人にその覺悟をさせんといふの心底、本間六郎に於ても豫て信じて居る左衛門の云ふ事だから、早速三昧堂へ人を遣て上人を陣屋へ喚出す、上人は何事の出来したるにやと、直様出頭に及ばれて見ると、白洲の椽側へチャンと敷物を敷て席が設けてある、間もなく六郎自身にそれへ出て、六今日の出頭大儀である、喚出したは別儀ではないが、此度當國始め國々の僧共五十四人、其處許と宗論の義を願ひ出で、教法の正邪善惡

を定めたいとの事である、併し其處許に於て迷惑とあらばこの問答は差止むるが、若し進んで法華經の尊むべきを彼等に悟らしめんとならば、その儀早速取計つて遣はずべし、何れとも其處許の所在に依て取極る事に致さん爲め、今日徳々召出した次第である……と、云渡す、上人此時莞爾として打微笑れながら、徐かに六郎の方を見遣り玉ひ、日「誠にそれこそ我身が年來の望みなり、假令諸宗の僧が千萬人來るとも我妙法を説破せんと思ひもよらず、なれども彼等が問答を試みんとする志は殊勝なり、急ぎ御許しあるべきやうこの日蓮も願望の至り、左れども此處に憂ふべきは彼等問答に打負け、多勢を待みに如何なる亂暴を働かんも知るべからず、就ては此等の庶無之やう、御出役の上御誓固下さるゝるに於ては假令幾千人の僧共が來るとも敢て恐るべきにあらず、此儀は宜敷お取計ひ下さるやうと、悠然として御返答に及ばれた、その御有様の自若たるを見て大きに安堵した本間六郎、六然らば追て日を定めて沙汰いたさうといふ事になつて日蓮上人その日は塚原の三昧堂へお

歸りになる、そこで本間六郎諸宗の坊主を集めて、日蓮の所存を確かめたる處委細
 悦んで承知せり、就ては来る十六日を以て何れも三昧堂前へ集るべし、その節當方
 よりも出張して警固を致すであらうと申渡した、そこで五十四人の入道共、その日
 の来るを遊しと相待つて居ると、時は正に文永六年正月十六日、待ちに待たる法師
 等は朝未明より我も〜と塚原の三昧堂へ押寄せ、代官本間六郎爲盛は、凡そ三
 四十人の下役を召連て八方を取捲き、事あらせじと嚴かに警固をする、追々時の移
 るに連て、後から〜と詰掛る坊主頭は宛然唐瓜船の着たる如く、一月とは云へ未
 だ雪融のせぬ大野ヶ原に突立つて、ビユー〜寒風に吹曝されながら、小さ三昧堂
 を取巻て何れも只一言に喝破せん勢ひ、これにも憶せず黒染の法衣一貫に寒さを
 凌ぎながら、従容自若として動せぬ上人靜かに三昧堂の椽側に立現はれ、屹と眺め
 て僅かに目禮をしられたから、ソリヤこそ敵僧御參なれ、我一番に難問を發して苦
 めくれんと、遣るを制する本間六郎、六アイヤ何れも暫し〜、異口同音に罵つて

は却つて法の是非を分つべからず、靜かに順序を定めて問答すべし、就ては難路を
 避けん爲に、此處に勝敗の座を分つ間、必ず立騒いで次第を亂さるゝなど、勝敗の
 座席を分て區別をする、然るに最先に現はれたのは眞言宗の若法師、怒氣を含んで
 面色變じ、血走る眼に四邊を睨んで、〇如何に日蓮、我眞言を指して亡國宗とは何
 を以つて云ふやと鋭き口吻、上人態と沈着拂つて、六それ天に二ツの口なく國に二
 人の王なし、汝が宗祖弘法は大日を崇めて教主釋尊を侮り、その邪宗なることは龍
 樹菩薩の大論九の卷を繕かば明かならんと言下に説破され、無念の齒を喰べるが答
 ふべき言葉もなく、面を赧らめ差俯向いて了ふと、入替つて口を切るのが浄土の法
 師、△然らば問はん、南無の二字は我宗祖如來の用ひ玉ふ處、何故これを偷んで題
 目の頭に附けたるか汝が廣言にも似合はざる事共なりと眼を瞬らし詰りかゝる、上
 人騒がず、且唐土の南岳大師の説法にも、又天台大師の行法記にも何れも南無と見
 えたるを知らずや、一文不通の盲目法師、問答無益ツと喝破しられて返すに言葉もあ

らざるか、頭を抱へてコン／＼と群がる坊主の隣に隠れる、顔を出たのが浄土の法師。○我宗祖は念佛の大往生を遂たること、三歳の童子と雖も能く知れり、然るに何を以て地獄と呼で世を欺くや如何に。日、愚か／＼、念佛一門を開きたる汝が宗祖善導は、毎日阿彌陀經三十卷、念佛十萬遍を修行し眠らずして三十年、生涯戒を保つて女人を見ず、然るに何事ぞや、斯る行者の身の果は柳に登つて首を縊り、その繩切れて大地に落し、非業の死を遂たるを以て時の人の結名にも、楊柳自害坊と呼れしは隠すべからず、これをも尙極樂往生の人と稱すべきや如何、華嚴經に曰く非業の死を遂る者は多く地獄に生るとあり、アナ淺猿し／＼と説き破られ、これ又言解くすべのあらばこそ、犬に逐るゝ狐の如く、尻尾を巻いて逃出した、斯と見てそれへ立現はれた一人の僧が、然らば問はん、汝他宗門の教法を指して方便偽りといふ、佛に妄語ありとは如何なる教へかと問詰る、上人言下に、日、虛妄を説て眞の道に引入るゝ、これを佛の大慈悲大方便といふ、此事は既に涅槃經十五の卷梵行

品に見えたるを知らずやと答へらるゝ速かさ、何の淀みのあらばこそ、懸河の辨舌立板に水、泰然自若として騒がず迫らず、實に金輪山より動き出たる大盤石の如く押ども突ども微懼ともすべき様子が無い、五十餘人坊士が入替り立替り、法間の爲に日蓮上人に立向つては見るが、多寡が我宗旨々の學問丈で講宗に涉らぬ悲しさ、高祖上人は八宗を兼學して儒學は大學三郎に就いて學び、神道は吉田從二位兼昌卿の門に入り、神儒佛の三道を胸に疊んで、萬卷の書に眼を曝したる剛毅博覽の大名僧、争で手應へのあるべきや、宛然群がる雀の鷹にでも向ふが如く、出る奴も／＼も片ツ端から只一言の下に説破られ、惘れ始めの振勢にも似ず皆コン／＼と尻込をして下つた、處が今日の問答を打聞かん爲に大野ヶ原に打集つた黒山の如き見物人は、何れも上人の博識に感嘆して思はずドンと関を揚げたが、五十餘人の僧共は殘念無念と焦慮るけれども、今はハヤ上人の辯舌と深く佛道に涉らるゝ博學に怖ぢ恐れ、口を噤んで差控へて居る笑止さ、斯くと見たる本間六郎、六、最早之にて問

答も相果たり、然るに衆宗が今日の問答に打負たるを根に持つて、三衣を纏ふ身をも願みず、若し心得違などあつては却つて宗門の爲ならず、依ては舊來の宗旨を捨て、法華經に歸依するとも、或は從來の宗門に依つて教法を布くとも、ソへ名々の勝手たるべきは勿論なれども、今日以後はこの日蓮に敵對ふ念を去つて各僧堅く談合の上、僧にして有るまじき穩かならざる舉動なきやう、身の程を顧みて早々故郷へ引取るべし、此上再度の問答を願出るとも、此方に於て決して差許すべき事ならず、問答既に相果たれば、何れも早々退散せられよ、又日蓮に於ても此義を辨へ、必ず傲慣の舉動あるべからずと、嚴然として申渡したから、これを機會に數多の坊主は何時の間にか消失て了つた、この問答に依て本間六郎は心中深く上人の御高德に感じ、威儀を正して懺悔に禮を施し、引揚んとしたる時、上人少時と御聲を掛られ、且本問殿の今日の御出役、何共以て御苦勞千萬、庇陰により宗門の勝劣をお定め下され、何よりも難有き仕合せに存する、就ては巖に拙僧より時頼公へ對し、

立正安國論を捧げて若しお用ゐなくば三災七難忽ち到らんと論せしが、今將に忍るべき内亂の起らんとする徴候は現然たり、尙この内亂の爲には御同族の間に同士討起らんとす、早々鎌倉へ御引揚あつて、叛逆難を取録め玉はんこと、今日の肝要と存するといふ不意のお言葉、これを打斷ぐ本間六郎不審の眉を擧めて、答へなくて只呆然と、上人の御顔を覗き入つて稍少時は考へに沈んで居つたが、御坊の注告忝けなし、先づ一應は館へ引取り、篤と考へたる上にて鎌倉表へ出張すべきこともあらん、何分教養を御六切に……と、言葉を遣して六郎は新穂の陣屋へ引揚げたが、果せる哉、北條時宗が兄式部少輔時輔、伯父の治部太輔公時等と申合せて、京鎌倉にて一時に内亂を企てた、が……、これは何れ後に辯じらる事として、扱ての塚原の問答があつてからといふものは、土地の民百姓は俄に上人の博識と高德に感じて、信じ慕つてソロ／＼三昧堂に參詣する男女は引きも切らず、中にも彼の遠藤左衛門は兼に拙づる信者、本間六郎に於ても問答に依つて始めて上人の徳を

慕ひ、悉く信仰をしたから此兩人が談合をして、同年四月の七日に兼太郎一の澤といふ處に上人をお移し申した、この一の澤は谷間の誠に寂しい僻地ではあるが、前々から此處へ一字の荒果たる堂のあつたのを修繕をして、塚原三味堂から此處へお移し申したといふことで、山間でこそあれ塚原と比べると大きに凌ぎ能い、尤も新穂からも随分隔つた土地だが、代官の本間六郎、下役遠藤左衛門夫婦が遠きを厭はず參詣をするからその餘の信者も遙々と山川を越へて毎日々々參詣をするといふ繁昌、上人に於ては毎日引も切ざる參詣人を相手に説法をしられる、一度これぞ聽聞すれば如何なる心荒き惡人も、忽ち邪念を去て我慢の角を折り、邪慳の嫁や姑も心と和いで一家睦じく、不和なる近處合壁迄が和合をして来る、そこで見る人、聞く者悉く上人の高徳に歸依して、參詣の男女庵室の外迄も溢れて居る、と、此頃は上人提婆品の御説法をお始めに相成つたが、この提婆品といふのは法華經第十五の卷で、女人も成佛疑ひないといふ事をお説になつたから、罪深くして迎も助からぬ

ものと断念て居つた婦人方が多く參詣をする、處が何日の法座にも容貌美はしき一人の美人……、而も藹更けたる秀でし相恰、此處邊りに住居する者とも見へぬ氣高き、年頃は十九か二十の上を越すまじき婦人が供をも連れず只一人、熱心面に現はれ首を垂れて、毎日同じ座席に座を占て聽聞をして居るから、參詣の老若その美しさと氣高さに呆然見惚れ、何れの令嬢が何方の姫様やらと噂をして、歸る時と来る時分に氣を附て見るが、それが又何處から來て何方へ歸るやら更に見當らん、さて斯うなると益々噂の種となつて、〇「オイ、何だらう彼女は……、どうしても此邊の女でない事は扮装でも知れて居る、容貌から様子から、本間殿のお姫様も彼程には逆もいかなぢやないか？ △さう云へば一番歸りを尾行て見やうぢやないか 〇「オツとそいつア駄目だ、己等が二三日前ソツと跡から從て行くと、僅か二三町行くか行かん中に見失つたが、その又足の早さつたら話にならん △「ハ、ア、シテ見ると此奴ア餘程可怪なもんだぜ 〇「何故々々 △「だつて考へても見なさ

い、彼位な身分の娘御が夜分一人でこの谷間迄来る筈がないこりやア偶とすると、
 隙を鎌倉で上人のお情でも受けて、歌の文句ぢやないが、別れが辛いとか何とかで
 遙々この島國迄お跡を慕つたといふやうな事ぢやアないかと思はれるテ。◎「豈夫上
 人に限つては……」◎「オツとごつこい、そこがソレ思案の外で、彼水の垂るや
 うな美しいのを見ちやア無理もないぢやないか。△「ウム、成程、さう云へば第一見
 慣れの美人が夜々中此様な寂しい處へ来る筈がないナ。◎「お刺に来る時も歸る時も
 誰一人見届けた者のないのが不審のツ。○「ヤ、讀めた、こりやア斯うだ、何でも
 お上人とは深い交情で、晝は人目を避る爲に納戸の方へ隠して置て、夜になると態
 と參詣人のやうに見せかけて、皆が氣附かぬ中に密と聽聞させるといふ寸法に違へ
 ねえ。△「ウーンさうだ、こりやアお上、の情知に極まつたなんと、取止もない
 下らん噂をしてワア、騒ぐ、然るにこの女が現はれてから丁度三七二十一日目に
 晝間の法話の席で上人は一同の參詣人に向つて。日「扱各々、今日は誠に不思議のお

話を致すが、各々も見らるゝ通り、此頃は一夜も欠さず同じ時刻に參詣をする、容
 貌美はしき一人の美人が聽聞をするが、各々方は彼を何と見られる、知つての通り
 今度提婆品を説きし三日目より姿を現はし、一日として怠らざる處より考ふるに、
 これ恐らく提婆品の功德に依つて苦患を免れんとする者にて、恰も今宵は三七日の
 満願日に相當すれば、彼又時を違へず必ず此處へ來るべし、それに就一同の疑を晴
 さんため、何れもの眼前に於て化性の者か眞性の者か、彼が本性を現はして見すべ
 き間、各々確とその正體を認められるやうといふ不意のお言葉、聞く人々は不審の
 眉根を寄せて。○「仰の如く此國の人とも見へざる氣高き美人、只夜中のみ參詣をし
 て來る時と歸る時の知れざる不思議サ、我等一同不審を打つて居りましたが、扱は
 彼美人こそ誠の人間に非ずして、化性の者でござりまするか。日「如何にも……
 ○「へ、え、彼が化性の……。日「イヤ、その事は今此處で明言するに及ばぬ、
 今宵の法座でその正體を現はすであらうと仰せられる、一同はハヤ物數奇の心に駆

れて、如何なる者の變化なるか見てくれんと、晝の法座も果たから一旦我家を差して立歸つたが、今宵こそはその噂を聞傳へて我もく〜と集ひ來つた數多の老若、時刻前よりハヤ莽々と庵室を埋めんばかりの夥しき群集、今や來ると肝腎の説教の方よりは、彼の美人の立現はれるにのみ眼を配つて相待つて居る、と、驚て上人は法座へお登りになつて、ソロ〜讀經の聲が始まつたかと思ふ間に、不思議や何時の間にか例の美人は處も變へず、法座の前にチャンと座つて形を現はした、溢る、ばかりの多人數の内に誰とて來たのを見た者がなといふので、何れも今更のやうに不審の面色をして少々氣味悪く思つて居る内、追々説教も進んで既に法話も終らんとする時、彼美人がスツクと起つて外の方へ出んとすると、上人は法座の上から御手を伸され、美人の袖を確々と捉へて、且先づ待たれよ、御身遙々波路を越て此處迄も歩みを運び、此身の教化を聽聞せらるゝこと感ずるに餘りあり、思ふに御身は焦熱の苦患を得脱せんが爲なるべし、我御身を解脱し得させんが爲め三七日か間

謹で提婆品を説示せり、思ふに今日は御身が滿願の日なるべし、イザ法華經の本文を授けて佛果を得せしめんと、唐突に法座の傍より硯箱を取出し、一本の筆に墨黒々と含ませて、捉へたる美人の右の袖に

紅の袖に拵げし法の華

開く心のいつくしま姫

と認められると、不思議や一天俄かに搔盛り、オドロ〜しき雷神は今にも音來らんかと疑はる、凄じき光景、一座の人々アレヨ〜と逃迷ふ内に、ザーンザツと車軸を流す大雨は降頻つて天地濛々たる大暴雨、これはと驚く途端に彼美人がスツクと立上ると見る間に、丈なす黒髪を振亂して恐ろしき角を生じ、見る〜三四丈もあらんかと思はる、一面に鱗ある蛇體と變じて、ホーツと欲を吐出し西の空を望んで飛去る懸和恐ろしく、満座の人々面も得上げず戦き慄つて題目を唱へて居る、上人は徐々様端に立出玉ひ、聲高らかに法華經を讀誦して居られる内、飛行く蛇體

は追々遠ざかつて影見へすなると、暗かりし天地も晴渡つて雨風も歇み、一面の月は雲間を洩れて明晃々たる光りを放つ、人々漸く生きたる心地をして四邊を見るとさしも荒たる空も拭ふが如く、夢のやうな有様だからホツと安堵の息を吐き、互に目と目を見合せて扱も恐ろしき蛇體かな、彼美人こそ全く龍神の化したるものではあつたるかと、各々奇異の思ひに打れ上人の御徳に愈々感じて名々家路に引取つたが、その翌る朝の、蘇州嚴島明神の別當が御供物を供へん爲、御本殿の前に何心なく來て見ると滅多に人の來るべき處ではないのに女の片袖が落ちて居る、ハテ如何なる者の遺せしにやと、手に取上て見ると「紅の袖に捧げし法の華、開く心の嚴島姫」と最も美事の手蹟で認めてあるから、仔細ぞあらんと大切にして保存をして置くと、後に至つて全く日蓮上人佐渡流罪中に龍神濟度の遺品だといふ事が分つたが、これぞ世に名高き本文授戒の御袖で、今の世迄もチャンと安藝嚴島明神の御寶藏に秘藏品となつて居る、序ながらお話をするが、世に三辨天と稱へて第一が相

州江と島の辨財天、次では江州竹生島の辨財天、それからこの蘇州嚴島の辨財天、これを稱して日本の三辨天と呼なしてある。

第十三齣 元寇。日朗の苦衷、

尙この外、速上人身延山を開かれたる時に、身延の山から五里隔つた七面山といふ處に、七面大明神といふものを祀られた、世の人はこの本體を七面の大蛇だなどと云傳へるが、それは嘘傳で全くは上人法華經の功德に依つて、佐渡流罪中に三熱の苦みを免れしめ、得脱させたる彼の嚴島龍神の本體を祀られたものであるが、併し此事は別段日蓮記に重大な關係もないから此位にして置て、扱、佐渡の一の澤に於て不思議の奇瑞が現はれて以來、上人に歸依す。信者は蟻の甘きに就が如く、起つ兒這ふ兒に至る迄ゾロゾロ參詣をして、日に増し信者は益々殖る一方、今は殆ど他の宗教に見向きもせぬ、随つて他宗門は宛然燈火の消えたる如き有様に立至つたさ

さ、それを見て愈々牢番の者も氣を附て疎かにせぬやうになる、するとこの宿屋左衛門に只一人の愛娘があつて名を花子といつて夫婦が間の掌裡の珠、翠帳紅圍に人となつて今ハヤ花ならば綻び初めん娘盛り、姿から容貌から、何一點の申分のない羞月閉花の装ひがあらうといふ、これが又天の成せる賢しさは昔し當麻寺に引籠りし中將姫の如く深く佛道に歸依して浮たる心微塵もなく、旦暮御佛の前に座して看經讀誦を行として、此上なき樂と想ひ做し利益の尊きに隨喜の涙を流して居る仕末だから、兎角陰氣な氣性として常に病身である上に、此頃は又如何にかしけん、甚く神經を惱まして鬱々として居るのを見て、兩親悉く心配をして醫者に診せる丁度當今でいふ肺病、その頃の癆症癆咳のやうな有様となると、何しろ目に入ても痛くない程の愛娘がこれだから、兩親は甚く驚き寢食をも打忘れて悲嘆の涙に掻きれ、名譽の醫者に診せるが只容易ならざる容態と、晝夜介抱に怠りもなく浴る程の藥を盛るが更に効驗がない、俗に云ふ立枯の如く、今は只徒らに死を待の外はない

なといふ有様だが、得て女でも男でも、モウ年頃となると此様病ひの出易いもの、そこで方々有りと有ゆる醫者に掛つて見るが何れも首を傾け確とした病名も分らぬのみか、終には匙を投げて逃出す醫者さへある始末、扱斯うなると兩親は宛然狂氣の如く、此上は神佛の加護に依つて生命を取止る外はないと、神に願立をして佛に祈るがこれさへ些かの効驗がない、そこで左衛門は甚く氣を疲らして、或夜ツツくと睡つた夢に、身に白き衣を纏つたる童兒が枕邊に立現はれ「息女の病氣は醫藥の手當にては治すべからず、然るに息女日頃念する佛徳に依つて、當時正法の大行者、日蓮の徒弟日朗に祈らしめば此病ひ立處に快癒すべし、幸ひ日朗は今當家にお預の身なれば、早速病氣全快を彼に祈願せしむべし、去りながら日朗に於ても亦一ツの願ひあり、その願望を成就せしめんには、息女の平癒些の疑ひあるべからざるのみならず、七難即滅七福即生、當家萬代福徳圓滿の驗あるべし、疾く彼日朗を牢内より引出し、息女の玉の緒を繋ぎ止むるこそ何より急務、努疑ひを存するこ

となかれと告げしかと思ふと、左衛門光則喜しさの餘りに我と我夜具を跳飛して
 躍り起き、兩手を合せて伏拜み。左ア、難有や忝けなや、信心の徳茲に現はれ、姫
 が難病全快の法を宣示し玉ふ、抑も御身は如何なる童兒にて在すにやと眼前人あ
 る如く額突きつゝ外面を見れば、既にハヤ夜は明渡つて東天に差昇る旭は麗かに光
 りを發ち、連枝窓より射込む日光は宛然觀音薩陀の御光のやうだから。左扱は我日
 頃觀世音を信ずる處より、善哉童子を以て斯く夢想の御告ありしか、何にもせよこ
 の吉夢を疑ふは却つて恐れあり、急ぎ日朗師を牢内より迎へ出し、姫が病氣全快の
 祈禱を乞ひなば、病根即滅の効あるに相違はないと獨言つゝ、伏膝を出で、奥方に
 この物語をしられると、これも亦此間から甚く心を惱まして居つたる娘の病氣、何
 にもせよ早々日朗師を頼まんものと勇み立ち、奥傳へ聞く、彼日朗師は牢内に在て
 も行ひ正しく、常に師の上をのみ案じ煩ひ、御無事の祈りの外何事も忘れたる有様
 なるよし、牢番の者も御不憫に思ひ悼はり居るとの事、素より其身に罪を犯せるに

あらずして、師の罪がお弟子に迄も及びたる御悼はしさ、去れば罪人にして罪人に
 あらず、假令自儘に牢内よりお出し申すとも苦しかるまじ、一刻も早く姫が全快の
 祈りを上て頂くやう……と、恐らく人間程勝手なものはない、可惜の娘の爲に
 は潜かに法を破つて罪人を引出して迄も、絶なんとする玉の緒を繋ぎ止んとする親
 子の人情、實に叶はぬ時の神頼みといふ俚言の如く、忽ちの内に小寺兵衛といふ家
 來に命合ける、仰せを承た兵衛は彼土牢の前へ來つて牢番を遠げ、聲を低ふして日
 朗師を格子の側に招いて、兵衛これは日朗様、別にお變りもござりませぬか、拙者は
 小寺兵衛と云つて當家の家來、お聞及びもござりましたかは知ぬが、主人の一人娘
 花子といふ大切な姫が、長らくの間不思議の病氣に悩まされて食事も通らず、手を
 盡して醫藥を施せども更に効驗なく、主人夫婦は素より、我々迄も夜の目を合さぬ
 心苦しさ、只此上は貴僧の加護に依つて病氣平癒を願ふ外あるべからず人を救ふは
 千萬部にも優る功徳と聞く、如何にこの憫れなる生命をお助け下さる思召は無之や

斯く唐突に御願ひ申すは異なことなれど、主人昨夜の夢に不思議の御告を受け、此病氣を治癒せんものは御身の法力に依る外あるべからずと示され、主人夫婦もこれ迄心附ざるを大きに悔ひて、斯く拙者を以て態々貴僧にお願ひいたす次第、何卒この牢内を出で、姫が症氣全快を祈らせ玉は、廣大の御恩此上もこれなく、就ては貴僧が如何なる事を望まるとも、姫全快の願は誓つてそのお望を叶へ參らすべし曲て承引玉へかしと、言葉を下ふし御顔見上げて頼み入る、日朗師は熟々これを聞終つて、明ソハ誠に氣の毒千萬、我曾て師上人より秘密の御卦を授かりし事あり、如何にも宿屋殿御夫婦の心中もさこそ思はるれば、佛に祈つて姫の病氣を治癒し參らせん 兵「ヤツ……………」お聞濟下さるとか 明及ばぬ迄も加持し申さん 兵「ヤツ……………」それで漸く安堵仕つた 明就ては此身にも一ツの願がござるが…………… 兵「その儀は何なりともお心置なく……………」必ずお望みを叶へるでござらう 明ソハ忝けなし、我願望の叶ふ上は、心神籠めて祈願をいたすでござる 兵「シテ又そのお望

みといふは…………… 明「されば、餘の儀にも候はず、豫て知らるゝ如く我師日蓮上人は遠き島根に流され玉ひ、その御艱難の程さ……………と思ひ廻らせば、斯く安閑と口を送るべきことにあらず、憫れ此身の意中を御推察あつて、佐渡往返りの日敷を興へて師の御安否を見届け来る義を御許し下さらば、當家の恩徳廣大無邊、生々世々忘るまじきは云ふ迄もなく、假令粉骨碎身すると雖も、必ず姫が御惱を癒し申さん何卒此義を左衛門殿へ御傳達が願ひたく、偏へに御取做頼み存する 兵「如何にも承知致した、早速主人へ申入るでござる、が……………、何分貴僧は上公儀よりの預け人、表向容易には許し難き事なるが、姫が病氣をお祈り下さるゝとあらば、如何にもしてそのお望を叶へずば相成るまい、主人如何なる手段に依つて事を計ふか、その儀は後刻訖度御返答を致すでござらうと、引返して宿屋左衛門夫婦に此趣を話すと、左如何にも師を思ふ日朗殿の心としてこの望みは道理至極、法師は人を欺くものならず、況てや日朗師平素の行ひより見ても、必ず再び此地に歸り來ること明か

なり、殊に姫が一命を助けくる、大恩人、これに報ゆるは當然の義務なれば、日敷を限つて旅立にすとも何の仔細もあるべからず、何にもせよ先づ取急いで全快の祈禱を願つて後にこそと、快く日朗師の望みを差許したから、小寺兵衛は再び牢前に來つて此旨を物語る、日朗師は天へも登る心地して勇み喜ばれる、そこで兵衛は牢内から日朗師を扶け出して、身を清めて法衣を改めらるゝやうにと勤めると、明アイヤ、我不淨穢土に住むと雖も心中更に汚れたる事なし、されば今更身を清め着衣を改むべき要あらず、師上人は塞國に在して苦行せらるゝに、我斯く暖國に在りながら衣を改め暖を探るは道に背けり、只此儘にて姫が病間へ導かるべしといふ堅固のお言葉、聞く左衛門夫婦も大きに感じて、直ちに花子の寢所へ案内をしたから、日朗師が姫の有様を見られると既に紅顔の装も失て、色は蒼醒め肉落て、陽炎の日影待つらん憫れの有様、今にも絶え入らんかと疑はるゝばかり寢れ果て居るから、日朗師は漫ろに不憫の感に打たれて、やώρα花子の枕邊に端座して合掌瞑目し

靜かに法華經の提婆品を唱へて居られたが、それも果ると豫て師上人より授かつた御卦を施され、口の内に何か頻りに呪文を唱へ終つて、その身は再び元の牢内に引返へされ、丹精を凝し一心籠て諸佛菩薩に祈りを上ること丁度七日、すると不思議や、法力の徳か但しは經文の功德にや、さしも難病として數多の醫者が匙を投たる不治の病氣も、忘るゝが如く一日々々と平癒をして、追々肉附て來て眼の凹みも直り、血氣恢復して食事も段々進んで來る、さて斯なると本人の喜びよりは兩親の喜悅は譬ふるに物なく、宛然死したる人の蘇生りしが如く勇み立つて、この容態を醫者に診せるとこれ又不思議の思ひをなし、先づ兎も角もと精分の附くべき藥を盛ると、早天の跡の大雨に肥料を培ふ如く効驗を現はし、日を経るまゝに殆ど元の身體に恢復をした、是に於て宿屋平左衛門一家は日朗師を尊むこと神か佛に劣らぬ有様、これ偏へに日朗師が牢内に於て唱へらるゝ、法華經の利益に依る處と深く感して手の舞ひ足の踏む處を知らぬ迄に狂喜して、早速日朗師を土牢から無理に引張

出して下へも置かぬ厚き待遇、左れども日朗師に於ては聊か誇る色さへなく、只悶々として師の身の上を案じ煩つて居られる悼まじき、平左衛門は御恩を報ゆる此時に在りと、五十日の日限を定めて日朗師を佐渡へ出立せしむべしと、旅用の準備は云ふに及ばず、日蓮上人へ進すべし土産物まで調へて密かに夜に紛れて送り出す、そこで日朗師は大きに喜ばれて別を告げ、文永九年の三月七日に鎌倉を發足して、馴れぬ旅路に宿りを重ね、辿り／＼て越後の寺泊まで着されたが、さてこれからは濤路遙けき海の上、日和を待つて同じ月の二十一日滞りなく佐渡の國へお渡りになつて、上人の在しますてふ雜太郎一の澤の庵室を訪れられると、餘りの不意と不思議の對面に打驚かれたる日蓮上人、聞くも語るも世間を憚る師と弟子が、互ひの無事を喜びつゝ、手に手を取つて悦し涙に掻暮れて居られる御有様は、實の親子も及ばぬ恩愛、情も籠つて見えたりける、その内に宿屋平左衛門の厚き志を語て土産物を差出されると、上人も深くその情に感じて尚阿くれと御物語りがあつて、日

朗師は此處に止まつて居られること凡十日、モハヤ日限に迫らんとするから、イザ鎌倉へ引返さんと旅支度をしられると、日蓮上人さらばと先づ大學三郎殿を始めとし、富木播磨守、四條金吾その外檀徒の人々へ宛たる書面を細々と認め宿屋左衛門には別にお禮と日朗師の身の上を頼むといふ旨を認ためられ、これを日朗師に渡されるも惜き別れに涙ながら、進まぬ足を勵まして一の澤を出立に及ばれ、道を急いで宿屋左衛門方へお歸りになつたのは未だ五十日の日限り以内、左衛門も果してその正直に感じて上人の禮書を受取り、その餘の人々にも密かに手渡しをしたから何れも上人の御無事を知て大きに安堵し、これも偏へに御法の爲の功德にやと尙も御無事を祈つて居る内、年は既に文永の十年となつて上人佐渡に在すること茲に四年この内に日朗師が密と佐渡へ渡つて御安否を尋ねられること以上七度、その難行は如何許りであつた、筆にも口にも盡せぬ位、然る處、世は愈々危き有様となつて彼の上人が安國論に認められたる、内亂が起つて遂には四海交通難の起りを萌さうと

いふ、これを如何なる事かと云ふと、前の執權北條時頼の嫡男を式部太夫時輔と云ひ、次を相模守時宗と云つて、これが則ち當時の執權職と相成つて居るが、兄式部太輔が叛逆を企て、弟時宗を滅さんといふの謀反、何故又斯る事を企んだかと尋ねると、同じ兄弟でありながら式部太輔は京都へ登つて、六波羅の前に仕居をして居つたが、又同じ京都の北六波羅には矢張り北條の一族長時の次男左近太夫義宗が住つて居つて、これを兩六波羅と稱して丁度執權代のやうなもの、五畿内西國の政治を預つて京鎌倉の間には飛脚が往來をして、執權は鎌倉に居ながら西國九州の沙汰が知れる斯ういふ風にして始の計こそ立流に治まつて来たが、先代時頼は弟の時宗を愛して遂に執權の職を譲つた、すると劫を賣したのは兄時輔、己れ嫡男に生れながら時宗の爲に執權職を奪はれ、一生朽果ること武士の面目身の不名譽、此上やあるべからずと甚く憤つて、扱こそ密かに時宗を除かんものと茲に謀反を企てたけれども邪は正に勝たず天は惡に與せずとか、陰謀早くも露見に及んでその義ならば兄

とても容赦はならじと、鎌倉より早馬を以て下知を左近太夫義宗に傳へ、早々時輔を討取るべしとの命が下つた、そこで義宗に於ては急ぎ合戦の用意に及んで、二月十一日己れ大將となつて不意に兵を起し、南六波羅の館を取圍んで轟々と攻寄せると、何にも知らぬ京洛中の人々膽を消し、上を下へと混亂する様は秋の蝗を飛すが如く、右往左往に逃惑ふて妻は本夫を見失ひ兒は親に取遺されるといふ騒ぎ、此方は北條式部太夫時輔、未だ備へもなき處へ寄手を受けて周章狼狽、一支へもするこの出来ぬ内へヤ込入つた寄手の面々、敵と目差す奴は片ツ端から取つて押へ、大將時輔も亂軍の内にとろく討れて了つたが、この時輔に與したる左中將實隆といふ公卿はそれが爲に押込の身となつた、又鎌倉表に於ても北條治部太夫公時、及び中務教時等も同じく時輔に一味をした事が現はれたから、これ又討手が立向つて散々に戦つたが、終にこの兩人も討れて相果て、了ふ、處が迷惑を蒙つたのは京鎌倉の町人共、家を焼かれて家財を失ひ、營分住居に困る有様は目も當られぬ氣の毒さ

然るに一方戦に勝た時宗に於ても誠に寢醒の悪い話、如何に反逆とは云ひながら
 現在血を分た兄の時輔、伯父の公時を討たんだからこれが眞の血で血を洗ふ不吉の
 合戦、これ正しく上人の説れたる四海反逆難といふもので、返すくも嘆はしい次
 第である、されば心ある人々は此末如何成行らんと、日夜胸を痛めて安き心とは
 更になが、常日頃から上人を信するものは豫て説れし叛逆難とはこの事ならんが
 同じ一門に育つて同士討をするとは誠にうたてき事共である、法華經の有難さを
 今更のやうに感心して居る内に、漸くこの難も治まつたのでホツと一息する間もな
 く、茲に最も大事が惹起つて天下未曾有の大難が出来た、これを何かと尋ねると
 大元蒙古の夷共が大舉をして我西海を騒がした一條だが、これこそ日蓮上人が安國
 論に示されたる、他國侵逼難といふ大事であつたのだが、時の執權が上人の御意見
 を用ゐずして、その備のなかつたのは嘆いても餘りある事であつて、抑もこの大難
 古といふ國は、唐土の西邊に在る夷の國で、その祖先といふは一人の寡婦があつて

夜なく光明天より降つてこの寡婦の懐中に入り、遂に懐胎をして三兒の男兒を産
 じ、中にも末の兒は生れながらにして器量秀で、長ずるに及んでは益々銳敏にして
 拔群の勇將となる、その子その孫も共に體格優れて威勢を揮ひ、遂に國を隨へ驍粗
 を併せ合し、雲中九原の地を侵して近國を攻滅し、六十六歳にして歿したがこれを
 太祖皇帝と呼做した、そこで第三の男子が跡を襲で太宗皇帝と名付け、陝西丘の汧
 城を攻落して死したから憲宗位に就き、其弟の忽必烈が世を繼だがこれを世祖皇帝
 と稱へた、至元元年に都を定めて易に大哉乾元とあるに従つて、元の世と稱して
 遂に四百餘州を切り従へ、その威勢の熾んなること高麗迄も轟き渡つて、虎も恐る
 國の名を大元蒙古と呼び做したる世祖皇帝忽必烈、破竹の勢を以て國々を切り従
 へ、勢ひに乗じて我日の本を窺がへども表に信義の辭を飾り、至元三年の黒といふ
 奴を使として書面を日本へ送り、朝鮮の國王がこれに添文をして、潘阜といふ者を
 案内者として正月十八日に京都へ着して之を奉つた、そこでこの書面を開いて見る

と、大蒙古國は今やその勢ひ廣大にして既に四邊悉く従ひ、朝鮮國も亦従ひたるを以て、日本國も我蒙古と交易の途を開き、以來共和して國を治めんといふ至つて無禮の文句、臣には信を装へども陰に我帝國を輕蔑したる不埒至極の言條だから、時宗見るより赫と怒つて、直ちに使者の的黒を斬つて武威を示し、梨の礫の返事さくもせずして蒙古の書面をバタ／＼に切裂いた、さればこの後如何に成行く事ならんと、萬々として安き心もあらざる内に、同年五月二十一日の朝に至つて日輪二ツ現はれ、白晝明々どそれが拜まれるといふ前代未聞の不思議、これ正しく上人が説れた他國侵邊難の起る前兆にして、則ち外國より來つて我神國を窺ふこと此度の使節に見るも明かなり、我日本に取つてこれより大なる憂ひあるべからずと、心なき町人百姓に至る迄大きに心を痛めて居ると、果せる哉再び蒙古の使節張良弼といへる者、太宰府に來つて我國の國情或は山河の光景、下々の風俗等に至る迄悉く取調をして、密かに書記し繪圖を認めて元の國に歸る由鎌倉に聞へたから、

同じ北條の一族掃部頭時盛、深く之を嘆いてこれ唯事にあらず、日蓮上人こそ實に名僧なり、我一門は眼あれども殆どなきに等しく、斯る名僧を憎んで他宗僧侶の讒謗言を信じ、遠く佐渡の果に流罪すること天下の一大事なり、これ正しく天を仰いで睡するが如く、却つて我北條家を滅すの基なりと、密かに使を立て、佐渡の上人に種々の音物を贈り、厚く禮を正して因縁を結んだが、斯る縁故よりして終に後年剃髮入道して蓮正と號し、永く佛門に入て駿州富士の裾野に老の餘命を養はんと、高祖上人に歸依して經文讀誦に怠りなかつたといふことだが、その内、一年も暮れて明れば文永の十一年、甲戌の二月八日の事であるが、北條時宗熟睡の夢に縁の道服を着したる童兒が現はれて、汝罪なき日蓮を遠き島根に流罪とす、若し此時に召還さずば一門の滅亡運きにあらんと告られたと見て、驚きれば南河の一夢、胸打騒いで氣も沈着かぬから、夜明待つ間ももどかしく寢所を立出で、呆然と手を拱いて考へて居られる處へ、急遽しく出仕をしてお目通りを願つたのは平左衛門頼綱

平「ハッ、何は扱置さ、今朝の曉不思議の夢見に驚かされ、取る者も取敢ず急ぎ出仕
仕つたる次第……と言上をする、時宗自身もその夢で大きに屈托の折柄氣掛
りであるから、時「何と申す、不思議の夢を見たとか、平「ハッ、時「それは日蓮の事に
はあらざるか、平「如何にもその儀、然らば主君にも、時「然ばなり、今その事に付心
を惱まし居るのである、平「ハ、一ツと互に顔を見合せて、少時無言の儘なる時、時
を報する太鼓、響の響々と、辰の時刻を打鳴すに連れて追々出仕の諸役人、一人な
らず二人三人、殆ど符節を合したる如く同じ夢を見たといふ物語り、中にはナアニ
夢は五臓の病ひにして、素より妄想であるから當になるべきものでないなど、打
消して了ふ者もあるが、執權時宗は何と感じたか頻りに冠りを打振つて、時「左にあ
らず、物の感應といふこと必ずあり、去れば昔し周の世にも、夢を占ふ官人あつて
時の帝もこれを用ひて効ありしことは物の本にも見えたるぞと、此處に先非を改め
心を翻して愈々日蓮上人赦免と事が定まり、その下知状を時宗自身に書て宿屋左衛

門に傳達を仰附られ、この赦免状を受取たる宿屋左衛門光則、一体ならば己れ佐
へ渡つて上人に渡すべき主命である處、豫て日明師の心を知つたる左衛門は、師弟
の情愛之を日明師から上人に渡したら尙一層喜ばれるであらうし、又一方日明師に
於ても大きに師に對する情義も立てあらうと、私の計ひとして、その赦免状を日明
師に渡して、急ぎ佐渡へ到つて上人の御安塔あるやうにと、旅の用意迄心を配つて
出立を勧めると、夢ではないかと狂喜した日明師は、天にも登る心地して赦免状を
首に掛け、夜を日に繼で佐渡の國へ趣かれる、此方は斯る事ありとしも露知らざる
日蓮上人、今はなか／＼に歸依信仰する輩も多いから、法の擴まる樂しさに憂難
も打忘れ、今日しも多くの信者の集るを待て盛んに説教をして居られると、何時の
間にやら傍の梢に止つた一羽の鳥、見ると首ばかり白いから何れも奇異の思ひをな
して居ると、上人確と御膝を打ち玉ひ、日「扱は我流罪の赦免も近き内に在り、その
故は昔し唐土の燕太子といふ人、久しく秦の國に捕はれとなりし時、始皇帝の宜ひ

けるは、白き首の……来らば救すべしとのことなりしを以て、太子は天に祈つて在せしに、誠心の通ずる處か日ならず頭の白き鳥出で来りしと聞くと、又我朝にても紀州熊野浦に件の鳥を見て『山鳥、頭も白くなりけり、我が歸るべき時や来ぬらん』と詠じたる法師ありしとか、去れば我又遠からず救免に逢ふべき前兆にやあらんと語り玉つたが長き春の日もハヤ黄昏れて、名々家路に立歸つて跡は暴風雨の風たる如く、最とも静かになつたから上人は獨り讀經に耽つて居られたが、此方の日朗師は三月七日の夜に漸く佐渡の小木濱に着船をして、その夜は附近の漁師の家に宿りを取つて一夜を明し、翌る八日此處を立出で、一の澤さして急がれる、何しる遠路を夜を日に繼いで歩かれたから殆ど足も疲れ、跛ひさく歩まれる姿の氣の毒さに土地の者も之を憫み、懇ろに道なを教へてくれるから漸く新町といふ處迄着せられたが、如何に矢竹に逸ればとて疲れに勝つべき術もなく、今はハヤ心も緩み氣も疲れ、行惱んで宛然這ふが如く歩まれる折も折、行先に當つて爪先上りの坂道

がある、氣を勵まして途中まで登られると、これはしたり、雪が融けずして道を埋め、日先一面の白妙は登るに従つて崇を増し、方角さへも定め難から途方に暮れてハツタリそれへ打仆れ、我にもあらで寒さに凍えて進み得ず、今はこれ迄なりと覺悟を定められ、萬一往來の人の助けもやあらんと聲を限り、
……、鎌倉の日朗、師上人の御迎として此處迄参れり、往來ふ人は急ぎ上人に傳へ玉へかし……と、二聲三聲呼ばるゝ時しも「オーツ」と應ふる聲の響き、人もや來ると氣を勵まし、聲する方を眺めて居らるゝとコへ不思議や、未だ時刻の經たざる内、麓の方より松明振照して暮地に走登るものこそあれ、ヤレ悦しやと熟視られると豫て面を見知つたる遠藤左衛門爲盛、近附くまゝに言葉を掛れば彼方も驚き、先づ爲盛は日朗師を勧はり導き、一の澤の庵室さして共々に歩みを速ふ途すがら、此度斯くくの次第で上人御救免の御状を持参したりと聞て、左衛門の喜びは驚ふる辭もさらざるばかり、扱又何故爲盛が今宵此處へ來合せたかと尋ねると、

常々上人に師依して今日も亦態々法話の聽聞に出て來たが、尙何吳どのお話を聞て居る中斯く暮に及び丁度今しも己れの館へ立ち歸る途中であるとのことに、その僥倖きを日明師も大きに喜ばれたといふことで、此地を今では後山と云つて、既に日明坂といふ名を附け、後年此處へ日明山本光寺といふ寺を建立し、佐渡の靈場參拜の人々は此處へ參詣して、隨喜の涙を流し日明師の艱難を想ひ起すといふことである。

第十四齣

時宗安國論を聽く。修驗者善智屈伏す。

遠藤左衛門は計らずも道に日明師の難儀を救つて、再び取返して上人の庵室に導くと、斯くを見て日連上人急ぎ立出で、様子を尋ねられる。日明師はコン／＼の次第で此度愈よ御赦免になつて、則ち其御狀も此處に持參致しましたと、首に掛たる書面をお渡になると上人悉くおの喜び、その夜は疲を休めん爲といふので日

明師は早く寢かし、遠藤爲盛と上人は名残を惜んで語り明し、夜明を待つて新穂の代官本間六郎重連に赦免狀を差出し、白洲に上人を伴ひ來つて封を切ると、

一日蓮法師の罪科は赦免いたされ候事

文永十一年二月十四日

左衛門尉殿へ

行 清 行
 平 長 兼
 承

と認めてある、上人恭しく領承して引取られ、早速頭立つたる信者に暇を告げられると、何れも別れを惜んで、「折角の御教化に預りながら、今更別るれば又何時の時にか拜まれん、切ては御直筆の法華經を御遺し下さるゝやう……との望み、上人も人々の信仰深きに哀れを催され、且「各々の望み道理至極、去せも哀別離苦は世の習ひ、時あらば又再會の折あるべし、折角御法を勵まるゝやうに……と仰

せられて一泊に立別れ、三月十三日に羽茂郡渡手へ着せられ十四日は網浦に宿り、十五日には赤泊りの碇屋彦右衛門といふ者が御座船の御供をして、順風に帆を揚げて流罪の時とは事變り、最も日出度越後の柏崎に御着船になつて、同じ三月の廿六日鎌倉にお着になる、すると此處では既にこの御沙汰が傳はつて居るから、待兼たるお弟子と檀徒の人々は素より、信者の面々我もくとお出迎へに出て、上人を擁ぐようにして松葉ヶ谷の御庵室に誘ひ奉り、宗運限なき前兆と一同萬歳を壽き奉つたが、越て四月の八日になると、俄に執權の館から急ぎの招ぎ、何事ならんと出頭をしられると上段の間には北條時宗、左右の二列には諸國の大小名綺羅星の如く居流れたる有様は、威儀堂々として冒し難くぞ見えたりける、此時平左衛門頼綱恐るく前面に進み出で、先づ頃の呼出とは大きに違つて、最と町寧に時候寒暖の挨拶から應接に及ぶ有様に、如何なる事にやと上人は聊か不審を打れながら、宜い位な挨拶をして居られると、頼綱一段と慇懃に會釋をして、頼借上人、今日お招ぎ致せ

しは別儀にあらす、甚だ御太儀ながら御高説の安國論に就き、これ迄の災難悉く御先見に適中せり、それに就ては尙此上の危難に付御高説の承り度、則ち最も大難と説れたる侵邊難は凡そ何日頃來るべきや、此儀委しく御教示の程、偏に願ひ奉るといふ問を發した、上人は借こそと點頭玉ひ、時宗漸く我安國論を用ゆべき時ぞ來れりと、徐かに口を開かるゝやう、且されば經文には何日來るべしとも見へざれども、天の怒り激しくして既に迫り、茲を以つて考ふるに最早蒙古の侵來は遠きにあらざるべく、ハヤ今年を出すして及に駟るべく存せらるゝなりと打開く一座の諸侯は顔見合せ、時宗屹と眼を睜ると、膝乗出した平左衛門と行平が左右均しく行「ンへ又何故………頼如何なる前兆の候てや、且さればに候、天下の執權徒らに邪宗に歸依して正宗を斥け、國に正義なく佛法に正法なし、故に天は之を懲しめんが爲に夷を以て國を侵さしむ、然るに人意合体せざるが故にこの難を除かんこと頗る難し、只此上は何事たりとも凡て眞言宗徒に據らるべからず、若し我辭を疑つ

て背き玉は、終には北條の一門は滅びて我日の本も滅亡せんと怯す憶せず、一座を睨んで宣ひしは、實にや國家を思ふの大英僧、偶々列座の諸侯より難問を持掛るのを苦もなく説明し、席を拂つてサツ／＼と松葉ヶ谷に歸つて了はれる、然るに此時分には既に蒙古から度々使者が來て迫るから、流石時宗程の英雄も大きに閉口をして居たと見へて、如何にぞして此難を程能く逃れんものと思慮を煩はして、その後間もなく上人の堂宇を寄進し、寺領一千町歩を與へて天下萬民の祈願所とすべし台命、處が上人はなかく御承知あらせられずして、日、仰せは至極忝けなく、身に餘る面目には候へども、今俄に堂を建立して日蓮に寄せ給ふとも、執權の權威に依つて假に陽に従ふのみ、誠に従ふものは數多あるべからず、斯ては却つて我法華經の眞意に悖り、強て我宗に歸依せしむるの嫌ひあり、尙そのみに止まらずして、當時は世の中穩かならず、民悉く疲弊の折柄、天下の威勢を以て塔堂伽藍を建立あらば、下人民の苦みは譬ふるものもなかるべし、如何に他力本願を宗とするとは云

へ、執權の權威を揮つて民を苦むること日蓮が本意ならず、斯る故あるに依り堅く御辭退申上げ奉るとキツパリとしてお断りになると、これを聞たる時宗感嘆の聲を發ち、時、實に日蓮は比類なき名僧なり、その精神の動かぬ事を武門に譬ふれば、眞の大英雄にして又得難き大丈夫であるとしてこれより深く上人の御徳に歸依して如何にもして慰めんものと心を勞し、この年五月二日に使者を松葉ヶ谷に遣はし、赦免弘通の御狀を御渡しになる、その文に

一年來の眞法威力御感最も深し、三國比類なき正法の宗義後代有まじき名僧、何れの宗か之に比せん、則ち日本國中に宗門を弘めらるゝ爲には其妨げあるべからざるものなり

月 日

城野左兵衛 承

とあつて、月日の處には執權時宗の判がベツタリ捺てある、現にこの弘通狀は奥州仙臺の、孝勝寺の手に傳つて今に寶物となつて居るが、祖師上人は熱々御覽になつ

て、且ア、嘆かはしく、執權我言葉を用ゐずして徒らに此狀を賜ふ、これ皆も筆を執らずして筆法を學び、藥を服せずして醫者を便りとするが如し、古人の誠めにも、誅むべきを諫めざるこれを尸位といふ、退くべきを退かざるこれを懷寵といふ位と懷寵とは共に亡國の兆にして、三度諫めて用ゐられずば身退くの外あるべからずと、茲に上人は断然たる御決心になつて、多くの檀徒に別を告げられると、人々は言葉盡して止めまゐらすけれども、今は既に止まり給ふ氣色もなく、豫ての約束に基いて甲州の南部六郎實長處へと志し、五月十二日に飄然として打立られたる、老幼男女の名残を惜んで遙々送り來るもの引も切らず、上人に於ても跡振返り、日興日尙日頂日持日進其外、熊王四郎を御供に召され、其他は酒匂迄來て宿を取られ、翌る十三日には駿州行の下鈴木繁八の家に御一泊、十四日は車返し、十五日に富士の大宮なる遠藤左衛門の處へお御泊りになると夫婦は喜んで何呉れとお世話をして、布施の鳥目を献じて柏餅を捧げ、酒を侘めたからこれより此地を

柏酒村と稱へる、それから又大宮の庄屋で由井五郎といふ者が上人を御招待して、忽ち檀徒の因みを結んで厚き信者となつたといふことで、上人は直に出立をして甲州路に向はれると、豫て待受たる南部六郎は歸依の信者一同を引連れて、遠く出迎へて居つたから上人の御姿を見るよりその御無事を喜び、一先づ我邸へお供をして厚く待遇す内、日を撰んで地割をして繪圖を引かせ、南部六郎が相當のお堂を建立せんものと種々奔走するのを見て、日蓮上人堅くこれを止めさせられ、僅かに茅を束ねたる聊かの御庵室を營んでこれへお住居になる、その内上人は此邊の靈場舊蹟をお探りになるとか、又は彼方此方と足に任せて御見物になつて居る、するとこの南部から程近き小室といふ在所に、慧長法印善智といふ修験者があるが、この者の行力不思議の効験あつて、眞言秘密の法を施して一度祈りを上れば、物の怪を去り狐憑なぞで迷惑をして居るものも、善智の姿を見れば立所に効験が現はれる、そこでこの界隈の人々は宛然活佛の如く敬つて、天晴れ名譽の修験者と何れも尊んで居

らうといふ、然るに此事を上人が聞出されて折しも五月雨の雲吹晴れ、青葉に薫る風涼しかりけるより、日興日尙の兩師をお供に小室の山蔭においてになつて石に腰掛け、聲高らかに法華經をお唱へになつて居る、するとこれを耳にした善智法印、その場へ來つて上人に法論を持掛けて種々の難問を試みる、此方は豫て期したる事だからスラ〜どお答へになつて、善智法印瞬く内に説伏せられ、返す言葉のあらざる苦しさと忌々しさに、善、ヤイ日蓮、汝僅かの才智に誇つて聞及ぶ所に依れば漫りに他宗を罵り、現世利益などを廣言するは如何なる證據あつて左様な舌長なることを説くや、今日此處に來りしこと勿怪の幸ひ、返答に依つては汝が一命縮めてくれん、心を定めて返答に及べッ……と恐ろしき勢ひを以つて問詰めると、上人莞爾と打笑み給ひて、日、アイヤ、日蓮漫りに他宗を誹るものにあらず、如來の金言を守つて末法の衆生を濟度するものなり、又現世利益の證據といふは、什麼文永八年より早魃甚だしくして一滴の雨さへ降らず、大海の潮さへ満干止つて諸民悉く

難進す、此時執權職は令を傳へて、靈山ヶ崎に眞言律宗の極樂寺、良觀僧正をして雨を乞はしめられしがその間三百餘人の僧徒を集めて、讀經三昧に祈ると雖も一滴の降雨さへなきに止むことを得ず、日蓮は一切衆生の爲に法華經の功力を以つて龍神に誓つて雨を祈り、忽ちにして大雨を得たるもこれ日蓮の法力に非ずして法華經の功德なり、現世の利益は先づ此通りなり、如何でござる善智法印、尙それにても疑ひあるやとやり込められて二の句も續げず、顔を眞赤にしてグツと詰つたが飽迄剛情滅らず口、善、然らば問はんが、法左程の法術ありとすれば、美事この大石を空天に祈り上る術ありや如何に上人笑を含みながら、日、正法には不思議なし、夫等は論するまでもなし、善、ハテサテ、此石を空中に上ることも叶はざるか、我今眞言秘密の法に依つて祈り上げ、汝が膽を冷さしむべし、眼を定めて能く見よヤンと一ト足後へ退つたかと思ふと、いら高の念珠サラ〜と押揉んで口に呪文を唱ふれば、アナ恐ろし、丈餘もあらんかと思はるゝ大石は地響き打たして、グラ〜〜と空

中途かに舞上る、法印は印を結んでこの大石を上人の頭上に止め、普汝が素頭打ち
 砕いてくれる、覺悟に及べつと印を戻せばコハ开も如何に、アハヤ大盤石は上人の
 頭上に落掛つたかと思へたる危うさ、日興日尙の兩法師は膽を潰して、上人の傍に
 走り寄りんとする此時早く、上人微笑みながら手に携へられ、珠數を以つて空天を
 指し一聲高く「妙法蓮華經………」と唱へ給ふ御聲諸共、これは又不思議や空中
 の大石は宛然結び附けたるが如くヂツと止つたるまゝ落ちも来らず、斯くと見たる
 善智法印シヤ物々し、日蓮が法力何程の事べあらんと、シリ／＼と額に汗を流した
 がら打下さんと祈れども如何にかしけん、更に動くべき様子もなく慌てふため、
 上人さこそと打笑みつ、珠數を打振り給ふ時、彼大石は反對に動き出して法印善智
 が頭上目蒐けて落來る危急の場合、善コハ適はじ許せ／＼と一目散跡をも見ずし
 て逃せば逃出す程、愈々急に追つて來るから周章狼狽、終には高慢の心も折れて
 大地に平伏り、善アナ恐ろし、免されよと、泣かぬばかりに頼むにぞ、上人左こそ

と點頭を給ひ、何か口中に唱へられる内に大盤石は傍らに下りて了ふ徐かに法印を
 見下ろして、且如何に善智法印、日蓮は凡僧なれども信する教へは尊き法華經、其
 許とても信仰厚ければ豈夫日蓮に劣るべき、夢疑ひあるべからずと仰せられたるま
 ゝ、跡をも見ずして悠然と小室の御座室にお立歸りになつたが、この小室地方には
 蛭が夥しく居つて、畔を作る男、苗植る賤の女が手足に喰入り、血を流す有様に上
 人氣の毒に思召し、或日御自身田の畔に立つて少時讀經をしられると、不思議やこ
 れより後は夥多の蛭が一疋として人に喰ひ附くものがない、そこで蛭を捉へて見る
 と何れも頭に一點の星が出来て居る、世にこれを小室蛭と云傳へて、未だに上人の
 御徳を語り傳へて居るをうだが、既に候時も夏に入つて蒸暑いが、流石山里は夏も
 木蔭の涼しくて、上人思はず徐る歩きを遊ばされ、知らず／＼石和といふ處までお
 出になつた時、此頃の僻として俄かに夕立を催し雨が降出したが、扱息ふべき家も
 ないから少時木蔭に雨宿りをして居られる内、日もハヤ黄昏れて入相の鐘は谷川の

流れに響くと、遙かの彼方に當つて最も激き燈火は、住める人もやあるならん、
 辿り着いて一夜の宿りを借らんものと、河原傳ひに歩み給へば、柴の扉も疎らにて
 人住むべくもあらぬ家ながら、咳の聲の聞ゆるからは人あるに相違なしとホト／＼
 と訪ひ給へばオーと答へて出で来る足音、見ると皺枯たる一人の男、身には荒芽の
 如き襦袢を纏つて上人の面を不思議さうに見上げ。○「先づ／＼此方へ入せ給へと陋
 せき座敷へ伴ひ入れ。○「御僧は名高き日蓮上人に在さずや、我は鶴飼を業として物
 の命を取りつゝも、只一筋の玉の緒を繋ぎ兼たる悪業人、何卒此身を憫み給ひ、こ
 の宿業を扶けて浮ばせ給はれなば、生々世々の御恩必ず忘れは仕らじと、合す手さ
 へも細く瘦せ、消なんとする燈火の火影に伏して泣沈む、上人最とゞ不憫に思され
 て、打點頭つゝ、御經徐かに誦し給へば、彼も亦苦しげなる息の下より、聲細々とお
 題目を唱ふる有様、誠に殊勝に見へにける、纏て一部の經文を讀了られたる上人を
 彼男が伏し拜みつゝ、○「アラ難有の御高僧、御經の功力に依つて業障忽ち滅し今は

晴れたる空を眺むるが如く、菩提を晦ます雲もなし、これ皆上人の御恩徳、忝けな
 の御教や、尊き上人の御法徳に依り、得難き浮ぶ瀬の佛果を得たる嬉しさよと、瘦
 衰へたる顔に満面喜びの色を湛へ、お題目を唱ふる聲の追々細り行くと共に、谷間
 を流るゝ水の音さへ小夜更けて、消ゆると見へし燈火は、岸の螢の影落て、晩近く
 なり行きて、漸く東雲の白むに連れ、日與日向の兩人がフト四邊を眺めるとコハ如
 何に、在する場所は一面の河原にして、儘かに宿りしと見えし家の跡もない、二人
 のお弟子は餘りの不思議に只呆然としてありければ、上人怪しみ給ふ氣色もなく
 且、兩人先刻よりの光景を何とか見たる、這はこれ孤獨地獄とて、殺生人の墮つべき
 地獄なり、彼死して佛果を得ず、偶々我漢度に依つて快く成佛したるもの、必ず供
 養を怠るべきにあらず、と仰せられ、この後三日の間此地に足を止められ、小石に
 お經を書てこの川に投沈められたといふことで、この靈蹟を鶴飼山遺妙寺といつて
 今に石油に残つて居るが、後に至つてこの古事を淨瑠璃に綴り、又はお芝居でも鶴

飼の勘作の成佛と云つて讀者諸君も大抵御承知だが、この事實は斯の如きものであつたので……、日蓮上人この石和のお歸りに、北原といふ處を通られると、此處に胎藏寺といふ眞言のお寺がある、其處の地藏堂の傍の石に腰打掛られ、暫らく御休息をして居られると、畑耕つ百姓、草蒔童などが集まつて来たから、聽て安國論を取出で、説法をお始めなると、一文不通の田夫野人でも説ける事が一々道理だから、忽ちにして渴仰の心を起して題目を唱へる者も出来る、されば此地を休息村と云つて今にその名が遺つて居るが、上人はその夜に入つて八代といふ處迄お出になると、叢茂る森蔭に、鬼火陰陰として燃上る光景を御覽せられ、その夜お泊りになつた宿の主人にこのお話があると、主人の答へに、近頃双兒を産で死んだ女があつて、その夜から毎晩彼様鬼火が燃るといふ話、定めし兒の可愛さに市宇に迷つて居るのであらうと、上人深く憐れに思召して御回向めらせられたが、今に此地に双兒塚といふ名が残つて居る、それより上人は日野といふ里にお出になると、丹下と

いふ老人が杖に絶つて、井戸を隔つて聲を掛け、吾、それへお出になつたのは日蓮上人に在さずや、日もハヤ暮に近うござれば、どうぞ私の方へお出下さつて一夜の御法話に預りたいと御招待を申上げた、上人も云はれるまゝに三日の間丹下の家に御逗留あつて、懇ろに御教化があつたといふことで、別れに臨むで井戸の向ふから聲を掛たといふので姓を向井と賜はつたと云傳へてある、斯様工合でそれからそれへとお出になつて、遂に信州の蕪木といふ所迄お越になつたが、日敷二十日許りを費して六月の十七日に南部にお歸りになる、すると豫て上人のお望み通りの草庵が出来上つて居つて、眞の荒削の柱で茅の屋根ではあるが、中央に本尊を安置して香華清らかに燈明を照し、南に當つて網代の圍ひが出来て書物を讀むべき窓があつて机が直してある、北の方には押入に並んで物納むべき棚が出来て、庭には眞柴垣を結圍らして種々の草花を植え、身延山の麓流れも清き谿川に沿ふて建られてあるから上人も大さにお喜びになつて、早速此處へ引移つて靜かに餘生を樂まれ、朝には花

を摘み夕には佛に供養して讀經三昧にその日を送つてお在になるが、抑もこの身延山といふは、甲斐國巨摩郡に在て、大檀那南部六郎の邸からは乾に當り、本化の蹟を止め玉ふべき靈場である、北には白根ヶ嶽稜々として天に聳え、南は鷹取山と云つて天竺の鷄足山の如く、西は七面山と名附けて鐵門に似たり、東は天子ヶ嶽高く雲を帯び、又北には早川、南に波木井川、東に富士川、西に大白川といふ流れがあつて、此四つの山、四つの川の中央が則ち身延山であつて、その内に眞の堂位ゐる平地がある、この平地を撰んで草庵を建てたのだから、四季の眺めもなかなか目を樂ませるが、上人は御自身にこの風景を御賞美あるでもなく、日中は信者お弟子の爲に一乘の妙理をお説になつて、夜になると熱心の信者と共にお題目の御修行になつて、觀念の底に一念三千の妙境に入り但見妙事の夢を結び玉へば、妻戀ふ鹿の聲に御目を覺され、一切衆生三觀一心の月曇りなく、无明深重の雲に覆はれ、流轉生死の凡夫と迷ひ果しを思召され

たち渡る、身のうき雲も晴ぬべし

妙の御法の驚の山風

と云ふ和歌をお詠になつたといふことである、然る處、茲に上野國の南條兵衛といふ人が身延に參詣をして、大元蒙古が愈々九州に押渡つて、天下の一大事が出来をしたといふお話をすると問もなく、十月五日に國分八幡の神殿からして火焰の立昇ること數十丈、斯と見て出火ならんと駈集つた人数夥しく、近附いて見るも更に火の氣もないから大きに怪み、如何なる事の前兆にやと安き心もなき内に、その日の申の刻に至つて對州の海上黒み渡り、大元の旗印を押立たる軍船夥しく浮び出で世祖忽泌烈は鳳州の經畧史忻都といふ奴を大將とし、高麗の總官供瑩丘を先陣としてその勢合せて二萬五千、兵船の數九百艘に押乗せて佐須の浦迄押寄せた、守護代がそれとばかりに手勢を引具し、馳向つた時には既に七八艘の船は岸に着いて千人餘りの大元の軍兵が上陸をして守護代の陣を自蒐げて討て蒐る、此方は不意を喰つ

て大きに狼狽へ、物の具取つて防いだが遂に四途路に蒐備されて宗徒の面々討死を
 して、蒙古の軍勢は勢に乗じて方々に火を放つて狼藉する由、對州からして早打を
 以つて櫛の齒を引が如きの注進、執權時宗大に驚いて討手を差向けんと思ひ、内に
 この月十四日になつて蒙古の軍船は壹岐國に取詰め、赤旗を翻翻と翻して攻めてか
 る、壹岐の守護代必死になつて戦つたが、惘れ目に餘る敵の大軍に斬立られ瞬く
 内に手勢を失ひ、その身は陣中に自害をして相果て了ふ、敵軍勝に乗じて筑前の今
 津から箱崎迄攻寄せた、斯くと聞傳へたる九州の東條、臼杵松浦の面々、或は菊池
 原田兒玉の一當手勢を繰出し、敵勢に立向つたが賊は進退の修練を積んだる大軍、
 殊には陣中より電雷の如き響を生じて鐵玉を飛ばし、我軍兵が夥しくこの玉に當つ
 て生命を殞す、左もない者は焼爛れて物の用に立たぬ者が澤山に出来て、忽ち元の
 軍勢に駈立られて云甲斐もなく敗走する、獨り菊池次郎康成が赤阪の松原に踏止ま
 つて戦つたけれども、これ又手酷く攻立られて亂軍となる、東郷覺忠の嫡子三郎景

資、大友直泰、難波某、菊池次郎などの面々は遂に此戰に討死をしたから、我立
 向はんとする勇士もない處へ、蒙古の勢は亂暴狼藉至らぬ限なく、男と見れば町人
 百姓の區別なく打殺し、女を捕へて有無をも云はず自分の船へ送つて縛めて置く
 といふ始末、今は悉く恐れをなして深く山中に姿を隠し、木の間谷蔭に聲を呑み息
 を殺して潜んで居ると、賊卒は微かに立昇る煙を目的に捜し出すので、今は詮術盡
 て生米を咬りながら水を飲んで漸く露命を繋いで居るが、それでも未だ赤兒の啼聲
 を知邊に嗅出されるから、可惜や兒を捨て或は谷川へ生ながら流すといふ憫れな話
 斯様有様だから箱崎から三四十里の間といふものは、遠く逃去つて人の影といつた
 ら元の軍兵ばかり、されば賊軍は心の儘に舉動つて、金銀米穀その他の目覺しい物
 は九百餘艘の船に悉く積入れ、バア／＼勝関を揚て何處ともなく出帆して了たが、
 此事を知るものとは更になかつたさうで、京鎌倉ではオサ／＼合戦の用意に怠り
 なかつたが、今はハヤ相手が居らぬと聞て只徒事となり、此上如何に成行くなり

んと安き心もない折柄、愈々信心の輩の殖るのは日蓮上人ばかり、既に安國論に説かれたる侵退難もハヤ目前に現はれ、國の滅びんこと旦夕に在りと悉く信仰をして益々御繁昌、處が上人に於ては、斯る安危の岐るゝ大難を餘所に見てこの身延の山中に光を隠し、題目と讀經三昧に又他事もないといふ御有様、然る處この年五月に至つて、蒙古から杜世忠を使ひとして、日本國と和睦をせやうといふ申込が来たが、この由太宰府よりして鎌倉に申出たが遂に和議が調はんといふこと、上人は斯と聞傳へられてサテ／＼困つた者である、奢る北條も久しからず、今に破滅する氣の毒さと益々教化に心を傾けて居られると、茲に又彼の法印善智に於ては、先頃上人と法論をして手もなく打負け、法術を比べて甚く苦しめられたる以來、人の胡慮となつて俄に威勢が挫け、土地の人も祈禱を頼むどころでなく、釜注連一ツさせる者もないといふ憫れな有様となつたから、心中に上人を怨むこと甚だしく、何とかして此腹慮をせんものと智慧を絞り、何か心に點頭つゝ急がはしく妻女に支度をさせて

萩の餅を拵へさせて重箱に入れ、自分で提げて小室の御座室にやつて來ると、丁度法話の濟だ時で上人は獨り經文を見て居られる、善智法印めたりと思ふ心を色にも見せず、懇ろに挨拶をしてズツと座敷へ上つて、善智これはいか、上人には何時も御健康の御顔を拜し、誠に恐悦に存じます、就ては今日は少々御話も承り度、嚙徒然に在るならんと存じてお伺ひいたしたる譯、甚だ失禮には候へども、愚妻が手作への萩の餅、お茶受代に召上り下さりますれば、難有の仕合に存じますと、風呂敷トク／＼差出した、上人は莞爾に打笑まれつゝ手伺の白犬を榊端近くお招きになつて、何心なく一切の餅を投與へ玉つたから、犬は喜び尾を打振り、ムシヤ／＼と食つたかと思ふとコハ如何に、クハ／＼と廻ると見る内バツタヲそれへ仆れ、四足を保はし苦しむさま、コレへと驚く上人に引換へ、法印善智は顔を眞蒼にして何かソ／＼狼狽へて居る、犬は益々のた打廻り、血ヘドを吐いて狂ひ死をして丁つたから、扱はこの餅に毒を盛つたか、と、上人ソロソと善智の方を打見やり